原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第22集

原の辻遺跡

原の辻遺跡発掘調査事業に係る範囲確認調査報告書Ⅲ

2001

長崎県教育委員会

原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第22集

原の辻遺跡

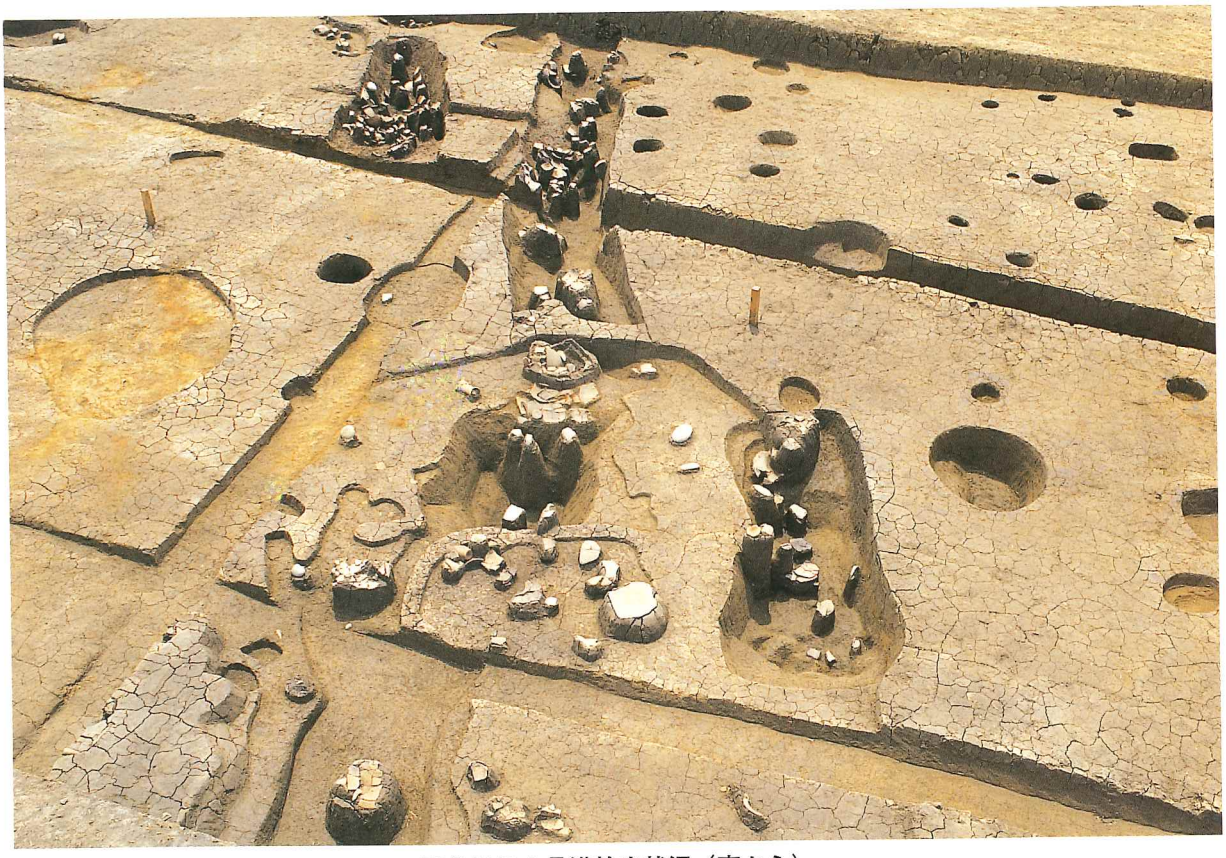
はる　つじ

原の辻遺跡発掘調査事業に係る範囲確認調査報告書Ⅲ

芦辺町不條地区・石田町原ノ久保地区調査区全景（南から北を望む）

大川地区８区濠検出状況

不條地区調査区全景（南から）



不條地区１号溝検出状況（東から）

発刊にあたって

本書は，平成７年度から国庫補助を受けて実施している原の辻遺跡発掘調査事業の平成12年度の報告書です。

原の辻遺跡は，日本最古の船着き場を始め，大陸や朝鮮半島との交流を物語る数多くの遺物が出土することや，大規模な多重環濠が集落を巡ることなどから，『魏志倭人伝』に記載された一支国の王都と特定され，平成９年９月国の史跡指定を受けましたが，さらに今回は，わが国の弥生時代を解明するうえで希有な遺跡として，平成12年11月24日「特別史跡」の指定を受けました。弥生時代の集落遺跡としては全国で３番目ということで，その重要性が高く評価され，誠に喜ばしい限りであります。

本遺跡は，幡鉾川下流域に形成された深江田原の平野に，面積約100ヘクタールの広さに及び，計画的な発掘調査が進められ，これまでに大きな成果をあげてきました。今年度の調査は，史跡指定外の区域について実施しました。丘陵部南側にあたる石田町大川地区・原ノ久保地区と北側の芦辺町八反地区です。

大川地区は平成10年度の調査で初期貿易陶磁や土師器に混ってイスラム陶磁が１点出土し，古代の公的な施設が存在した可能性を示唆しました。今回は１箇所から古代に関連する遺物が確認されました。しかし，さらに重要な発見がありました。それは今まで南側で発見されていなかった濠が確認されたことです。弥生中期の遺構で，今後の調査でどの方向に進んでいくのか期待されます。

原ノ久保地区では，平成８年度に調査した墓域の範囲を確定する目的で調査区設定をしました。住宅地の中では，かなり旧地形が削平を受けていましたが，まだ部分的に残っている所もありました。また少し離れた西側の水田の調査区からは，前回より古い弥生中期の墓地も確認することが出来ました。

不條地区では，これまで確認されていた濠や溝のつながりをさらに確認することができました。

このように，継続した調査によって新しい発見もあり，当時の状況が少しずつ明らかになってきました。遺跡も一段と重みを増してきました。これからも調査は続けられますが，一地域に埋没することなく，東アジア史の視点で調査研究を行い，地域に根ざした整備活用を図ってまいりたいと考えております。

原の辻遺跡の調査成果が，学術資料として活用され，文化財の愛護に役立てていただければ幸いです。

平成13年３月31日

長崎県教育委員会教育長　　木　村　道　夫

例　　言

1．本書は，国庫補助を受けて平成７年度から実施している原の辻遺跡発掘調査事業の平成12年度分の発掘調査報告書である。

2．調査は，芦辺町教育委員会と石田町教育委員会の協力を得て，長崎県教育委員会が主体となって実施したものである。

3．本書に収録した現場担当者は（　）内に記した。また，執筆者については本文目次の項に示した。

①不條地区　　（担当者　町田利幸・杉原敦史・藤村　誠）

芦辺町深江鶴亀触字不條

②大川地区　　（担当者　安楽　勉）

石田町石田西触字大川

③原ノ久保地区　（担当者　安楽　勉）

石田町石田西触字原ノ久保

4．本書関係の出土遺物と図面および写真類は，長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所に保管している。

5．本書の総編集は安楽が担当した。

6．本書で方位の基準としたのは磁北である。図ではＭＮの略字を使用した。

調査関係者は以下のとおりである

調査担当　長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所

調査組織	所　　長	田川　肇	
	課　　長	安楽　勉	
	課　長(兼)	町田　一久	(壱岐教育事務所)
	係　長(兼)	長岡　正記	(　〃　)
	主任文化財保護主事	町田　利幸	
	主任文化財保護主事	村川　逸朗	
	文化財保護主事	杉原　敦史	
	文化財保護主事	藤村　誠	

本 文 目 次

Ⅰ　遺跡の立地と環境

1．地理的環境……1（藤村）

2．歴史的環境……2（〃）

Ⅱ　調査の経緯

(1)　平成７年～平成11年度の調査……5（安楽）

(2)　平成12年度の調査……7（〃）

Ⅲ　調　　査

1．不條地区の調査

(1)　調査概要……8（藤村）

(2)　基本土層と遺物……10（町田・藤村）

(3)　遺構・遺物……15（　〃　）

①溝……15（　〃　）

②土壙及び柱穴……21（　〃　）

(4)　小　結……41（町田）

2．大川地区の調査

(1)　調査概要……51（安楽）

(2)　土　　層……51（〃）

(3)　遺　　構……55（〃）

(4)　遺　　物……55（〃）

3．石田町原ノ久保地区の調査

(1)　調査概要……58（〃）

(2)　土　層……60（〃）

(3)　遺　構……60（〃）

(4)　遺　物……64（〃）

Ⅳ　ま　と　め……72（〃）

挿 図 目 次

第１図　対馬島・壱岐島断面図……1
第２図　壱岐弥生時代遺跡分布図……3
第３図　原の辻遺跡概要図……6
第４図　不條地区調査区位置図……8
第５図　〃　調査区配置図……9
第６図　〃　１層出土遺物……10
第７図　〃　２層出土遺物……11
第８図　〃　２層出土遺物……12
第９図　〃　２層・３層出土遺物……12
第10図　〃　土層及び遺構配置図……13
第11図　〃　３層出土遺物……15
第12図　〃　１号溝・２号溝実測図……16
第13図　〃　１号溝出土遺物……17
第14図　〃　１号溝出土遺物……18
第15図　〃　２号溝出土遺物……19
第16図　〃　２号溝出土遺物……20
第17図　〃　２号・３号・４号・５号・６号土壙実測図・土層図……22
第18図　〃　７号・８号・９号・10号・11号土壙実測図・土層図……23
第19図　〃　12号・13号・14号・15号土壙実測図・土層図……24
第20図　〃　16号・17号・18号・21号・23号土壙実測図……25
第21図　〃　22号土壙実測図・土層図……26
第22図　〃　24号土壙・柱穴61・柱穴71実測図・土層図……27
第23図　〃　１号土壙出土遺物……29
第24図　〃　１号土壙出土遺物……30
第25図　〃　３号土壙出土遺物……30
第26図　〃　４号土壙出土遺物……30
第27図　〃　５号土壙出土遺物……31
第28図　〃　７号土壙出土遺物……31
第29図　〃　８号土壙出土遺物……31
第30図　〃　９号土壙出土遺物……32
第31図　〃　10号土壙出土遺物……32

第32図　不條地区11号土壙出土遺物……33
第33図　〃　12号土壙出土遺物……33
第34図　〃　13号土壙出土遺物……34
第35図　〃　14号土壙出土遺物……35
第36図　〃　15号土壙出土遺物……35
第37図　〃　16号土壙出土遺物……36
第38図　〃　18号土壙出土遺物……36
第39図　〃　21号土壙出土遺物……36
第40図　〃　22号土壙出土遺物……38
第41図　〃　22号土壙出土遺物……39
第42図　〃　23号土壙出土遺物……40
第43図　〃　柱穴91出土遺物……41
第44図　大川地区調査区域図……52
第45図　〃　7・8・9区土層及び遺構図……53
第46図　〃　7・8・9区出土の遺物実測図……56
第47図　〃　出土遺物実測図……57
第48図　原ノ久保地区調査区域図……59
第49図　〃　11・12区出土遺構及び土層図……61
第50図　〃　10区出土小児甕棺実測図……63
第51図　〃　11区出土小児甕棺実測図……64
第52図　〃　10・11区出土小児甕棺実測図……65
第53図　〃　12区出土石棺墓実測図及び土器実測図……66
第54図　〃　10・12区出土遺物実測図……68
第55図　〃　11区出土遺物実測図……69
第56図　〃　4区出土ガラス玉実測図……69
第57図　〃　地区出土石器実測図……71

表　目　次

第1表　壱岐弥生時代遺跡分布図……3

図 版 目 次

ＰＬ１　不條地区調査区全景航空写真
ＰＬ２　調査区全景（南から）・調査風景・調査風景・１号溝検出状況（東から）
１号溝横断土層・１号溝遺物出土状況・２号溝横断状況（東から）・２号溝横断土層
ＰＬ３　２号溝遺物出土状況・４号土壙横断土層・６号土壙横断土層
９号土壙遺物出土状況・10号土壙横断土層・10号土壙遺物出土状況
11号土壙横断土層・11号土壙遺物出土状況
ＰＬ４　12号土壙遺物出土状況・13号土壙横断土層・13号土壙遺物出土状況・16号土壙遺物出土状況
21号土壙横断土層・21号土壙遺物出土状況・22号土壙横断土層
22号土壙遺物出土状況
ＰＬ５　23号土壙横断土層・23号土壙遺物出土状況・24号土壙横断土層
柱穴51石製礎盤検出状況・柱穴61横断土層・柱穴71横断土層
11号土壙イノシシの歯出土状況・３層出土遺物
ＰＬ６　遺跡遠景（西から）
ＰＬ７　大川８区濠検出状況・大川８区濠北側土層
ＰＬ８　大川９区濠検出状況・大川９区濠東側土層
ＰＬ９　原ノ久保10区西側土層・原ノ久保11区東側土層
ＰＬ10　原ノ久保11区遺物出土状況・原ノ久保12区遺物出土状況
ＰＬ11　原ノ久保11区土器出土状況・原ノ久保７区溝検出状況
ＰＬ12　原ノ久保10区小児甕棺墓出土状況（上面）・原ノ久保10区小児甕棺墓出土状況（下面）
ＰＬ13　原ノ久保11区出土小児甕棺墓（上面）・原ノ久保11区出土小児甕棺墓（下面）
ＰＬ14　原ノ久保12区石棺墓出土状況（上面）・原ノ久保12区石棺墓出土状況（下面）
ＰＬ15　大川８区遺物出土状況（手前は濠上面）・原ノ久保８区土層
ＰＬ16　大川８区濠調査風景・原ノ久保11区調査風景

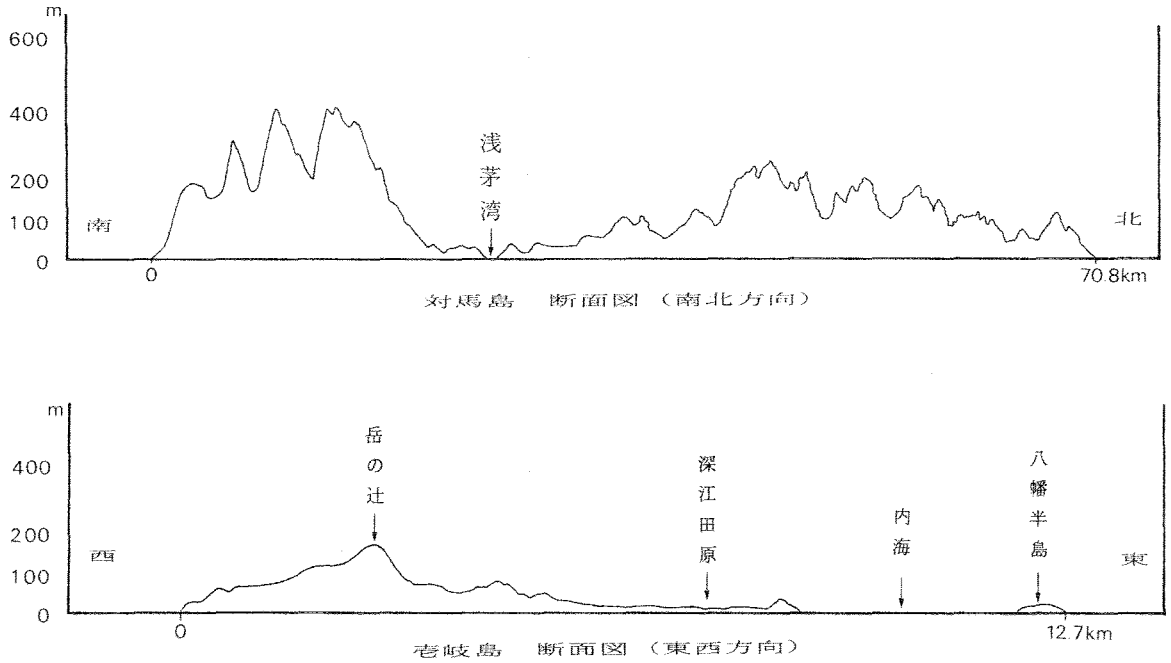
Ⅰ．遺跡の立地と環境

1．地理的環境

玄界灘に飛び石のように浮かぶ壱岐島は東西約15km，南北約17km，面積約138km²，対馬とともに長崎県に属し，人口は約３万５千人の島である。朝鮮半島釜山から対馬までは約52km，対馬から壱岐及び壱岐から福岡県博多までは約67km，壱岐から佐賀県呼子までは約26kmの距離に位置する。福岡県博多港とはフェリーで約２時間半，ジェットフォイルで約１時間，佐賀県呼子港とはフェリーで１時間で結ばれている。長崎県への海上交通アクセスはなく，行政的には長崎県に属するものの文化的・経済的には福岡県との繋がりが深い。

島は全体が平坦な溶岩台地で，起伏は少なく最も高い岳の辻でも標高は213mにすぎない。現在島の面積の30%が耕地で森林は35%，険しい山々からなり森林が島全体の90%を占める対馬とは地理的に同じような位置にありながらも好対照をなしている。島の基盤は古第三期層で，玄武岩がその表面を覆い，弥生時代以降の箱式石棺や古墳石室の石材として利用されている。離島であるがゆえ自然環境の破壊は都市部ほど進まず，歴史・文化の研究フィールドとしてはとても有効な場所である。

『魏志』倭人伝には「・・・耕田猶不足食・・・」とあるが，島南東部の「深江田原」は県内第２の沖積平野で，有数の穀倉地帯となっている。原の辻遺跡はこの平野の中に南北方向に舌状に突き出した台地（標高８～18m）と現在の水田面（標高５～７m）からなり，遺跡の範囲は約100ha（福岡ドーム約30個分）である。遺跡北側には全長約９km，島内最大の幡鉾川が東西に流れ，東は約1.5km離れた内海（うちめ）に注ぎ，西は郷ノ浦方面へ続いている。また，遺跡の位置する「深江田原」は冬になると強い北西の季節風が吹くことでも知られている。



第１図　対馬島・壱岐島断面図

2．歴史的環境

玄界灘に浮かぶ壱岐島は古くから対馬とともに大陸や朝鮮半島との人的・物的な交流拠点として，また防衛上の要衝として歴史的に重要な役割を担ってきた。ここでは弥生時代を中心に原始・古代の壱岐島の状況について述べてみたい。

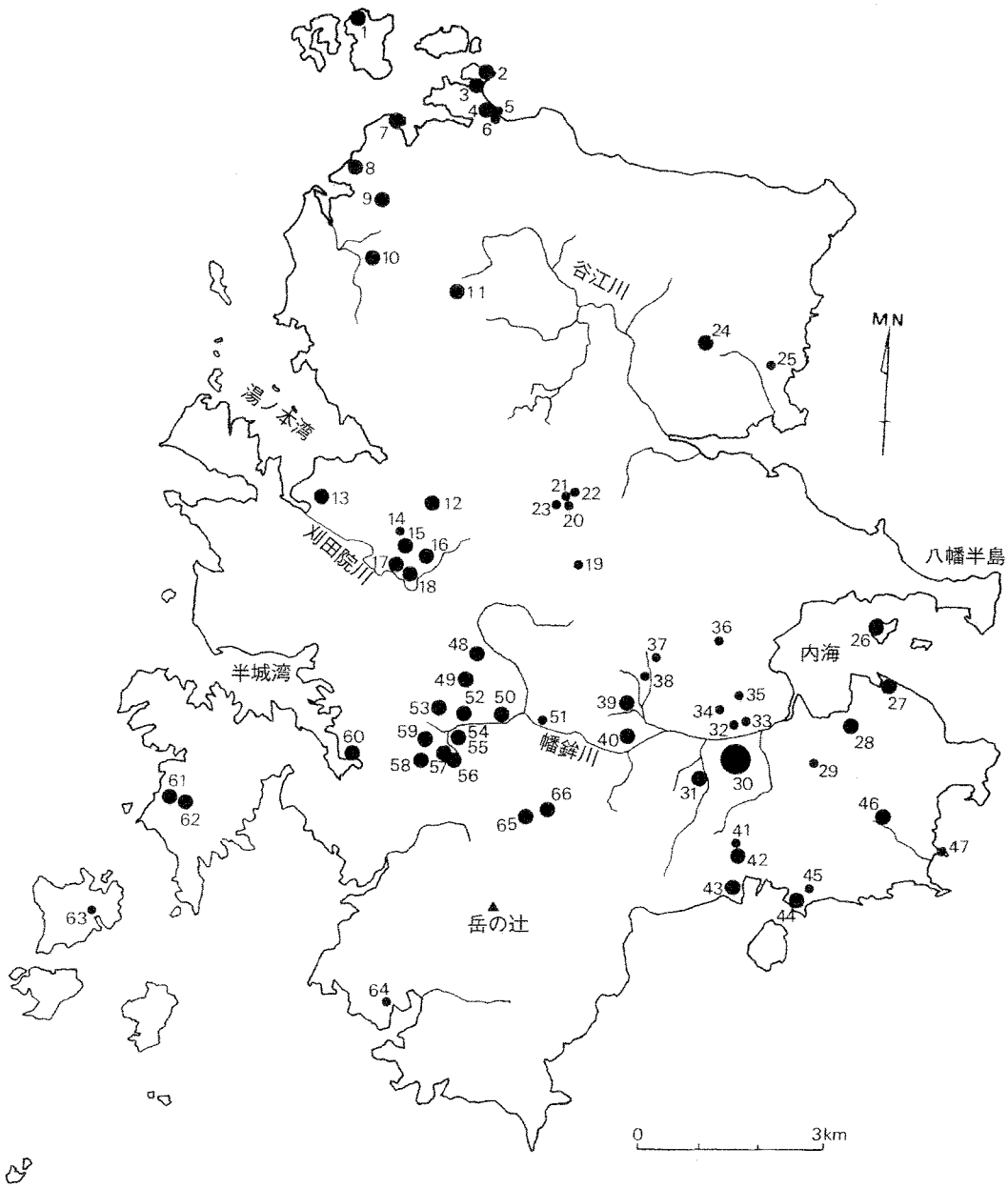
旧石器時代の遺跡は原の辻遺跡・興原遺跡など確認されているものはわずかである。縄文時代の遺跡も実際に確認されているものは７遺跡程度で，その大半が干潮になって遺跡が現れる潮間帯遺跡である。それに対して弥生時代の遺跡は第２図に示した66カ所が確認されている。弥生時代の遺跡分布の特徴として，縄文時代の遺跡が壱岐島西側の海岸部に集中しているのに比べ，弥生時代の遺跡は壱岐島全体に広がっている。これは漁労・採集を中心とした社会から農耕社会への変化に対応したものとも考えられる。また，弥生時代の遺跡の多くが島内を流れる河川の流域に多く見られるのも特徴の一つであろう。ただし第２図からもわかるように谷江川流域には遺跡が立地していない。これは島の北東部は発達した海蝕崖で湾入が少ないこと，また島の中央部が低地帯として壱岐島最大の穀倉地帯となっているのに対し，島の南北は表面を玄武岩で覆われた低平な溶岩台地となっているという地形的な問題からだと考えられる。

壱岐が初めて歴史に登場するのは３世紀の中国の歴史書『魏志』倭人伝で，その中に「一支国」として記載され，弥生時代終末期の壱岐の状況が紹介されている。「(対馬国から）南に瀚海という海を渡り，千余里行くと，一大国（一支国）に着く。長官は卑狗，副官は卑奴母離と呼ばれている。広さは四方三百里ばかり。竹木・叢林が多く，三千ばかりの家がある。やや田地があるが，食べるには足らない。南北に海を渡って米などを買ってくる。」短いが当時の壱岐を知る貴重な記述である。

壱岐島内では遺跡の範囲，出土遺構・遺物の質・量ともに群を抜き，平成７年，「倭人伝」に記された一支国の拠点集落と特定されたのが原の辻遺跡である。集落の形成は弥生時代前期末に始まり，弥生時代中期前半には多重の環濠を巡らし大集落として整備され，その後古墳時代前期に集落は解体していったようである。調査の進展によって台地を巡る多重の濠は勿論のこと台地北西低地部では「倭国乱る」の影響とも考えられる環濠の再整備や，環濠のさらに外側に掘られた濠群も確認されている。また，遺跡内の台地頂上部では高床式建物の存在を想定させる柱穴群の発見，台地西側では東アジアでは最古の船着き場跡の発見，同じく台地西側での水田畦畔遺構の発見など時代に対応し計画的に築き上げられていった一支国の王都としての姿を徐々に現してきた。

また，現在までに環濠内に１箇所，環濠の外に５カ所の墓域も確認されている。墳墓の形式は北部九州系の成人用甕棺は少なく，主体となるのは箱式石棺墓・土壙墓である。石田大原・大川・原ノ久保Ａ地区の墳墓からの副葬品からは王族級の有力な集団の墳墓の存在も伺える。なお，第２図中の鶴田遺跡・閏繰遺跡も原の辻遺跡関連の墓域と考えられている。

原の辻遺跡の出土遺物で特に注目されるのは大陸・朝鮮半島系の遺物の豊富さである。五銖銭・貨泉・大泉五十などの中国前漢や新の時代の貨幣や朝鮮半島系無文土器・楽浪系滑石混入土器・楽浪系瓦質土器・三韓系瓦質土器・陶質土器，規矩鏡・獣帯鏡・内行花文鏡などの中国鏡，戦国式銅剣など



第２図　壱岐弥生時代遺跡分布図

第１表

番号	遺跡名称	種別	立地	番号	遺跡名称	種別	立地	番号	遺跡名称	種別	立地
1	若宮島石棺群	墳墓	丘陵	23	大谷第３遺跡	遺物包含地	丘陵	45	志自岐遺跡	遺物包含地	丘陵
2	オオタキ遺跡	墳墓	丘陵	24	大左右遺跡	遺物包含地	丘陵	46	坂遺跡	遺物包含地	丘陵
3	串山ミルメ浦遺跡	貝塚・遺物包含地	砂嘴	25	津持遺跡	遺物包含地	丘陵	47	大久保遺跡	墳墓	岬
4	天ケ原遺跡	遺物包含地	砂嘴	26	青島遺跡	遺物包含地	砂丘	48	山飛遺跡	遺物包含地	台地
5	セジョウ神遺跡	銅矛出土地	砂嘴	27	堂崎遺跡	遺物包含地	丘陵	49	高松遺跡	墳墓	台地
6	天ケ原石棺群Ａ地点	墳墓	丘陵	28	天水遺跡	遺物包含地	平地	50	桜江遺跡	遺物包含地	台地
7	正村遺跡	墳墓・遺物包含地	砂嘴	29	渕辻遺跡	墳墓	台地	51	朝日遺跡	遺物包含地	台地
8	大石遺跡	遺物包含地	丘陵	30	原の辻遺跡	遺物包含地	台地	52	柳田遺跡	遺物包含地	台地
9	水ノ元遺跡	遺物包含地	丘陵	31	鶴田遺跡	墳墓・遺物包含地	台地	53	山中遺跡	墳墓	台地
10	東ノ木遺跡	墳墓	丘陵	32	ミヤクリ（潤縄）遺跡	墳墓	丘陵	54	鉢形遺跡	遺物包含地	山地
11	丸尾遺跡	遺物包含地	丘陵	33	松尾遺跡	墓地	台地	55	天手長男神社遺跡	遺物包含地	山頂
12	高峰遺跡	遺物包含地	丘陵	34	安国寺前遺跡	遺物包含地	台地	56	車出遺跡	遺物包含地	平地
13	石路遺跡	遺物包含地	丘陵	35	清水遺跡	墓地	丘陵	57	田ノ上遺跡	遺物包含地	丘陵
14	牛神遺跡	墳墓	丘陵	36	深江本村遺跡	遺物包含地	山	58	大谷遺跡	遺物包含地	台地
15	国柳遺跡	墳墓	丘陵	37	定光寺前遺跡	遺物包含地	平野	59	戸田遺跡	遺物包含地	台地
16	カラカミ遺跡	遺物包含地	丘陵	38	都城遺跡	遺物包含地	丘陵	60	内野遺跡	遺物包含地	海底
17	小場遺跡	墳墓	丘陵	39	興触遺跡	遺物包含地	丘陵	61	田頭遺跡	遺物包含地	平地
18	経ノ辻遺跡	遺物包含地	丘陵	40	興原遺跡	遺物包含地	丘陵	62	南久保遺跡	遺物包含地	丘陵
19	通触遺跡	遺物包含地	丘陵	41	津の宮遺跡	墳墓	丘陵	63	大浦遺跡	遺物包含地	台地
20	大谷第２遺跡	遺物包含地	台地	42	白水遺跡	遺物包含地	台地	64	坪遺跡	遺物包含地	丘陵
21	大谷第１遺跡	遺物包含地	丘陵	43	中尾遺跡	遺物包含地	丘陵	65	橋町遺跡	遺物包含地	台地
22	月読神社前遺跡	遺物包含地	丘陵	44	池田遺跡	遺物包含地	平地	66	宮原遺跡	遺物包含地	台地

※上記分布図及び一覧表は平成６年３月刊行の長崎県文化財調査報告書第112集長崎県遺跡地図－壱岐地区－（長崎県教育委員会）を元に作成した。

枚挙に暇がない。さらに，船着き場に使用された敷葉・敷粗朶工法は現代の土木技術とも相通ずるハイレベルなもので，こういった大陸系の遺物や高度な建築・土木技術は，自ら海を渡った人々や対馬海峡を渡りこの地を訪れた人々との活発な交流によってもたらされたものに違いない。

島内で原の辻遺跡以外の重要な集落遺跡としてはカラカミ遺跡と車出遺跡が知られている。刈田院川の中流右岸に点在する遺跡群の中心がカラカミ遺跡である。原の辻遺跡と同じく弥生時代前期末から集落の形成が始まったようで，高地に位置するものの，環濠が巡っている。朝鮮半島系の瓦質土器や楽浪系滑石混入土器の出土は大陸との頻繁な交流を物語る。獣骨を利用した銛・ヤス・アワビ起こしなどの漁労関係の遺物が多く，漁労や交易に従事した集団の基地的な集落であった可能性が強い。また方格規矩鏡や銅鏃が出土，卜骨も出土するなど原の辻遺跡との類似性は大きいが，集落の規模が小さく，遺跡群の中心集落ではあるものの，原の辻遺跡の集団よりも階層的に下位にあったと考えられる。

幡鉾川上流の遺跡群の中心が車出遺跡である。車出遺跡の位置する柳田地区は壱岐西部で比較的まとまりのある平野部が形成され，その中心にあたる鉢形山には旧式内社で壱岐一の宮と称される天手長男神社が位置する。大陸との交流を示す遺物として方格規矩鏡・貨泉が出土している。また祭祀的な性格を持つと思われる土器溜や卜骨も確認されている。最近の調査結果から隣接する田ノ上遺跡や鉢形山遺跡なども車出遺跡の範疇としてとらえ，当時の一支国内の有力な集団がここにも存在したとも考えられる。しかし原の辻遺跡と同じ水系で直線で約５km程上流であること，また集落の形成時期が弥生中期であることから，何らかの理由で原の辻遺跡から派生した集団によって集落が営まれた可能性が強いと考えられる。一支国を形成する集落の一つとして，ここにも有力者層が存在し，北から南に深く湾入した半城湾を意識し，島の西側をかためるための役割を果たしていた可能性もある。

対馬，そして朝鮮半島を臨む島の北端部にも多くの弥生時代の遺跡が点在する。中でも注目に値するのが天ケ原セジョウ神遺跡である。護岸工事中の発見のため出土状況はわからないが，海岸の石祠の下から三本の中広形銅矛が出土している。これは，対馬に次ぐ国境の島としての外敵の侵入を防ぎ，航海の安全を守るという壱岐島の役割を我々に示している。

古墳時代になると壱岐には県内の半数以上の264基もの古墳が築造される。５世紀後半に築造されたとみられる大塚山古墳は，原の辻遺跡を見下ろす山の上に築かれ，この地を生活の基盤とした豪族の墳墓と考えられる。しかし，その後約１世紀近くの空白を経て巨大な古墳が島の中央部に多く見られるようになる。壱岐島の穀倉地帯を捨てて何故この地に移ってきたのか詳細はわからない。全長91m，県内最大の前方後円墳である双六古墳や石室内に船の線刻が見られる鬼屋窪古墳，金銅製の飾り金具をつけた馬具の出土が中央政権との関わりを示唆する笹塚古墳など，壱岐の古墳を代表する巨石墳が群集している。律令制下では国に大・中・小国の等級があり国司の定員などが決められ，壱岐・対馬は下国とはいえそれぞれ一つの国として扱いを受けた。当時の壱岐直の居館跡と嶋分寺が置かれていたのも島の中央部で，古代においてこの地は交通の要衝として重要な地域であったと思われる。

壱岐島は国境に近いため人的・物的交流の最前線であるのは当然のことながら，外敵の侵略に対しても大きな危険にさらされることになる。1019年，女真族刀伊が50隻の船で押し寄せ，壱岐の島は甚大な被害を被った。

Ⅱ　調査の経緯

(1)　平成７年度～11年度

原の辻遺跡では，昭和49年度に実施した緊急調査によって弥生前期末から中期にかけての墓域が発見されて以来，昭和50～52年にかけての範囲確認調査を行い，台地の広い範囲に遺物が見られることが確認された。それ以降「幡鉾川流域総合整備計画」に伴って丘陵部をとり囲む低地水田部まで調査が拡げられ，内濠，中濠，外濠をもつ多重環濠集落であることが明らかになり「魏志倭人伝」に記された「一支国」の王都と特定された。

しかし，遺跡の広さは100haにも及ぶと推定されたため，より詳細な遺跡の内容把握に努めることになり，平成７年度から国庫補助事業による範囲確認調査を進めることとなった。平成７年度は原地区の丘陵部頂上部分と，大川地区の墓域が調査された。丘陵部頂上部は原の辻遺跡の中枢部分と考えられている地域で，祭儀場跡が明らかになっており，さらに祭儀建物群が検出された。居住関係では，弥生中期～古墳前期の竪穴住居跡と弥生前期末の土器が出土したことから，この時期まで居住があったことが判明した。また溝も東西方向に走り区域を区切っていることも確認した。墓域は昭和51年度の範囲確認調査で弥生中期末～弥生後期末の箱式石棺墓，土壙墓，小児甕棺墓などが検出され，鉄製鉇，ガラス製勾玉などの副葬品が出土している。その後の畑地の深耕でも舶載鏡や有鉤銅釧，ガラス玉多数が採集されている。調査では，箱式石棺墓５基，小児甕棺墓７基，溝状遺構などが検出され，副葬品として鉄剣，鉄鋤先，碧玉製管玉，ガラス製小玉などが出土している。

平成８年度は原地区の丘陵部で確認された溝や住居などの遺構が東側斜面にどのように拡がるかを追求した。また原ノ久保Ａ地区では墓域を調査した。原地区では，弥生中期から古墳前期の竪穴住居跡９棟，溝４条，濠２条，小児甕棺墓６基が検出され，内濠内部の丘陵部東側斜面に居住域が拡がることと，濠が東に伸ることが確認された。原ノ久保Ａ地区では箱式石箱墓13基，集石遺構４基，石蓋土壙墓・土壙墓６基，土壙９基，小児甕棺墓３基，集石遺構４基，溝２条が検出され，副葬品として９号土壙から長宣子孫銘の内行花文鏡１面，筒形不明銅器１点の他ガラス製丸玉，ガラス製勾玉，碧玉石製管玉が出土した。また，８号箱式石棺墓からは，小形彷製鏡が出土し，この墓域が弥生終末期における有力者階層のものであることを裏付けることとなった。

平成９年度は芦辺町原・高元地区と石田町池田大原・原ノ久保Ｂ地区を対象とした。原地区では，前年度調査区の南側と丘陵西側斜面の調査を実施した。その結果，弥生中期から古墳前期の竪穴住居跡17棟，濠１条，溝６条，小児甕棺墓５基などの遺構が検出され，住居跡が多数重複しており，東側斜面が長期間にわたって居住域として利用されていることが判明した。また小児甕棺墓は濠の両岸に並んだ状況で検出され，本来の墓地のあり方とは性格が異なると推測される。池田大原は丘陵つけ根の西側にあたり，調査が空白の地域であった。この区域からは，東西方向にのびる弥生中期の溝１条が検出されたが，性格については丘陵部を区切る環濠外の防衛ラインの一つとも推測されている。

平成10年度の調査は，芦辺町原・高原地区と石田町大川・原ノ久保地区である。原・高原地区では，

第３図　原の辻遺跡概要図（１：8,000）

丘陵部西側中央部に若干地形がくびれた部分があり，ここにも区画性をもつ濠が確認できるのではないかという目的で調査区を設定した。その結果，丘陵北東側の低地に近い水田からは後期を主体とする層から多量の土器，石器とともに半島系の土器も出土した。また道路状になるのではないかと思われる遺構も検出されている。さらに一段高い部分からは住居跡や多量の土器とともに，一部貝塚が形成された状況も確認された。大川地区は平成６年度に農道拡幅工事に先立って行われた調査で，初期貿易陶磁などの古代の遺物が出土しており，さらに範囲の拡がりや，新たな遺構の検出を目的として行った。その結果，古代遺物はこれまでより東西の方向に拡がることが明らかになった。さらに注目を引いたのが，イスラム陶器の出土であった。小破片が１点とは言え，その出土意義は大きなものがある。原ノ久保地区の調査は，平成８年度調査の墓域がさらに南側まで拡がるのかということであったが，すでに削平された部分も多く，遺構を確認するには至らなかったが，甕棺や石棺の破片は若干残されており，墓域が拡がっていたことを把握できた。

平成11年度の調査は，芦辺町不條地区，石田町柏田・苣ノ木地区の調査を行った。不條地区は丘陵北西部の低地である。調査の結果，弥生時代の旧河道と濠を２条確認した。濠は弥生中期に掘られて一旦埋没したあと，弥生後期に掘られて終末から古墳前期に再び埋没したもので，内濠と外濠にあたるものである。この他の遺構は弥生後期から中期と考えられる柱穴が検出されている。柏田地区は古代の遺物が出土した大川地区に隣接している。昭和51年度に壺棺墓１基が出土した第20試掘壙のまわりに設定したが，関連の遺物の出土はなかった。しかし，旧石器の土層が一部確認された。小児甕棺墓が検出された安川建設北側にも設定したが，関連の遺構は検出できなかった。苣ノ木地区では弥生時代の明確な包含層は確認できなかったが，南西部試掘壙からは旧石器時代の良好な包含層が検出され，ナイフ形石器や台形様石器が出土した。

(2) 平成12年度の調査

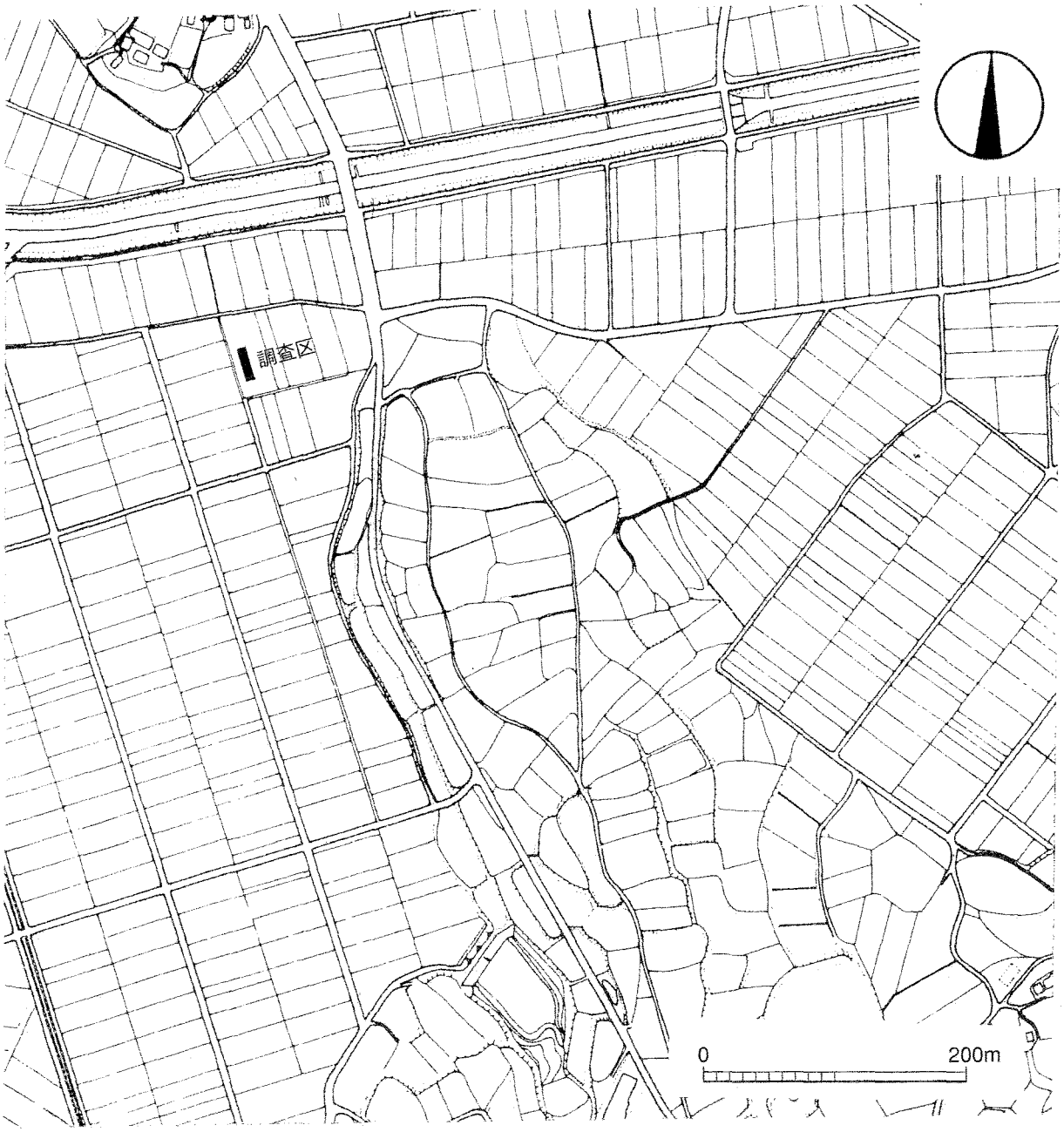
今年度の調査は，芦辺町不條地区と石田町大川・原ノ久保地区を対象とした。不條地区は丘陵部西側低地の平成10年度船着き場付近水路等状況調査Ｂ区西側に接して調査区を設定した。その結果，遺構は弥生前期末から中期初頭にかけての溝２条と，弥生中期前半の土壙６基，中期後半の土壙11基などと，遺物は弥生中期を中心とした土器・石器が出土したが，弥生前期末の土器も出土している。大川地区の調査では，丘陵部つけ根のやや東寄りの試掘壙から，濠が確認された。これまで確認されている濠には方向からして繋らないもので，新しい遺構の発見である。原ノ久保地区では，原ノ久保Ａ地区の墓域がどこまで拡がるのかを目的として調査区を設定した。その結果，平成８年度調査の墓域の範囲が絞られてきた反面，弥生中期の新たな墓域が確認され，石棺墓１基と小児甕棺２基が検出されている。

Ⅲ 調　　査

1．不條地区の調査

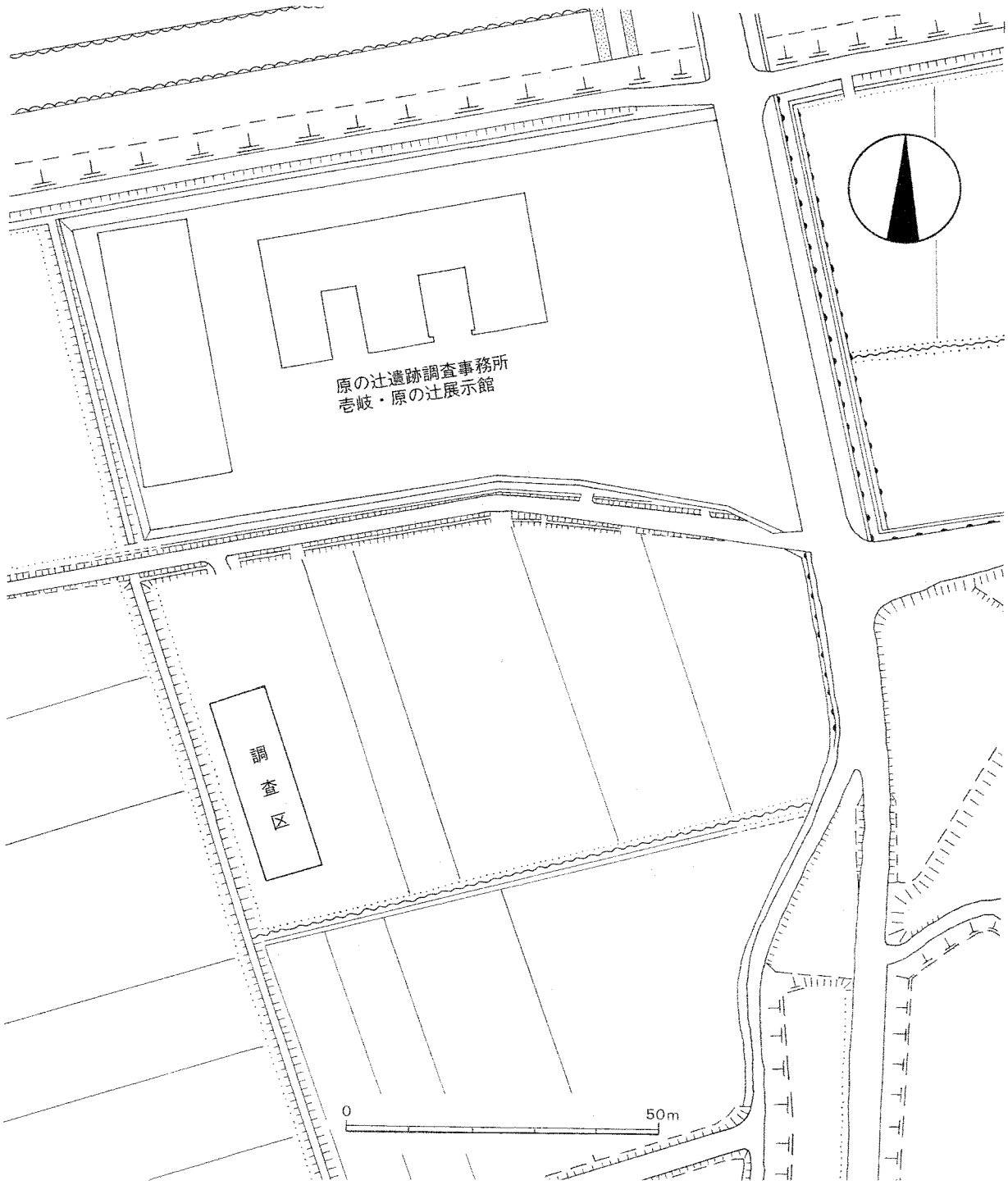
(1) 調査概要（第４図，第５図）

平成10年度の船着き場付近水路等状況調査（以下平成10年度特定調査と記す）・平成11年度の環濠等状況調査（以下平成11年度特定調査と記す）では，弥生時代後期に環濠の外側に掘られた複数の濠や，区画や用排水目的でつくられた溝が検出されるなど，旧河道に挟まれた台地北西低地部の状況がしだいに明らかになっていった。また北西低地部からは掘立柱建物跡とみられる柱穴が多数確認され，



第４図　調査区位置図（１/5000）

低地部における生活域も判明してきた。今年度の調査では，過去２年間の調査で検出された濠や溝がどのようにつながり，またどのような広がりを見せていくのか。前期末から中期の居住域とされるこの一帯が時代とともにどのように変化していたのかをさらに詳しく調査するため，平成12年５月８日～平成12年５月17日に範囲確認調査を実施した。調査区は30m×10mを設定し，300m²を調査した。また，調査区南側につながるかたちで本年度環濠等状況調査Ａ区（50m²）を設定して調査した。



第５図　調査区配置図（１/1000）

(2) 基本土層と遺物

遺構上面は度重なる水田化により攪乱を受けている。

また，２層・３層を掘り込む形で暗渠排水がつくられていた。この暗渠排水は調査区全域に縦横に検出され，深いところでは弥生の遺構面に達し，遺構も多く暗渠によって切られていた。

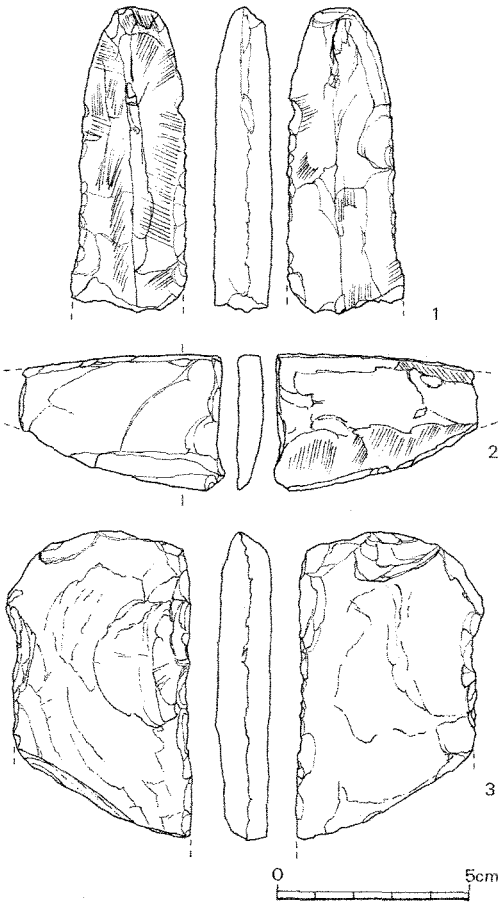
１層及び出土遺物（第６図，第10図）

基本土層は,1層が褐色の現在の水田面である。

１は石剣である。中央に陵を持ち，正裏面ともに磨きをかけ，下部は欠損する。断面は菱形を呈している。２は石庖丁の欠損品である。刃部の研ぎだしが裏面に残る。３は正面の左側縁に抉り調整を行い，右側縁は細かい調整剥離を加えた抉入石斧の製作工程段階と考えられる。

２層及び出土遺物（第７図,第８図,第９図,第10図）

２層は灰黄色の土層で，中世の白磁Ⅳ類も混入しているが明治の陶磁器が出土しているので，近世から近代の水田耕作面であろう。

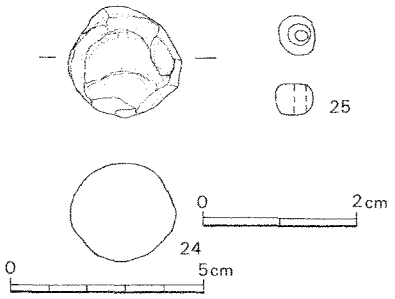


第６図　１層出土遺物（１/２）

１は石鑿製作４段階工程の資料である。正裏面に一部研ぎが入り，断面長方形をなし石材に粘板岩を用いている。２は石鑿製作２段階工程の資料である。研ぎに入る前の石鑿の素材で断面長方形を呈し，石材に粘板岩を用いている。３は石鑿製作２段階工程の資料で研ぎを行っていない。断面は厚みのある三角形を呈し石材は粘板岩を素材としている。４は石鑿製作３段階工程の資料で断面長方形の正面，裏面，両側面，上面，下面の６面にカットを行い石材に粘板岩を用いている。５は石鑿製作４段階工程の資料である。断面はカマボコ状を呈し，裏面と右側面に研ぎ痕が残り石材は粘板岩を素材とする。６は石鑿製作工程４段階の資料である。裏面を研ぎだし，その他は敲打による調整を行い断面はカマボコ状を呈する。７は石鑿製作工程４段階の資料である。正面，右側面，裏面の一部に研ぎだしを行い断面は厚みのある三角形を呈し，石材は粘板岩を用いる。８は石鑿製作４段階工程の資料で正面，左側面，裏面の一部に研ぎを行い断面は長方形をなし石材に粘板岩を用いている。９は石鑿製作工程３段階の資料である。正面は，敲打痕が残り断面はカマボコ状を呈する。石材は粘板岩を素材とする。10は石鑿の完成品であるが刃部を欠損する。断面は長方形をなし，石材に粘板岩を使用する。11は石鑿の完成品である。上面のみに凹凸を残し，その他は平坦に仕上げている。石材は粘板岩を用いている。12は石鑿の完成品で上面に凹凸を残し石材は粘板岩としている。13は石鎌製作途中の資料で刃部となる部分は下端から調整剥離を行い，背の部分にも加撃を加えている。14は石剣であるが風化のた

第７図　２層出土遺物（１～14は１/２・15～17は１/３）

め一部に研ぎだしを認められるのみである。石材は硬質砂岩を用いている。15は敲打による整形段階の蛤刃石斧である。16は敲打後に4面に研ぎを行う石斧で刃部は欠損している。17は砥石として使用したもであるが風化のため使用痕不明となっている。18は黒曜石製の石鏃である。断面は凸レンズ状をなし，正裏面ともに丁寧な押圧剥離を繰り返して作出している。製作技術の状況から縄文時代の所産と考えられる。19は黒曜石製の局部磨製石鏃である。断面は凸レンズ状をなし，正面のみに研ぎを行い周縁は押圧剥離により作出し左側の脚を欠損している。20は黒曜石製の石鏃で，断面やや扁平な凸レンズ状をなしている。加工整形が稚拙で剥片鏃の範疇に含まれる要素を持つ。21はサヌカイト製で有茎石鏃である。肉厚で断面は凸レンズ状をなしている。22は黒曜石製のスクレイパーで，石匙の形状が想定されるが，右側面を欠損する。23は黒曜石製のスクレイパーである。左側面に細かいリタッチ調整を施し，裏面は自然面を残している。24は砂岩を丸く加工した玉石である。25は濃いブルーの色をしたガラス小玉。

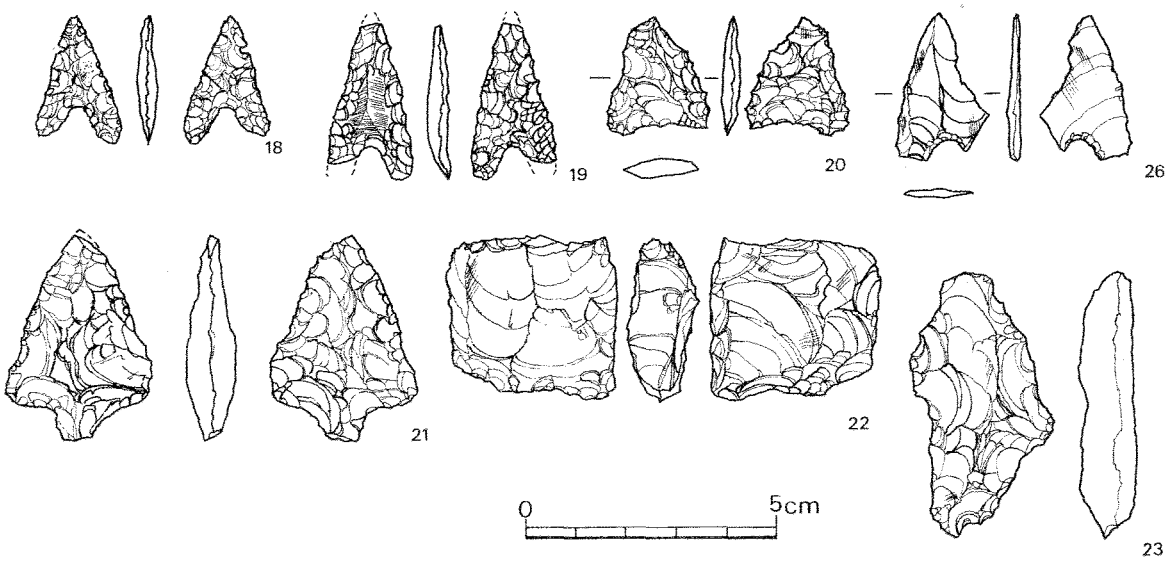


第8図　2層出土遺物(24は1/2・25は1/1)

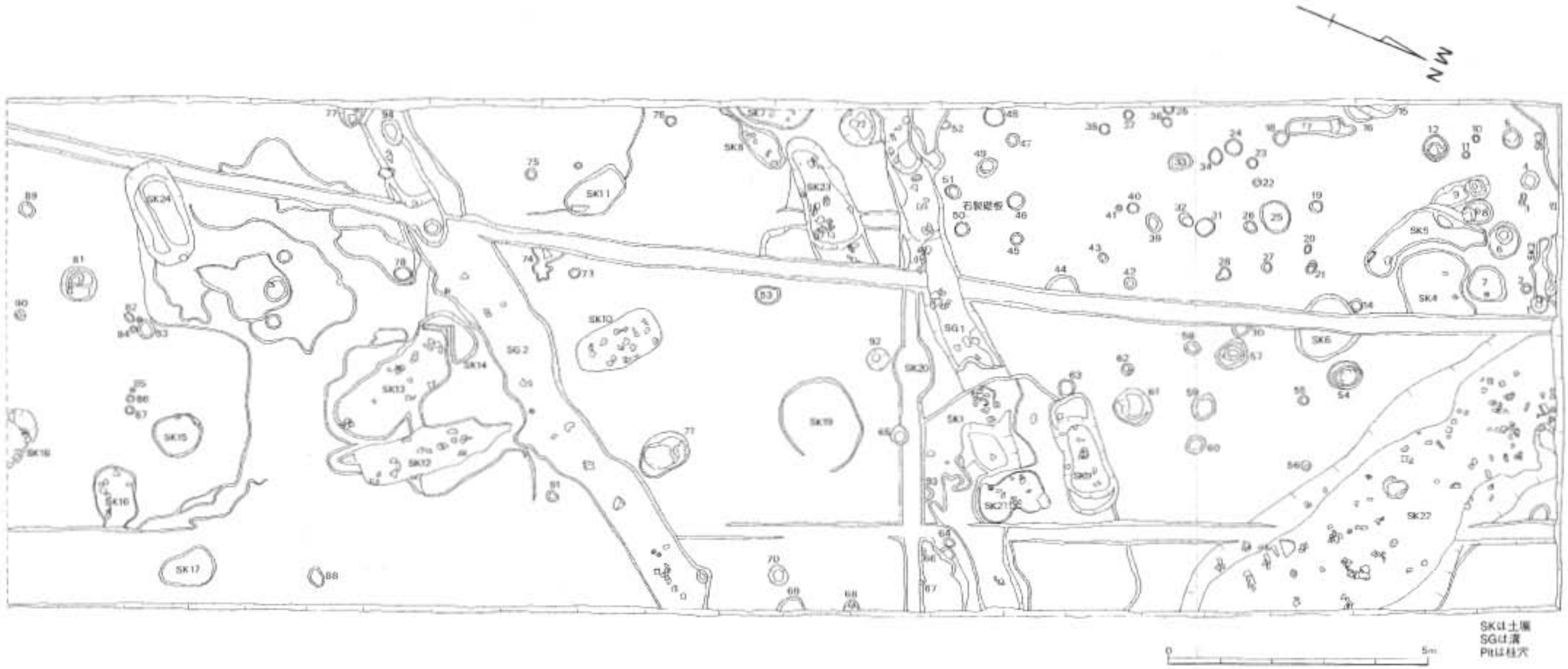
3層及び出土遺物（第9図，第10図，第11図）

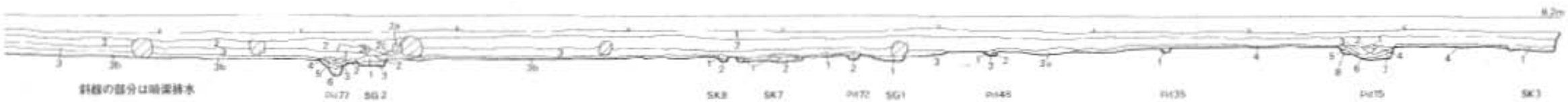
3層は暗灰黄色の土層で古代から中世の水田面である。調査区北西側から南東側に向かってゆるやかな傾斜がみられ，調査区北側では3層は削平され，2層直下が茶褐色粘質土（地山）となっていた。調査区南側では3層の下に土師器が出土する淡灰黄色の古墳時代の3b層が検出された。

26は黒曜石製の剥片鏃である。抉り部分は正裏面ともに細かいリタッチ調整を行っている。27は石鑿製作行程4段階資料で断面は長方形をなす。正面の刃部に一部研ぎだしを行っている。28は石鑿製作行程4段階資料で断面は長方形をなしている。正面の刃部と裏面に研ぎだしを行っている。29は硬



第9図　2層・3層出土遺物（2/3）





1　表土
2　灰黄色土層
2a 暗灰黒色土層
2b 灰黒色土層
2c 黄色土層
3　暗灰黄色土層（黒みの強い灰色）
3a 淡茶白色粘質土層
3b 淡灰黄色土層
4　茶褐色粘質土層

SK3
1 明灰赤土土層

Pit15
1 暗灰色土層
2 明灰色土層
3 暗灰黄色粘質土層
4 黒灰色土層
5 淡灰黄色土層
6 黒灰色粘土層（はりがなく土が粗い）
7 麻黄色土層
8 黄赤色土層

Pit35
1 灰黄色土層

Pit48
1 暗灰色土層
2 暗灰赤色土層
3 灰赤色土層
4 茶褐色粘質土層

SG1
1 灰茶色土層

Pit72
1 暗黄灰色土層
2 黄灰色土層

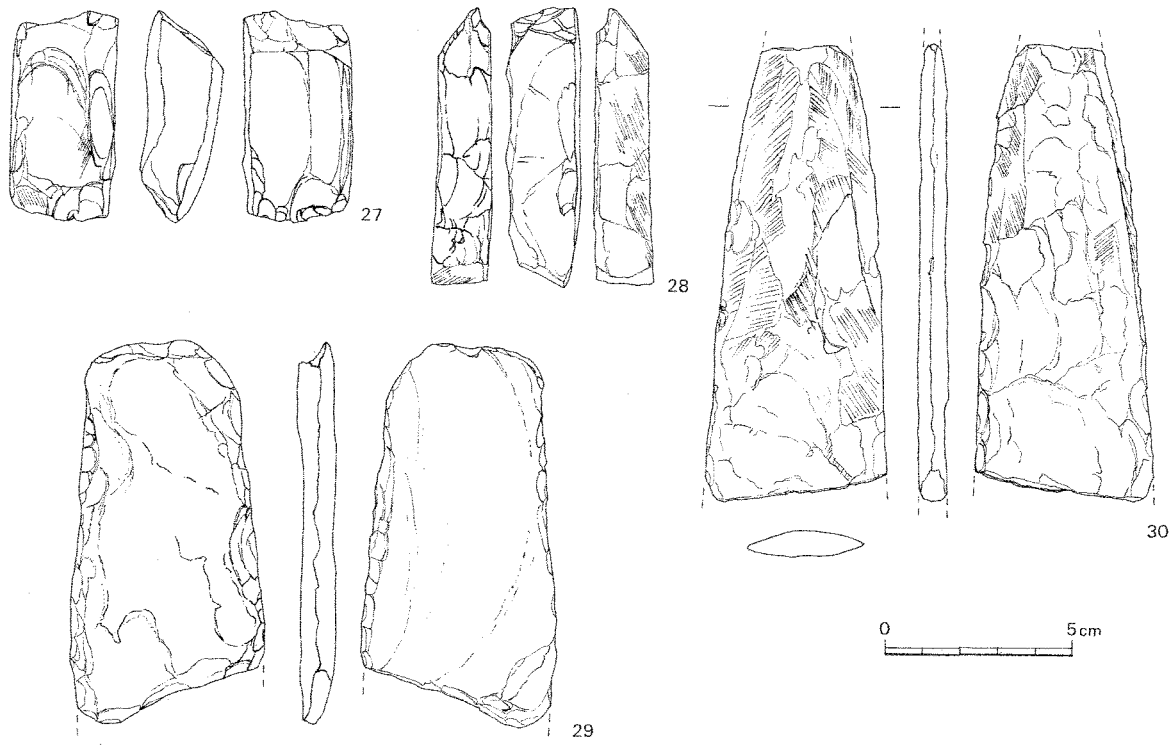
SK7
1 灰茶色土層（黒みが強い）
2 黒灰色土層

SK8
1 黒灰色土層
2 茶褐色土層

SG2
1 黒色土層
2 暗茶黄色土層
3 淡黄黒色土層

Pit77
1 茶黒色土層
2 暗黄灰色土層
3 明茶黒色土層
4 黒色土層
5 黒茶色土層
6 黒灰色土層

第10図　土層及び遺構配置図（1/80）



第11図　3層出土遺物（1/2）

質砂岩の両側から調整加工を施しているが上下部を欠損する。石剣か石鎌の未製品と見られる。30は硬質砂岩の両側縁から研ぎだしを行い中央に稜を持った石剣である。上下部分を欠損する。

(3) 遺構・遺物（第10図）

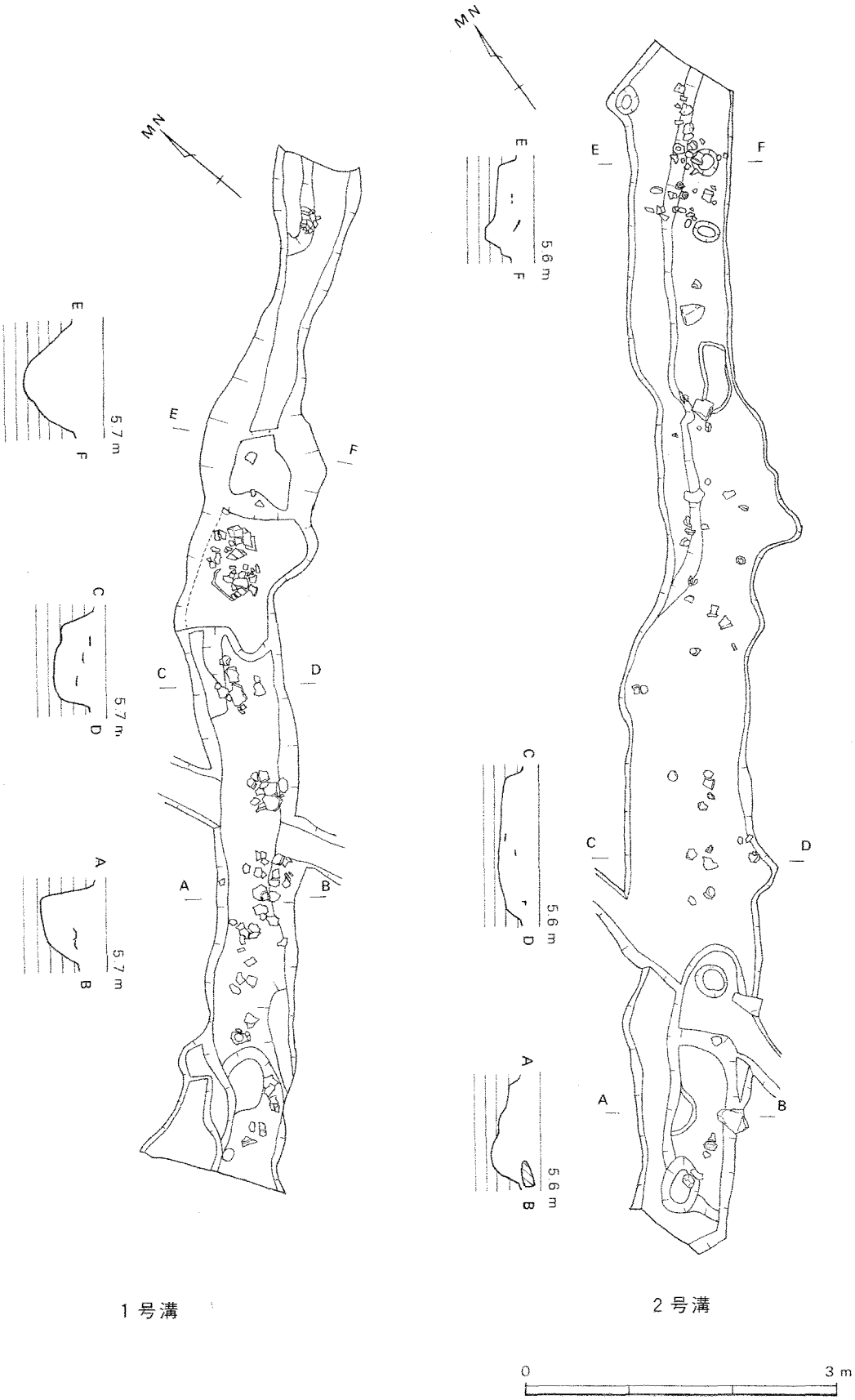
今回の調査区から溝２条，土壙24個，柱穴94個を検出した。

①溝（第12図）

溝は，２条検出した。溝は２条とも南西から北東方向に延びていた。

１号溝は最大幅約１m，深さは最も深いところで約50cm，最も浅いところで約20cmを測り，長さを約10mを確認した。覆土は１層が灰赤色土，２層が淡灰赤色土で，弥生前期末から中期前半の土器を主体に弥生土器約450点，石器約30点が出土した。平成10年度特定調査Ｂ区５号溝・平成10年度幡鉾川流域総合整備計画に伴う緊急発掘調査（以下平成12年度農道調査と記す）１号溝につながるものである。

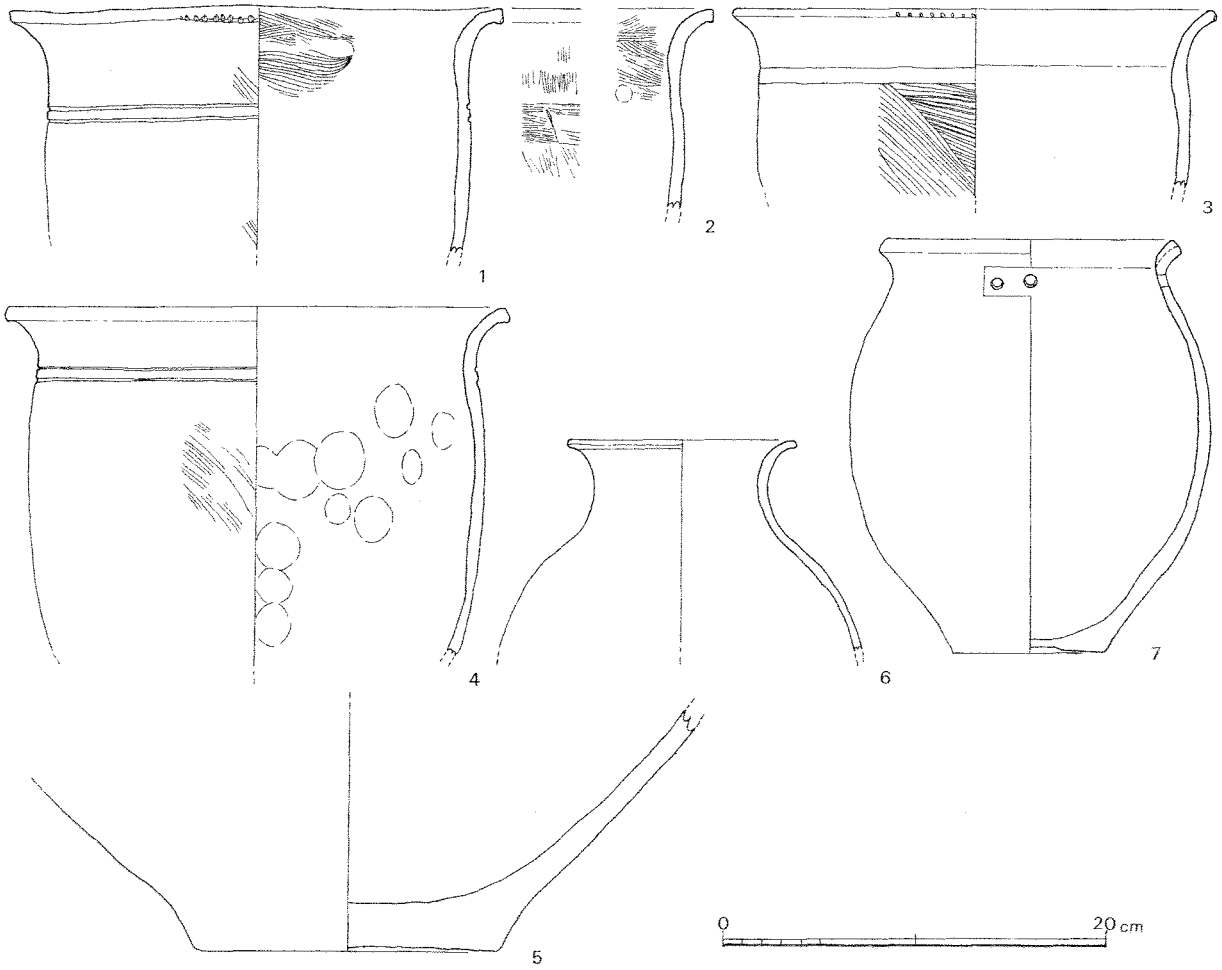
２号溝は最大幅約１m20cm，最も深いところで約30cm，最も浅いところで約20cmを測り，長さ約11m30cmを確認した。弥生前期末から中期前半の土器を主体に弥生土器約630点，石器約50点が出土した。平成10年度特定調査Ｂ区６号溝・本年度環濠等状況調査（以下平成12年度特定調査と記す）Ｂ区２号溝・平成10年度農道調査２号溝につながるものである。２条の溝はともに区画のため又は生活・農業用の用排水路と考えられる。



第12図　1号溝・2号溝実測図（1/60）

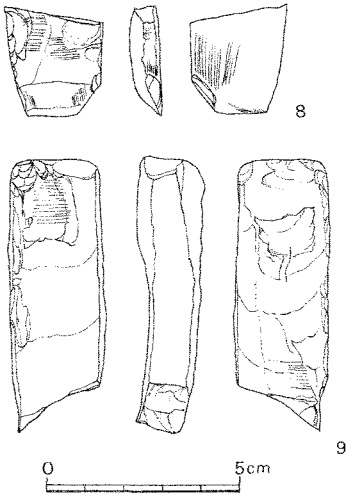
1号溝　出土遺物（第13図，第14図）

1は如意形口縁をなす甕形土器である。胴上部に2本の沈線をめぐらし，口縁端部に3㎜間隔で刻目を付けている。外面の刷毛目は，器面のナデ消で一部残る程度である。内面は，頸部から口縁部に斜行する刷毛目の整形を全周に施す。色調は外面が黄茶色で内面は暗茶褐色を呈している。胎土に石英粒，金雲母が入る。2は如意形口縁の甕形土器で，外面の直下をヘラ状工具で平坦にナデ整形し，頸部は縦位の刷毛目と肩部に浅い沈線を一本引き，以下を横位と斜位の刷毛目で整形した痕が残る。内面は頸部から口縁部に刷毛目を斜位と横位に付けている。胎土に3～4㎜の長石粒が目立つ。器面の色調は外面が灰白色で内面は淡橙色を呈している。3は如意形口縁の口唇部に沈線1本をめぐらし，端部に幅約3㎜の刻目を入れて口縁部を一周している。また，頸部と肩部の境には浅い沈線を1本めぐらしている。器面の整形は，縦位の刷毛目のあとに斜位の刷毛目で整形している。内面は風化のために一部に口縁部辺の刷毛目を観察できる程度である。4は如意形口縁の甕形土器である。外面端部に幅3㎜の刻目を浅く入れ胴上部に沈線を2本めぐらし，以下は斜位の刷毛目で成形し，内面の胴部に指押さえの痕を残す。また頸部から口縁部の一部に斜位の刷毛目を観察できる。器面の色調は外面



第13図　1号溝出土遺物（1/4）

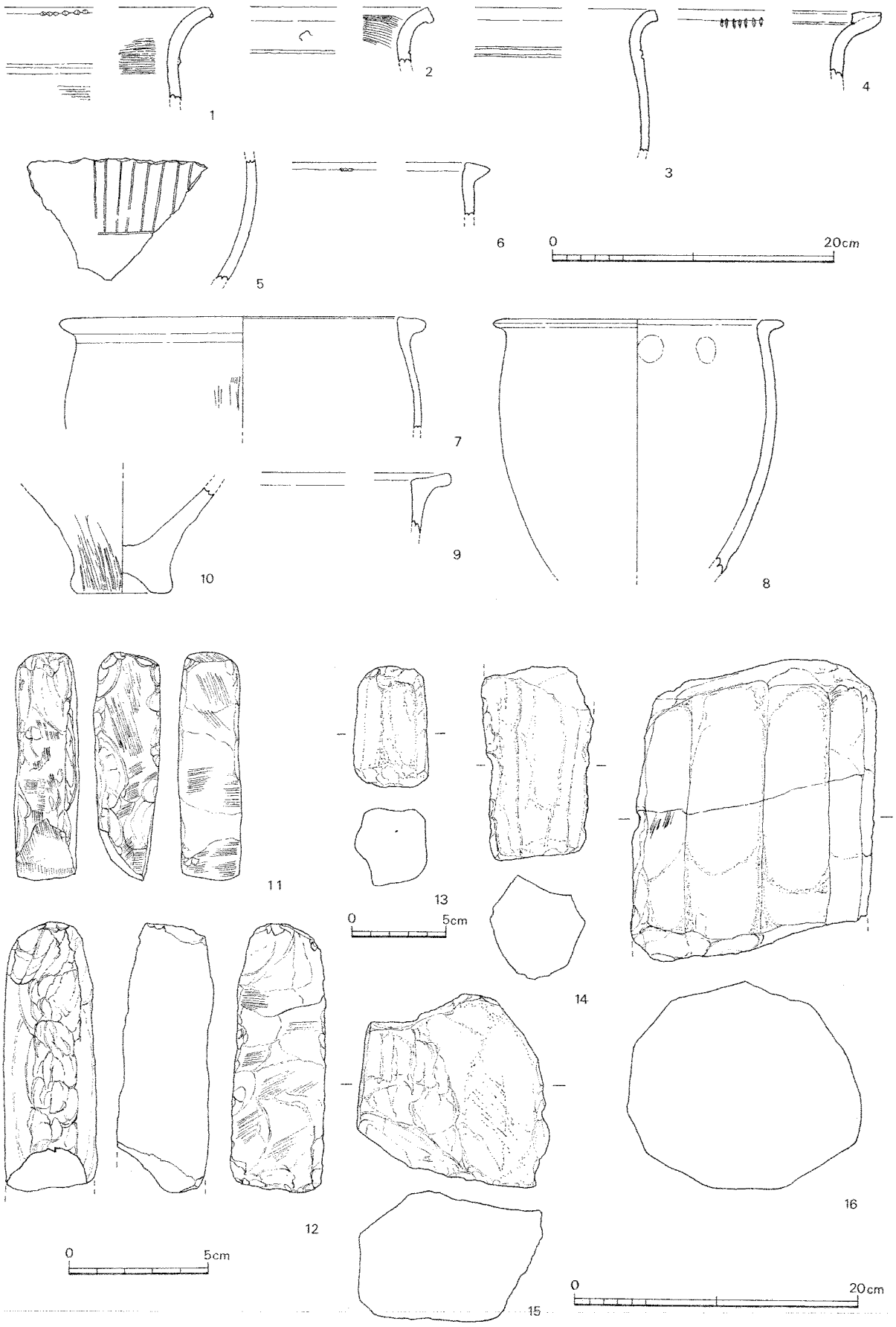
がくすんだ黄色で，内面は淡赤褐色を呈している。5は大形の甕の底部で平坦な底部をなし，中央部がやや凹む。接地面の径が15.3cmを測る。色調は外面が淡い桃色をなし，内面は灰黄色を呈している。胎土は粗く3㎜程の長石が目立つ。6は壺形土器で頸部がなめらかに外反して口縁部へ移行し，口縁端部は丸みを持って納める。器面全体が風化し整形痕は不明である。器面の色調は外面が赤褐色で内面は暗灰茶褐色である。胎土に長石，金雲母，黒雲母が混入し粗い器面を露出している。7は壺形土器で，底部中央が凹み，立ち上がりは底部から内湾して胴部中位に最大径（19cm）があり，頸部で外反する。口縁部の内面に粘土帯を2㎝幅で貼付けてめぐらしている。補修孔を頸部の2ケ所に内面から外面に向かって開けている。また，補修孔は対峙して同様に2ケ所に設けている。器面の色調は，外面が淡赤褐色をなし，内面は暗黄色を呈している。外面は全体に風化するが，一部にみがき整形の痕跡が残った擬無文土器である。8は粘板岩を素材として作られた石鑿で，片刃の刃部としている。加工時の剥離痕を研ぎによって滑らかにし，両側面と裏面を平坦に研ぎあげて基部は欠失している。9は製作途中の石鑿である。正裏面と右側辺に研ぎ痕があるが，形成過程で刃部以下を欠損したため廃棄したものと思われる。石材は8と同様に粘板岩を使用。



第14図　1号溝出土遺物（1/2）

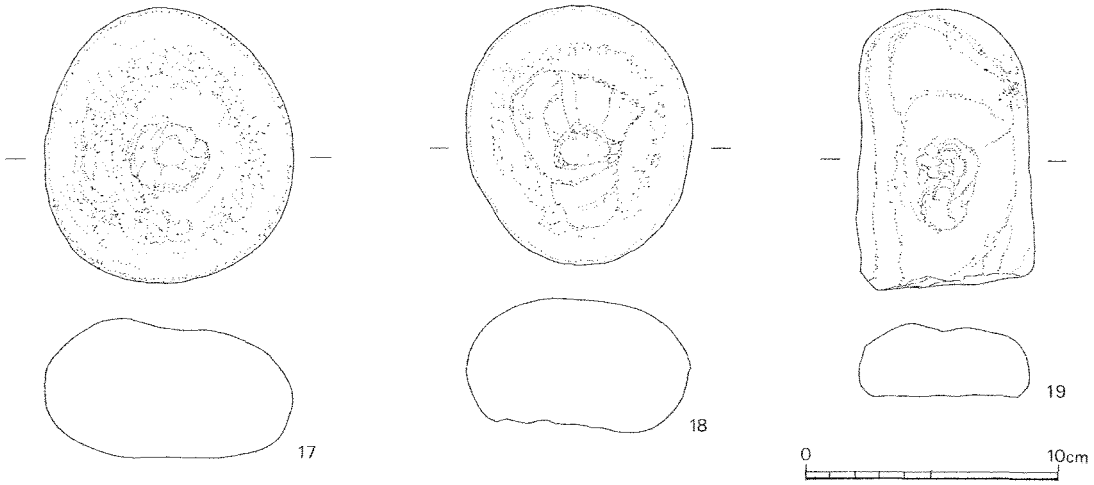
2号溝　出土遺物（第15図，第16図）

1は口縁部の外反が大きい甕形土器である。器形は如意形口縁をなし端部に明瞭な刻目を付し，頸部に一条の突帯をめぐらしている。器面の整形は，刷毛目を突帯以下に行って内面は頸部から口縁部にかけて約4㎝幅の刷毛目整形を残し，色調は外面が黄灰色で内面が明黄色を呈している。2は如意形口縁をなす甕形土器で，口縁端部に刻目はなくナデ整形で終えている。外面頸部に深めの沈線が1本入り内面は頸部に斜位の刷毛目と口縁部付近を横位の刷毛目とで整形している。器面の色調は外面が暗茶色で内面は淡灰茶色を呈している。3は如意形口縁の甕形土器である。頸部に2本の沈線がめぐり，口唇部はナデ整形とし，刻目は付けていない。器面の色調は外面が淡黄白色となり，内面は淡赤黄色を呈している。内面にわずかに刷毛目が付き，外面は風化が進み明瞭でない。4は口縁部を平坦に作る壺形土器である。器面の口唇部下に長さ約9㎜，幅3㎜の刻目を付している。内面は，口縁端の厚みを幅7㎜として直に面取りし，頸部に付けている。器面の色調は，内外面ともに黒色を呈する。5は壺形土器の胴部片で縦位に8本と横位に1本の沈線を引いている。器面の色調は，外面が淡黄色で内面が淡黄赤色を呈している。6は断面三角形の口縁部をなす甕形土器である。口縁端部に幅2㎜の浅い刻目を付し，口縁部は平坦としている。器面の色調は内外面ともに淡黄白色を呈している。7は口縁部を平坦にした甕形土器である。口縁端部を4㎜幅のナデ整形としている。外面の刷毛目は，縦位に行い内面はナデ整形としている。器面の色調は，内外面ともに暗茶褐色を呈する。8は甕形土器で口縁部は丸みを持った平坦な口縁としている。口縁直下は，指整形をそのまま残し器面は，潰しを行うのみで，刷毛目整形を行っ



第15図　2号溝出土遺物（11，12は1／2・13，14，15は1／3・それ以外は1／4）

ていない。器面の色調は内外面ともに赤黄色を呈する。口縁部の外径は23cmを測る。9は甕形土器で，頸部から直線的に伸びて口縁部へ移行し，口縁は上向きとして，端部に丸みを持たせている。色調は，内外面ともに淡赤白色を呈している。10は甕形土器の底部である。底部は上底とし，内径で4.5cm，外径で7.3cmを測る。器面に刷毛目の整形痕が残る。色調は，外面が淡橙白色で内面は灰色を呈する。11は，石鑿で小形柱状片刃石斧の完形品。刃部と両側面，基部端，裏面ともに研ぎ上げ，正面の基部については高低差をなくすため，敲打の部分を一部研ぎかけている。断面はカマボコ状をなし，石材は粘板岩を使用する。12は，硬質砂岩を素材として制作した抉入片刃石斧の基部の部分で，正面は敲打痕を残す。両側面と裏面は研ぎだしを行っている。13は砂岩製の砥石の上下を叩き石に転用している。研ぎ出しの凹面を2ヶ所有する。14は砥石の研ぎだし面を6ヶ所有する。15は砥石の研ぎだし面が3ヶ所残る。16は砥石の研ぎだし面を11ヶ所確認し，1ヶ所は表面が破損しているため数えていない。17は凹石で，正面の凹み部分の径は2.5cm程度と浅く凹んでいる。裏面は平坦で中央に敲打痕がわずかに残る。18は正面に使用による凹凸の痕跡を残し，裏面は1／3程度を欠損する。19は硬質の砂岩の中央部に凹を持つ。本来は別な用途が考えられ右側面に浅い抉りが付く。



第16図　2号溝出土遺物（1／3）

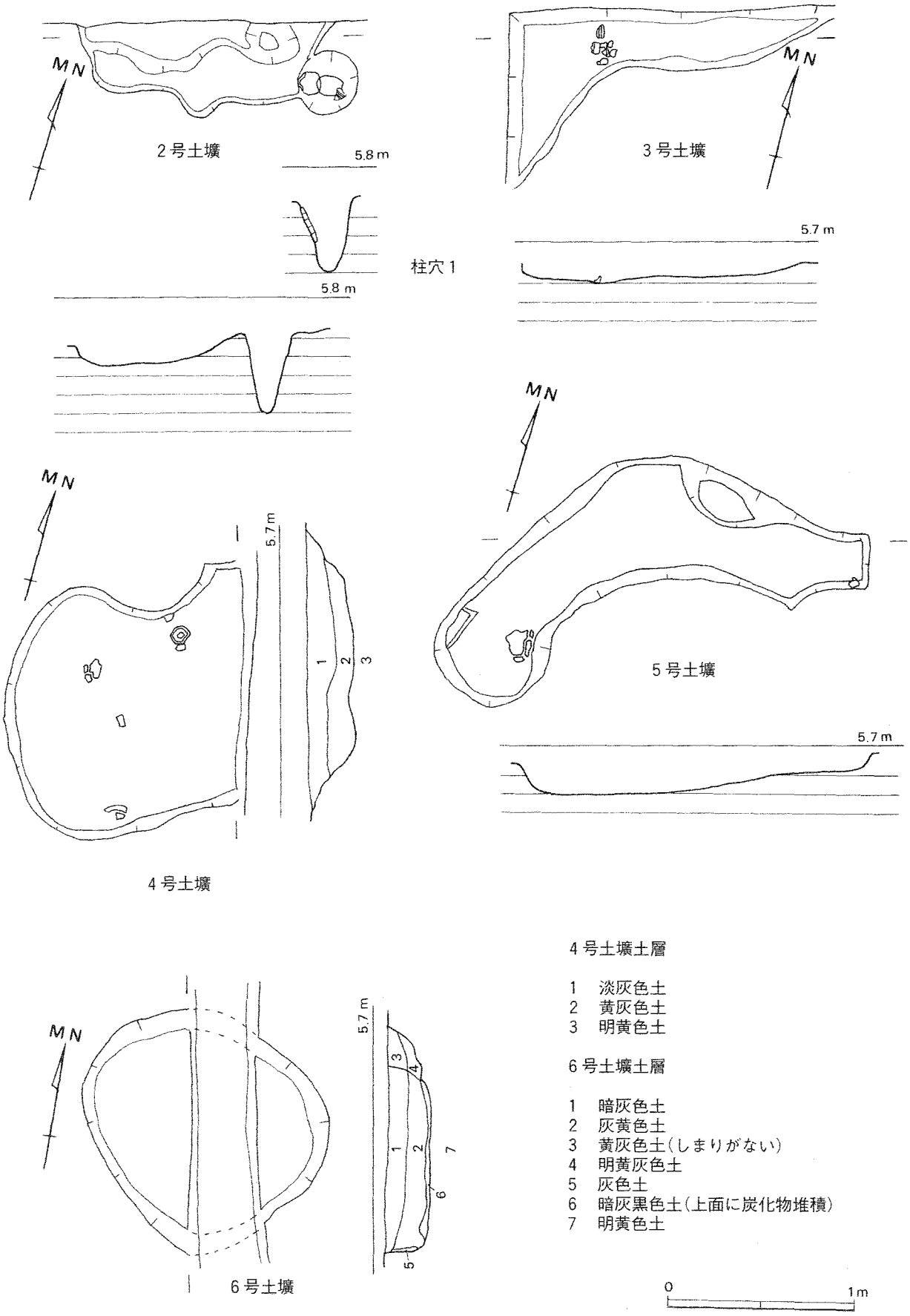
参考文献

『原始古代の長崎県通史編』長崎県教育委員会1998
『原始古代の長崎県資料編Ⅰ』長崎県教育委員会1996
『車出遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第8集
長崎県教育委員会・郷ノ浦町教育委員会1998

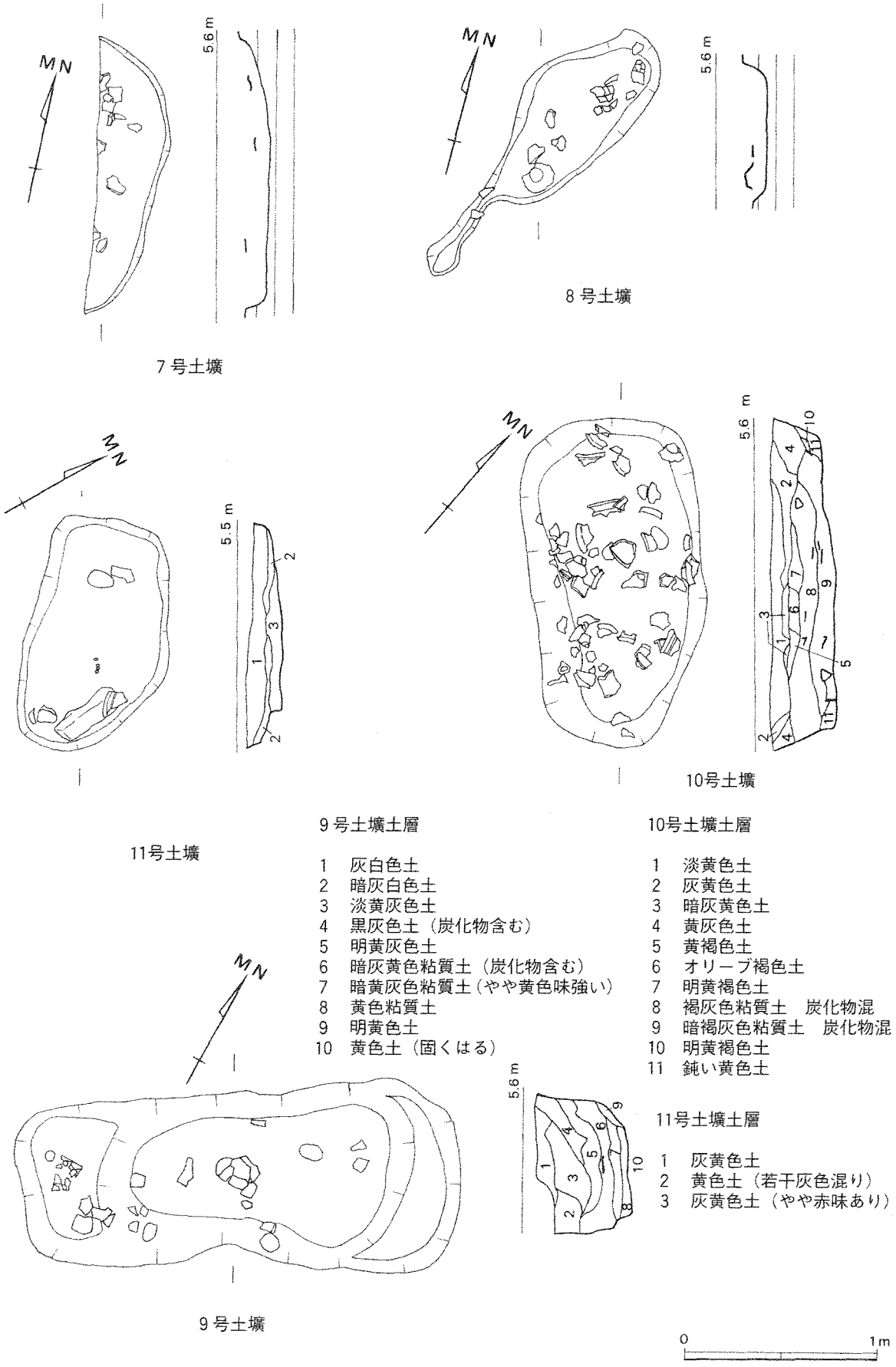
②土壙及び柱穴（第17図～第22図）

今回の調査地区においては，土壙を24，柱穴を94検出した。ここでは，実測図を掲載したものを中心に，その他特徴的なものについて報告する。

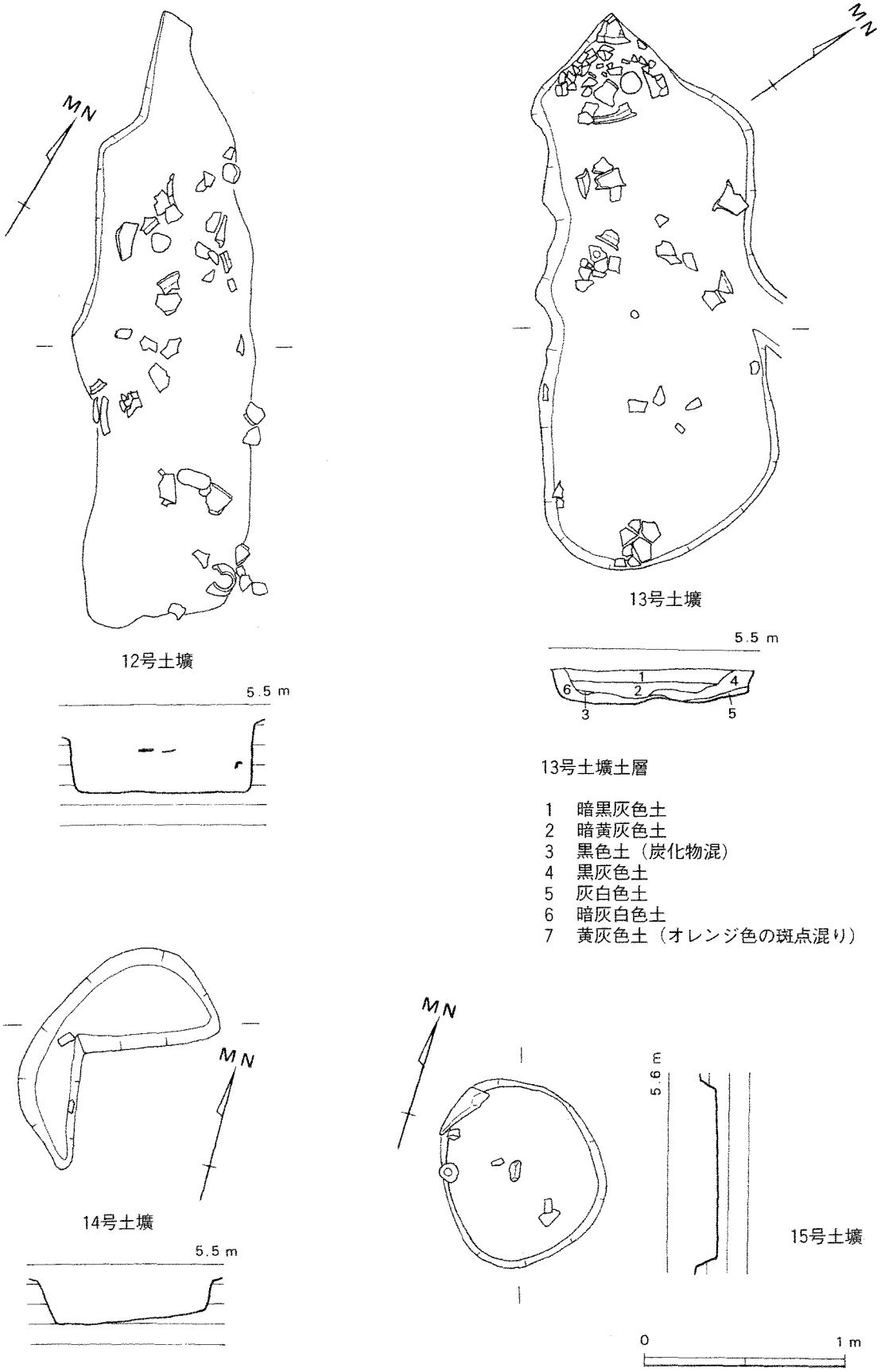
1号土壙は長径約4m60cm，短径約3m50cmで覆土は暗灰色土である。土器約380点，石器42点が出土した。1号溝・9号土壙が埋没したあとに掘られ，この土壙が埋まったあと21号土壙が掘られている。平成10年度特定調査B区西壁際でこの土壙につながる部分を検出している。2号土壙は調査区北壁際で西側部分を検出した。長径1m40cm，深さ約20cm。覆土は灰黒色土で，土器12点，石器1点が出土した。この土壙内から幅約30cm，深さ約40cmの柱穴も検出された。3号土壙は調査区北西際で検出した。確認されている範囲で最大径1m70cm，深さ6cmを測る。覆土は淡灰赤色粘質土で，土器19点が出土した。4号土壙は長径約1m30cm，短径1m20cm，深さ約20cmを測る。覆土は黒灰色土で，土器81点，石器7点が出土した。土壙東側を暗渠によって切られている。また西側は5号土壙を切っている。5号土壙は4号土壙に切られているため詳細は不明。確認できる範囲で長径約2m30cm，深さ約20cmを測る。覆土は淡灰色土で，土器39点，石器2点が出土した。6号土壙は長径約1m40cm短径約1m20cm，深さ約30cmを測る。覆土は黒灰色土で，土器46点が出土した。土壙中央を暗渠が切っている。7号土壙は調査区西壁際で東側部分を検出した。確認できる範囲で長径は約1m50cm，深さ約15cmを測る。覆土は黄灰色土で，土器51点が出土した。8号土壙は7号土壙と23号土壙に切られているため詳細は不明。確認できる範囲で最大径1m60cm，深さ8cmを測る。覆土は濃黒灰色土で，土器16点が出土した。9号土壙は長径約2m30cm，短径約80cm，深さ約50cmを測る。覆土は黒灰色土で，土器214点，石器36点が出土した。10号土壙は長径約1m70cm，短径約90cm，深さ約35cmを測る。覆土は黒明灰色土で，土器約480点，石器3点が出土した。11号土壙は長径約1m30cm，短径約70cm，深さ約20cmを測る。覆土は黒明灰色土で，土器31点，石器2点が出土した。12号土壙は長径約3m，短径約90cm，深さ約30cmを測る。覆土は青灰色土で，土器437点，石器6点が出土した。13号土壙は長径約2m80cm，短径約1m20cm，深さ約17cmを測る。覆土は濃黒灰色土で，土器426点，石器4点が出土した。14号土壙は13号土壙に切られているため詳細は不明。確認できる範囲で最大径約1m10cm，深さ約20cmを測る。覆土は青灰黒色土で，土器2点が出土した。15号土壙は長径約1m，短径約80cm，深さ約10cmを測る。覆土は炭化物混灰色土で，土器27点，石器3点が出土した。16号土壙は長径約1m20cm，短径約80cm，深さ約7cmを測る。覆土は濃黒色土で，土器287点，石器11点が出土した。17号土壙は長径約1m，短径約70cmで深さ約4cmを測る。覆土は赤灰色土で，土器3点が出土した。18号土壙は調査区南際で北側半分を検出し本年度特定調査A区で南半分を検出した。最大径約1m，深さ約20cmを測る。覆土は灰色土で，土器154点，石器1点が出土した。20号土壙は幅約80cm，覆土は灰赤色土である。中央を暗渠によって大部分が切られているため詳細は不明である。21号土壙は長径約1m30cm，短径約70cm，深さ約8cmを測る。覆土は灰色粘質土で，土器23点，石器1点が出土した。22号土壙は長径約7m，短径約3m，深さ約30cmを測り，本調査区では完結していないものの，東側に隣接する平成10年度特定調査B区において検出された土壙につながるものである。覆土は



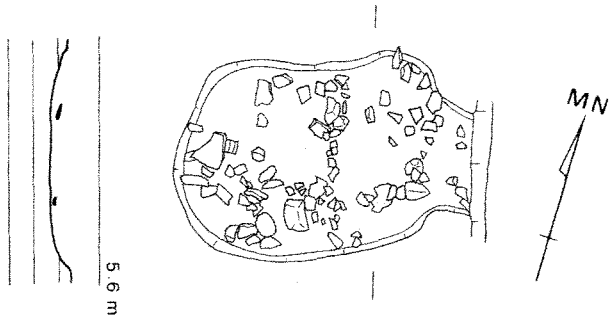
第17図　2号・3号・4号・5号・6号土壌実測図・土層図（1/30）



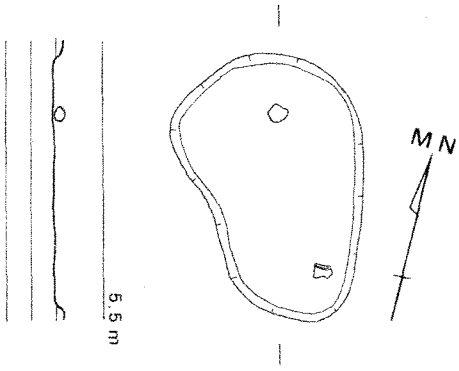
第18図　7号・8号・9号・10号・11号土壙実測図・土層図（1/30）



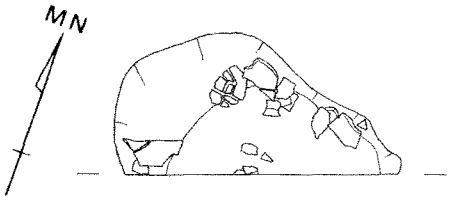
第19図　12号・13号・14号・15号土壙実測図・土層図（1/30）



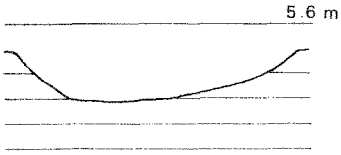
16号土壙

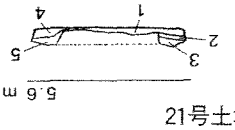


17号土壙

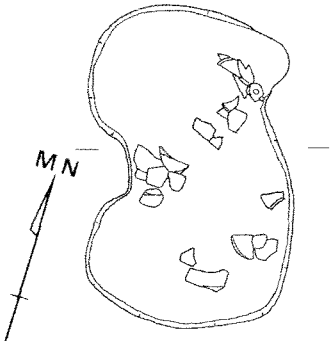


18号土壙





21号土壙

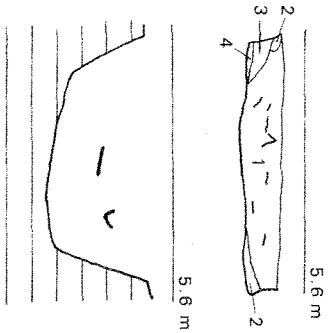


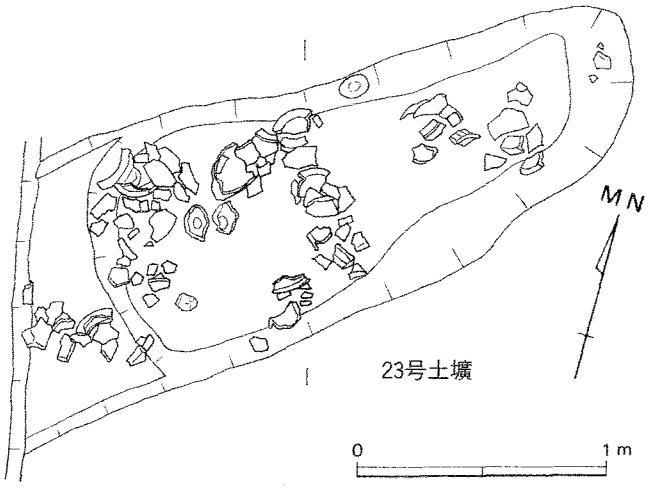
21号土壙土層

1　赤色土（焼土）
2　黒色土（炭化物含）
3　灰黒色土
4　明黄色土
5　灰黒色土

23号土壙土層

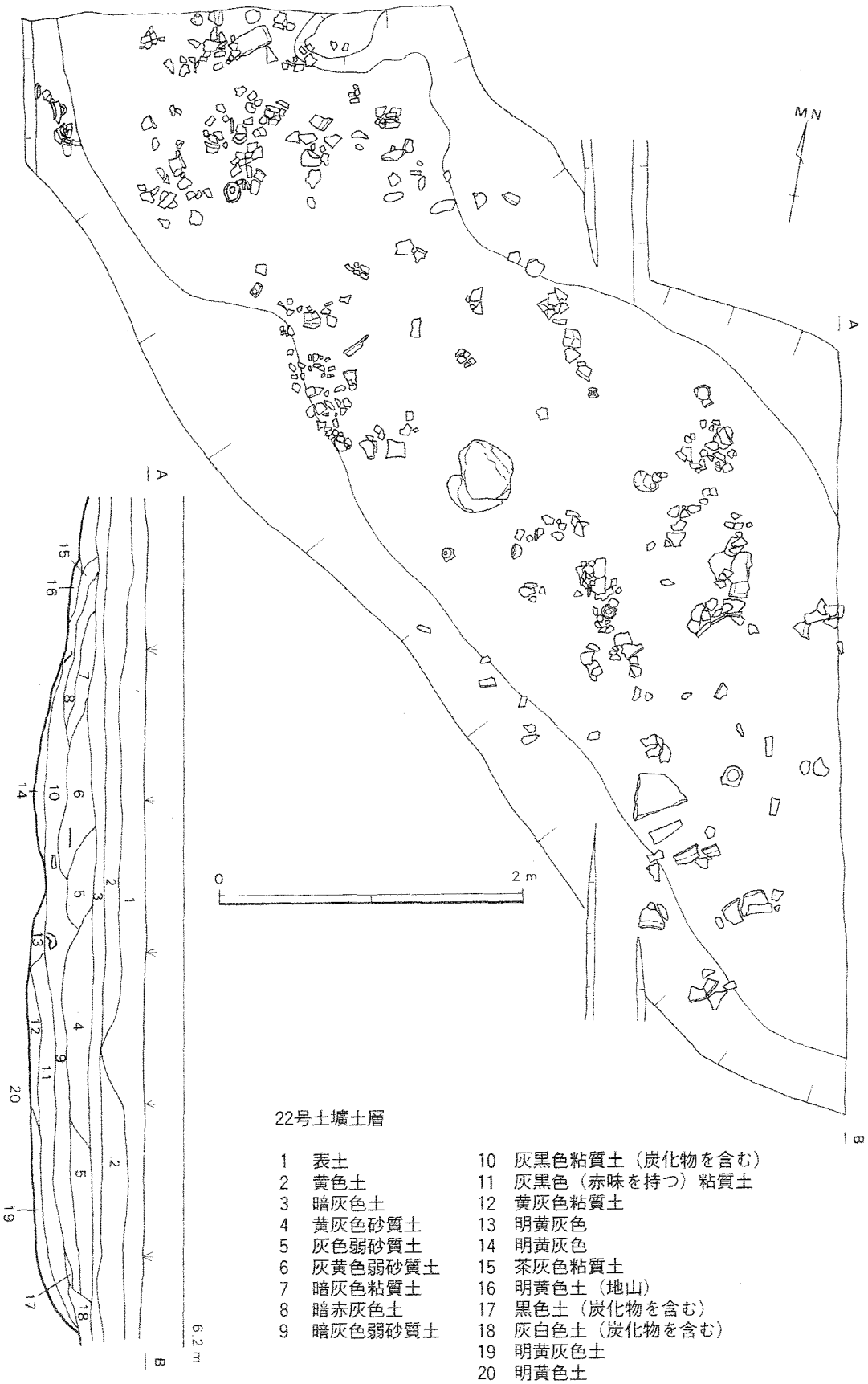
1　暗灰黒色土
2　黄灰色土
3　暗黄灰色土
4　明黄色土





23号土壙

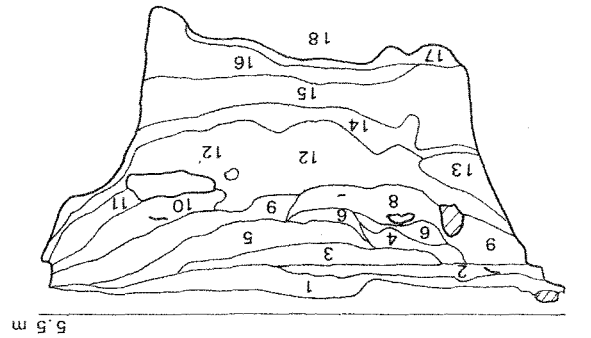
第20図　16号・17号・18号・21号・23号土壙実測図（1/30）



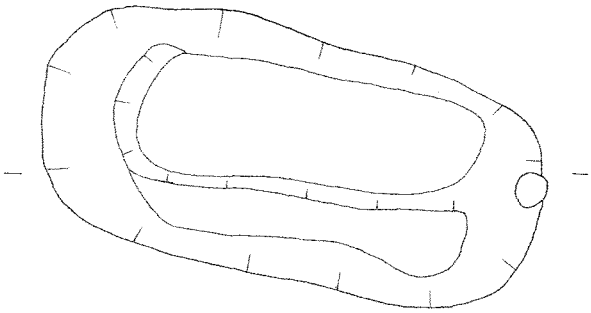
22号土壙土層

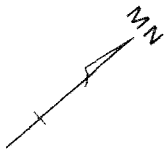
1　表土
2　黄色土
3　暗灰色土
4　黄灰色砂質土
5　灰色弱砂質土
6　灰黄色弱砂質土
7　暗灰色粘質土
8　暗赤灰色土
9　暗灰色弱砂質土
10　灰黒色粘質土（炭化物を含む）
11　灰黒色（赤味を持つ）粘質土
12　黄灰色粘質土
13　明黄灰色
14　明黄灰色
15　茶灰色粘質土
16　明黄色土（地山）
17　黒色土（炭化物を含む）
18　灰白色土（炭化物を含む）
19　明黄灰色土
20　明黄色土

第21図　22号土壙実測図・土層図（1/40）



24号土壙





24号土壙土層

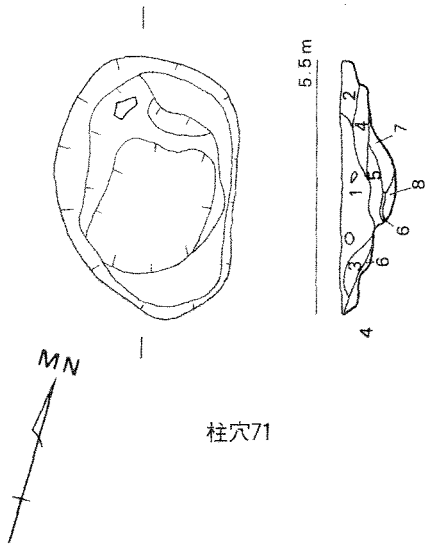
1　黒灰色土
2　暗灰黄色土
3　黄灰色土
4　明黄色土（炭化物有り）
5　灰黄色土
6　明黄色土
7　灰黄色土
8　黄灰色土
9　暗黄灰色土
10　明黄灰色土
11　明黄灰色土（やや灰色が強い）
12　暗灰色砂質土
12′　黄色粘土
13　黄色土（灰色の砂質土がクラックに入り込む）
14　灰白色砂質土（やわらかい）
15　黒色砂質土
16　灰色砂質土
17　茶灰色粘質土
18　黄色砂質土（地山）

柱穴61土層

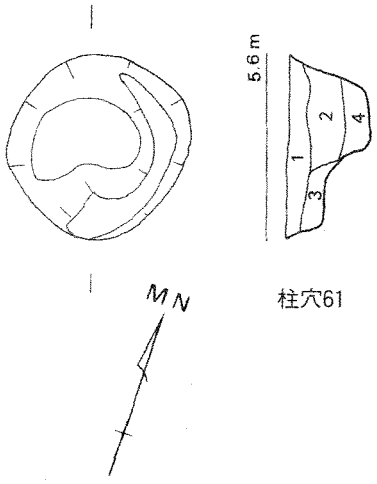
1　灰赤色土
2　暗黄色土（しまりがない）
3　黄色土（しまりあり）
4　暗灰茶褐色土

柱穴71土層

1　黒灰色土（まだらに黄斑あり）
2　暗黒灰色土
3　黄黒灰色土
4　灰黄色土
5　黄色土
6　黒灰色土
7　暗灰黒色土
8　黄色土



柱穴71



柱穴61

0　1 m

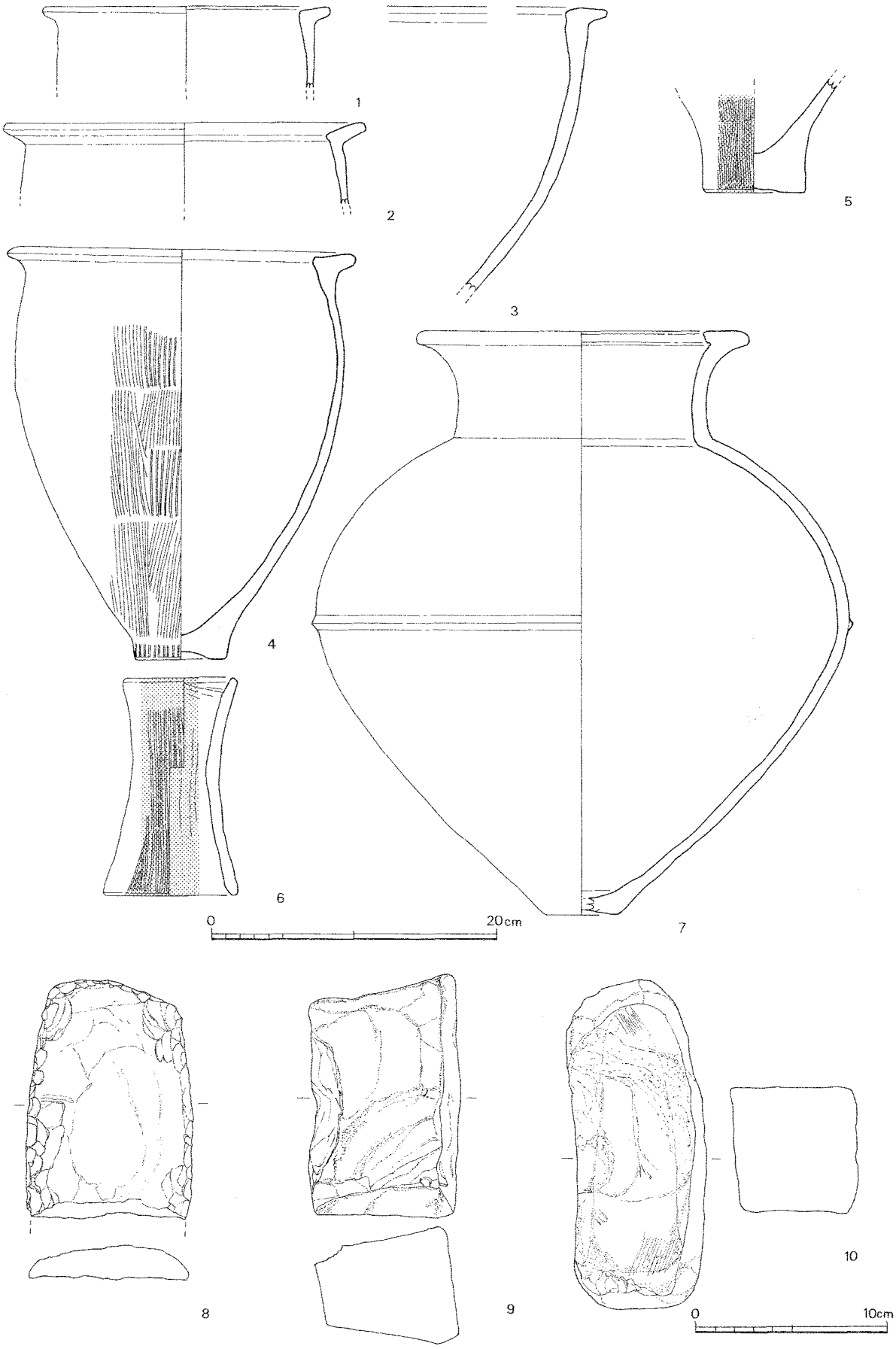
第22図　24号土壙・柱穴61・柱穴71実測図・土層図（1/30）

1層が茶褐色粘質土,2層が暗灰黄色砂質土で,土器約1360点が出土した。また石製品や石製品の素材・未製品,チップ等が90点出土した。今回調査区内の1号・9号土壙の平成10年度特定調査B区の2号・6号土壙（調査区北より）からも同様ものが多数出土している。また,2層・3層包含の遺物を見ても,調査区北側から出土した石製品の素材・未製品の数が多い。このことから台地北西低地部のこの地域に石製品工房が存在した可能性がさらに高まった。23号土壙は東端を暗渠で切られている。長径約2m60cm，短径約1mで深さ約40cmを測る。覆土は濃黒灰色土で，土器約800点，石器約20点が出土した。24号土壙は長径約2m，短径約1m，深さ約40cmを測る。土器約150点，石器7点が出土した。柱穴61は径約80cmでほぼ円形をしている。深さは約30cmを測る。覆土は灰赤色土で，土器3点が出土した。柱穴71は長径約1m，短径約70cm，深さ約20cmを測る。覆土は黒明灰赤土で炭化物を多く含み，土器30点が出土した。柱穴81は径約65cmで円形である。深さは約20cm，覆土は灰色土で，土器9点，石器2点が出土した。柱穴90は円形で，径約20cm，深さ約18cmを測る。覆土は淡灰色土で，石器3点が出土した。

柱穴51は，長径約30cm，短径約25cm，深さ約40cmで石製礎盤が出土した。石製礎盤は本調査区東側に隣接する平成10年度特定調査B区から3基，西側部分を調査した平成10年度幡鉾川流域総合整備計画に伴う緊急発掘調査で6基，平成11年度環濠等状況調査で1基確認されている。現在まで11箇所が確認され，原の辻遺跡の低地部における建築物の構造を解明するうえで重要な遺構である。

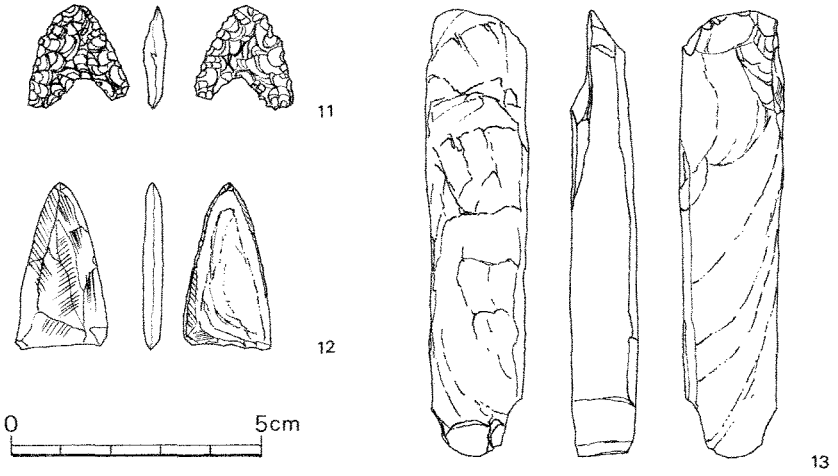
1号土壙　出土遺物（第23図，第24図）

1は口縁部を平坦となし，やや上向きの口縁部とした甕形土器である。器面の調整は風化して明瞭でなく色調は外面が肌色で内面は赤色を呈している。2は口縁を平坦とし1より長めとなる甕形土器である。内面の口縁端部がやや伸び，器面の色調は，内外面ともに茶褐色を呈する。3は口縁を平坦となした甕形土器である。内面の頸部と口縁部の境に浅い凹みが一巡し，器面は内外面ともに器壁が風化し整形痕が不明瞭。4は完形の甕形土器である。器面に縦位の刷毛目を底部から胴上部まで施し，器形は底部は上底となし，胴部上位に張りを持ち短く平坦な口縁部が付く。色調は外面が茶赤色で内面が黒灰色を呈している。5は甕形土器の底部片でやや上底ぎみの作りをしている。器面に刷毛目整形痕を有する。6は器台。口縁部と裾部ではわずかに裾部が広くなる。刷毛目整形を外面は全面に行い，内面は口縁部に横位の刷毛目が幅1.5cmでめぐる。色調は内外面ともに赤黄色を呈する。7は壺形土器。胴部の中位に1条の突帯を持ち，以下はやや直線的に底部へ伸び上底ぎみの底部をなす。頸部は締まり外反ぎみに口縁部へ移行し，口縁部は平坦で内面端部が伸びぎみで外面端部はやや厚みを持つ均整のとれた壺形土器である。器面の調整は風化により不明瞭である。8は石鑿の製作工程における，初期段階の資料として上げている。両側面を敲打し，母岩の粘板岩をカットした状況にある。9の砥石は6面を研ぎだしに使用し，中砥石程度のきめの細かさである。10は中央部の使用による研ぎだしによって，なだらかな鞍部を形成している。裏面もやや凹みがみられ，使用の際に安定感を得るために裏面の調整を行ったと考えられる砥石である。11は打製の石鏃である。先端が丸みを持ち，



第23図　1号土壙　出土遺物（1～7は1/4・8～10は1/3）

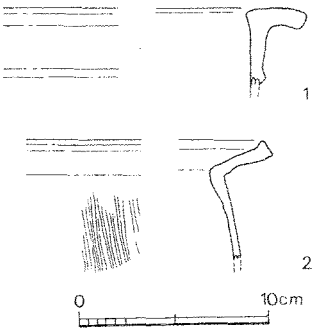
両脚が不均等に作出されているが剥離調整は，上部から脚部にかけて押圧剥離を丁寧に行い，石材は黒曜石を用いている。12は平基式の磨製石鏃である。粘板岩を石材の素材とし，剥離面の凹凸を研ぎだしによって消し去っている。13は石鑿製作行程の第２段階の資料で断面が長方形を呈するが，打撃調整及び研ぎ出しまでには至っていない。



第24図　１号土壙　出土遺物（２/３）

３号土壙　出土遺物（第25図）

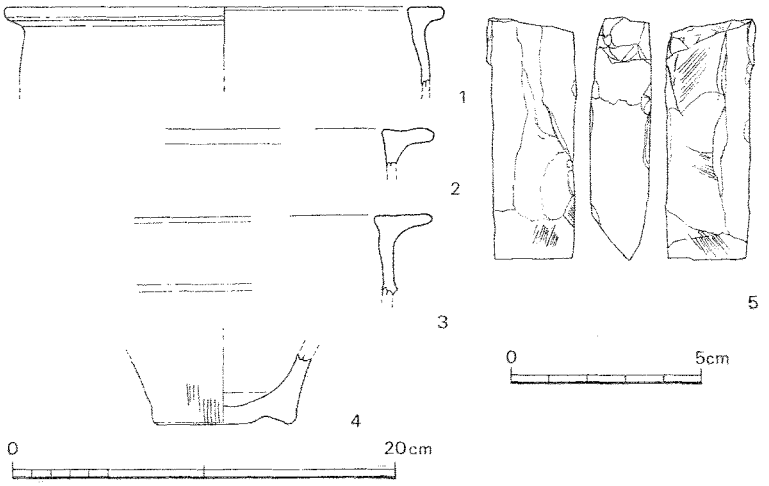
１は甕形土器の口縁部である。口縁端部が肥厚し，外側がやや垂れぎみとなる。頸部に１条の突帯を付け，整形痕は土器の風化のため不明瞭で色調は内外面ともに淡赤黄色を呈する。２は甕形土器の口縁部である。口縁端部を摘み上げて内湾ぎみとし，頸部から胴部に縦位の刷毛目整形を行い内面はナデ整形としている。器面の色調は，内外面ともに淡黄白色を呈している。



第25図　３号土壙　出土遺物(１/４)

４号土壙　出土遺物（第26図）

１は甕形土器の口縁部である。平坦な口縁に外側端部が丸く厚みを持ち，器面は風化して整形痕が不明瞭である。２は甕形土器の口縁部で，平坦な口縁の中央部がやや凹み外側端部に厚みを持っている。３は甕形土器の口縁部である。平坦な口縁の中央部がやや凹み，外側端部は尖りぎみとなり土器の器面は風化し整形痕



第26図　４号土壙　出土遺物（１～４は１/４・５は１/２）

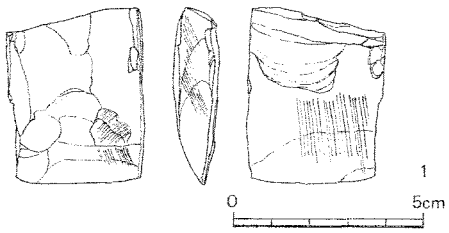
は不明である。4は甕形土器の底部である。底部の外底面に幅1cmで浅い溝をめぐらしている。5は石鑿である。刃部と裏面の研ぎだしは行っているが，両側面の研ぎ出しは行なわず基部を欠損する。

5号土壙　出土遺物（第27図）

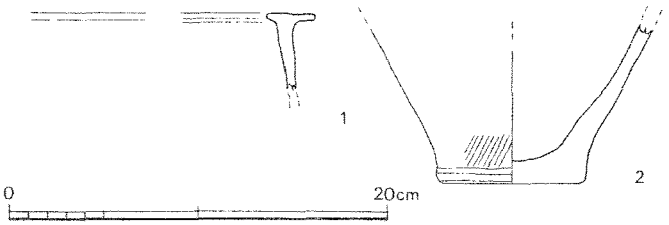
1は石鑿である。正裏面ともに剥離整形痕の上から研ぎだしを行い，正面，裏面，基部を滑らかにした扁平片刃石斧を作出し石材は粘板岩を用いている。

7号土壙　出土遺物（第28図）

1は薄く平坦な口縁部を持つ甕形土器である。口縁は，内面端部が突きだしT字形の口縁を形作る。器面は風化のため整形痕が不明で内面はナデ整形を行っている。2は甕形土器の底部である。厚底で若干上底ぎみの器面で，風化が進行しわずかに刷毛目が縦位の方向に付いているのが認められる。色調は内外面ともに暗赤黄色を呈している。



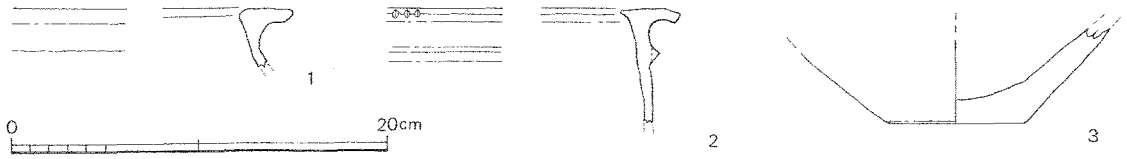
第27図　5号土壙　出土遺物（1/2）



第28図　7号土壙　出土遺物（1/4）

8号土壙　出土遺物（第29図）

1は平坦な口縁部を持つ甕形土器である。頸部に突帯が一部残り，器面は風化が著しい。2は薄く平坦な口縁部を持つ甕形土器である。口縁端部の内側が突き出る鋤形口縁をなし，外側端部は垂れぎみとなる。胴上部に断面三角形の突帯がめぐり，口唇部に3点の刻目が認められる。3は平底の壺形土器底部である。器面はナデ整形し，内面は風化のため整形痕が不明で色調は内外面ともに淡黄灰色を呈する。

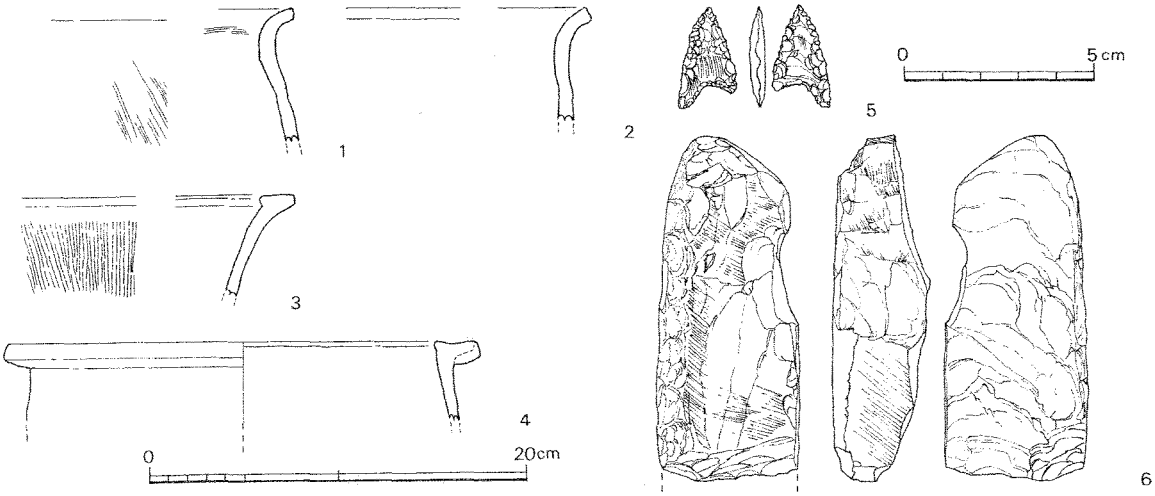


第29図　8号土壙　出土遺物（1/4）

9号土壙　出土遺物（第30図）

1は如意形口縁の甕形土器である。口縁端部は，丸く納め外面のナデ整形後に刷毛目を斜位に施す。内面は，頸部に刷毛目を付けて整形し粗い胎土で長石粒が多量に混じる。器面の色調は，内外面ともに暗茶黄色を呈する。2は如意形口縁の甕形土器である。口縁端部は尖りぎみとなり外面にわずかに刷毛目が付く。粗い胎土で長石を多く含み器面の色調は茶灰白色を呈する。3は壺形土器の口縁部で口縁は平坦となし，内面5mmの厚さで直下に頸部と接合し，外面端部は若干凹みを持って一巡する。

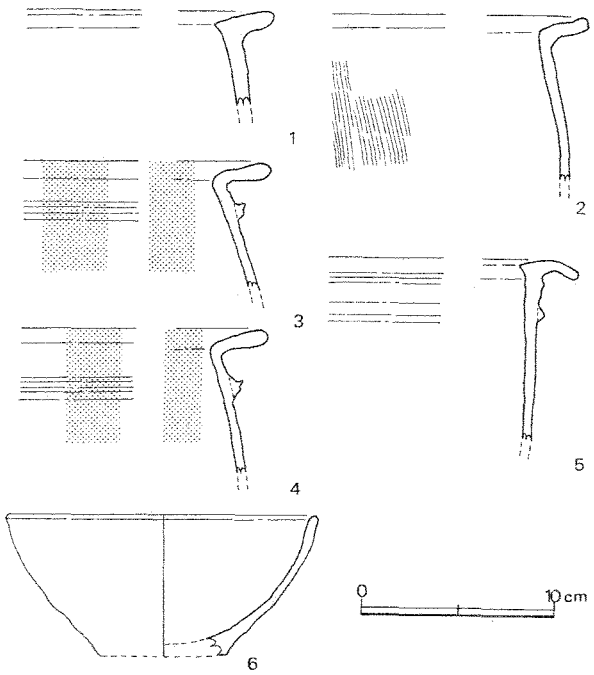
刷毛目はおおむね縦位の方向に付け，器面の色調は外面が灰茶色で内面は暗赤黄色を呈する。4は厚みのある平坦な口縁をなす甕形土器である。短い口縁の中央がやや凹み器面の色調は内外面ともに明橙色を呈し，整形痕は風化のため不明である。5は黒曜石製の局部磨製石鏃である。正面の左脚だけを延ばし，右脚は抉りの延長で留め正面の中央部のみに研磨をかけている。6は抉入片刃石斧の基部の残存品で左側縁は敲打技法による作出を行う。正面は，剥離調整の後に研ぎだしを行っている。抉入部は，敲打部分を中央に残し，周囲を研ぎだしている。



第30図　9号土壙　出土遺物（1～4は1/4・5，6は1/2）

10号土壙　出土遺物（第31図）

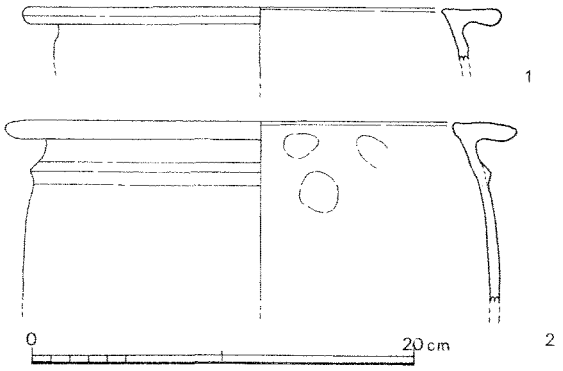
1は甕形土器の平坦な口縁の内側に若干の伸びがあり，外側の端部は厚みを持つ。器面の色調は外面が橙色で内面は茶系の橙色を呈し，内面はナデ潰し整形を行い外面は風化のため整形痕が不明である。2は口縁端部がやや厚く平坦な面に凹みをなす甕形土器である。外面は刷毛目整形，内面はナデ整形を行い器面の色調は内外面ともに淡赤色を呈している。3は丹塗の甕形土器。口縁は平坦で外側端部が厚く垂下ぎみとなり，胴上部にM字突帯が1条貼り付けられている。4は2と同一個体の甕形土器と思われるが接合面が確認できない資料である。5は，平坦な口縁の外側端部が垂下した甕形土器である。口縁の内側端部は薄く伸び，胴上部に断面三角形の突帯を1条付けている。器面の整形はナデ整形を行っている。6は丹塗の鉢形土器で器形は底部から内湾して立ち上がり，口縁部へ移行し，口縁端部は丸みを持っている。器面全体が朱色を呈する。



第31図　10号土壙　出土遺物（1/4）

11号土壙　出土遺物（第32図）

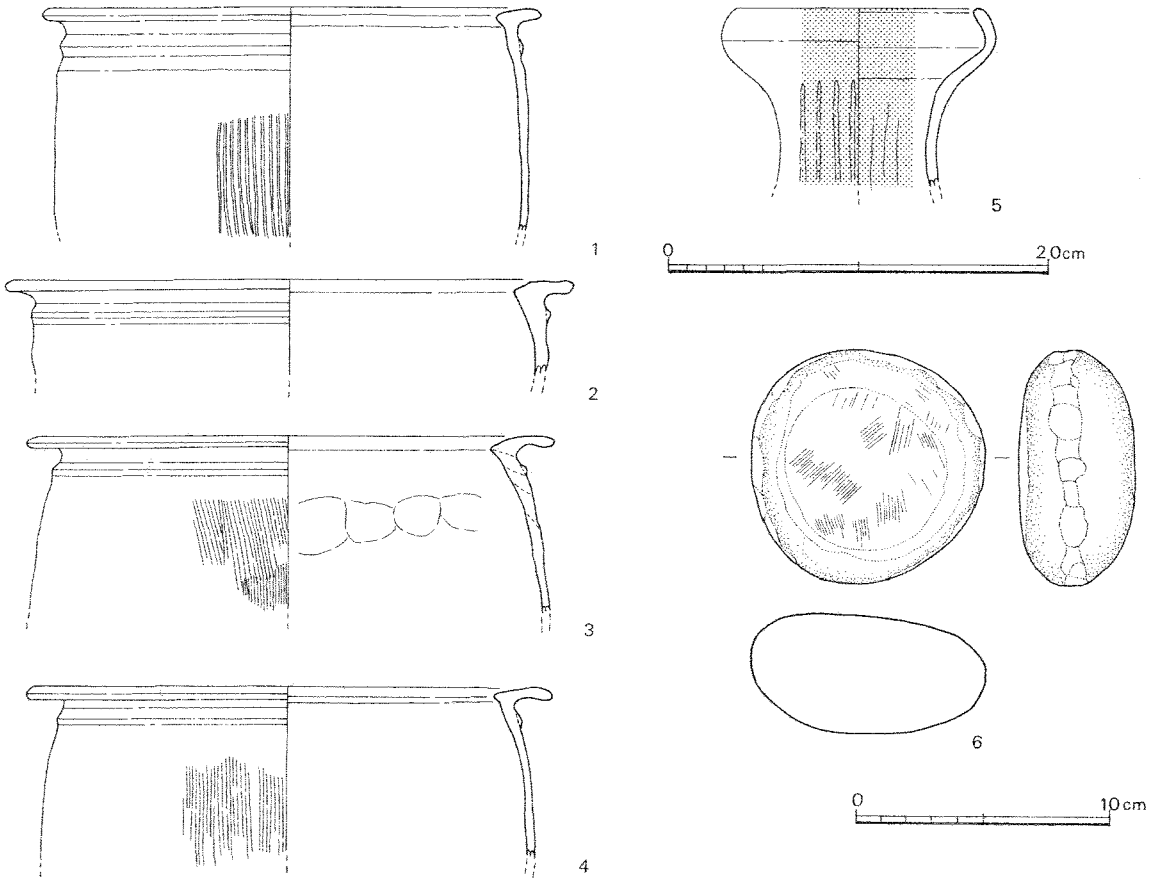
１は平坦な口縁部をなす甕形土器である。口縁端部が肥厚し，器面の色調は内外面ともに淡灰色を呈している。２は平坦な口縁部をなす甕形土器で内側に口縁端部が伸び，外側口縁部は肥厚してやや垂下ぎみとしている。外面にはわずかに刷毛目整形痕が残り，胴上部は断面三角形の突帯を１条付けて内面は指押さえとナデ整形痕が認められる。器面の色調は外面が茶灰色で内面は灰黄色を呈する。



第32図　11号土壙　出土遺物（1／4）

12号土壙　出土遺物（第33図）

１は短く平坦な口縁とする甕形土器で口縁部中央に厚みがあり，内側に向かって口縁端部がやや伸び，胴上部に断面三角形の突帯が１条付めぐる。胴部に縦位の刷毛目整形痕が残る。２は平坦な口縁をなす甕形土器である。外側の口縁端部にやや厚みを持ち，胴上部に突帯が１条めぐり器面の色調は，外面が黄灰色で内面は暗黄灰色を呈している。３は，薄く平坦な口縁の甕形土器である。口縁がやや内側に伸び外側は垂下ぎみとし，胴上部に形骸化した突帯が１条付く。刷毛目は外面に縦位に施して

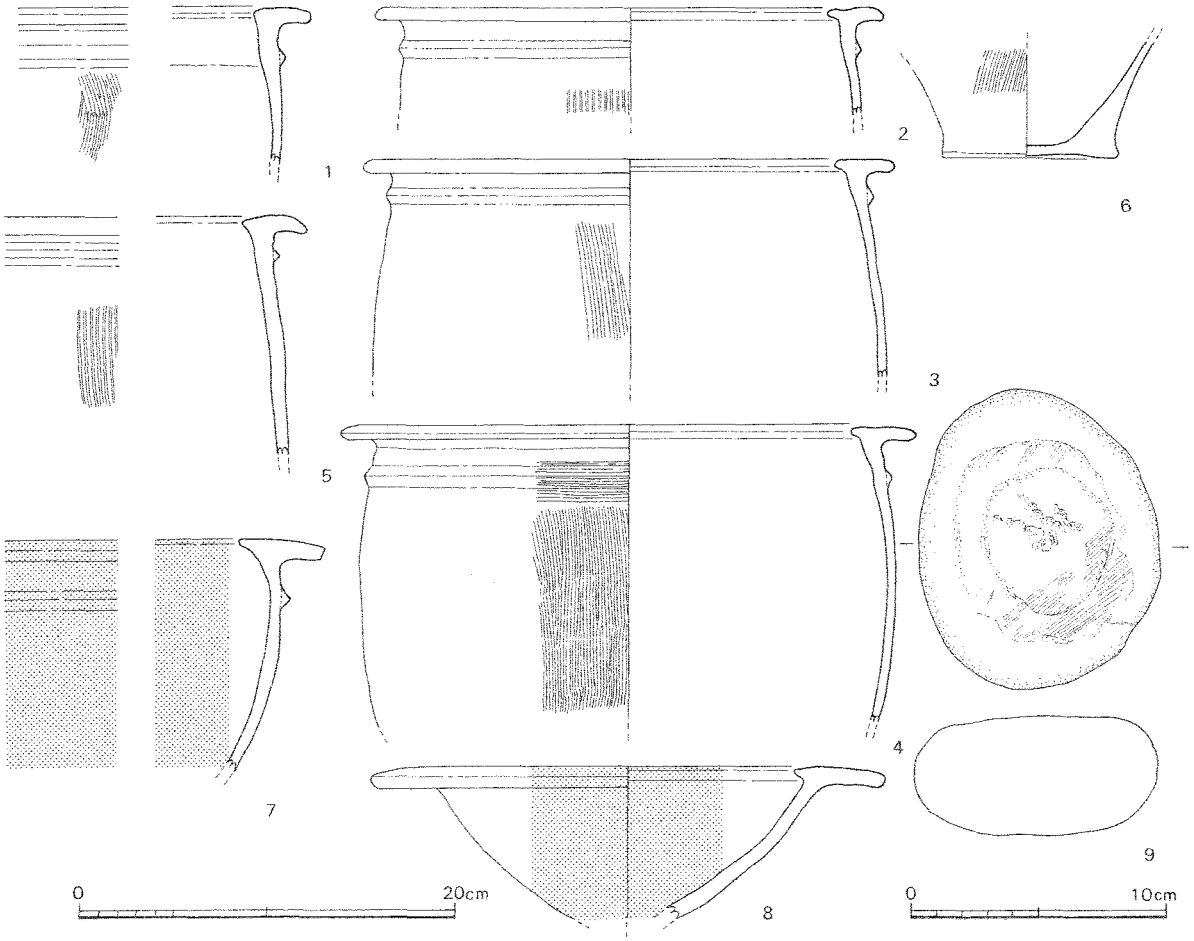


第33図　12号土壙　出土遺物（１～５は１／４・６は１／３）

いる。4は3より更に薄い平坦な口縁の甕形土器で口縁が内側に伸び，外側は垂下する。形骸化した突帯を1条めぐらし，器面の整形は外面を刷毛目とし内面はナデ整形を行っている。5は袋状口縁の壺で頸部から外反ぎみに口縁部へ伸び，口縁部で内湾し口縁端部へ移行し端部は，丸みを持つ。外面にヘラナデの痕跡が残り，口縁部内外面に朱を塗り頸部は，ヘラ状整形痕が残る。6は，敲打とスリの用途に用いられた叩き石で当初はスリ石で用いられているがスリの部分は内円の外に残り，叩きが中央と側面全周に付いている。

13号土壙　出土遺物（第34図）

1は平坦な口縁部をなす甕形土器である。口縁部は逆L字形とし，胴上部に断面三角形の突帯が1条めぐり外面の胴部にわずかに刷毛目が残る。内面はナデ整形を施し色調は外面が暗灰黄色で内面は白黄色を呈している。2は薄く平坦な口縁部をなす甕形土器で口縁の内側が伸び，外側端部は垂下ぎみに丸く納め，断面三角形の突帯を胴上部に1条めぐらしている。外面はナデ整形後に刷毛目調整をし，内面はナデ整形としている。器面の色調は，外面が暗灰黄色で内面が暗橙色を呈する。3は，薄く平坦な口縁部をなす甕形土器である。口縁の内側が伸び，口縁の外側の端部はやや垂下し丸く納め断面三角形の突帯を胴上部に巡らしている。器面の色調は内外面ともに暗黄色を呈し，縦位の刷毛目を外面に施し，内面はナデ整形としている。4は薄く平坦な口縁部をなす甕形土器で口縁内側がやや



第34図　13号土壙　出土遺物（1～8は1/4・9は1/3）

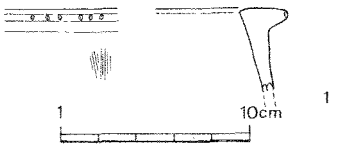
伸び，外側端部は垂下ぎみとなり胴上部に断面三角形の突帯をめぐらし，外面をきめの細かい刷毛目で整形し内面はナデ整形として胴部の張りがやや強くなる。器面の色調は，外面が暗黄色で内面が黒灰色を呈する。5は薄く平坦な口縁の甕形土器である。口縁部は内側にやや伸び，外面端部を垂下させ胴上部に断面三角形の突帯をめぐらし外面は刷毛目とし，内面はナデ整形を行っている。器面の色調は外面が暗橙色で内面は，暗灰色を呈する。6は平底ぎみのやや上底の底部とする甕形土器である。外面の底部から立ち上がり2㎝はナデ整形を行い，上部は縦位の刷毛目整形としている。7は長く平坦な口縁部の甕形土器である。丹が全面に塗られていたと見られるが部分的に残るのみとなっている口縁部の器形は，内側端部が伸び外側の口唇部に浅い凹みがめぐり断面三角形の突帯を胴上部に付けている。器面の色調は丹が剥落し，暗黄灰色を呈する。8は長く平坦な口縁部をなす高坏形土器である。口縁の内側端部が伸び外側は垂下し，坏部は半球形としている。外面は丹が剥落して暗黄色を呈する。内面は丹がそのまま残る。9は正裏面を叩き石として使用している。正面にスリ石としての使用痕も認められる。

14号土壙　出土遺物（第35図）

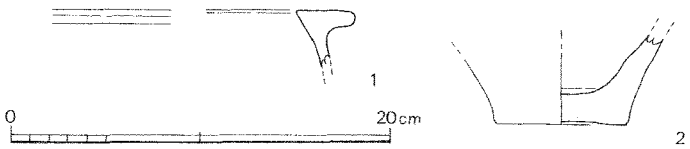
1は厚みのある平坦な口縁の甕形土器である。口縁端部に3㎜幅の刻目をめぐらし外面の体部に縦位の刷毛目が残り内面はナデ整形としている。器面の色調は，外面が暗黄灰色で内面は黒灰色をなす。

15号土壙　出土遺物（第36図）

1は平坦な口縁部の甕形土器で口縁部は比較的薄く，長めである。口縁外側の端部は丸く納めた逆L字口縁としている。器面の色調は，外面が黄褐色で内面は肌色を呈する。2は平底をなす甕形土器の底部で若干上底ぎみの底部とし，立ち上がりから刷毛目整形を行っている。器面の色調は外面が黄土色で内面は黒灰色を呈する。



第35図　14号土壙（1/4）



第36図　15号土壙　出土遺物（1/4）

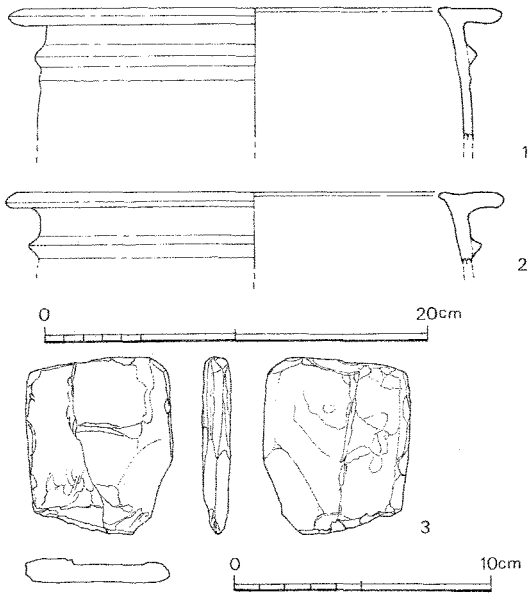
16号土壙　出土遺物（第37図）

1は平坦な口縁をなす甕形土器である。口縁外側の端部が肥厚し，垂下ぎみとし器面の整形痕は風化のため不明。胴上部に断面三角形の突帯を付し，器面の色調は内外面ともに明黄褐色を呈する。2は平坦な口縁をなす甕形土器で口縁端部の内側がやや伸びて外側端部は厚みを持ってやや垂れぎみである。胴上部に断面三角形の突帯を付け，器面の色調は内外面ともに赤黄色を呈する。3は扁平な石鑿の製作行程段階で，上面と両側面及び正裏面に研ぎを行い石材に粘板岩を使用している。

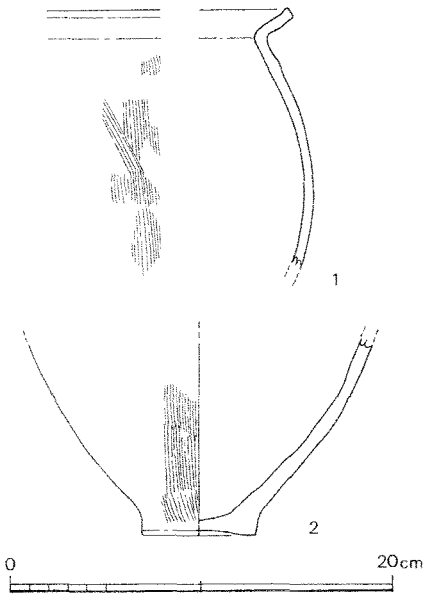
18号土壙　出土遺物（第38図）

1は内湾した口縁部に端部をつまみ出した口縁とする甕形土器。胴部に細い刷毛目が残り，内面の整形痕は風化のため不明で器面の色調は内外面とも赤黄色を呈する。2は平底の甕形土器である。中

央部が若干上げ底ぎみとなり，刷毛目が底部から胴部へ縦位に付く。器面の色調は外面が暗赤色で内面が淡黄色を呈している。



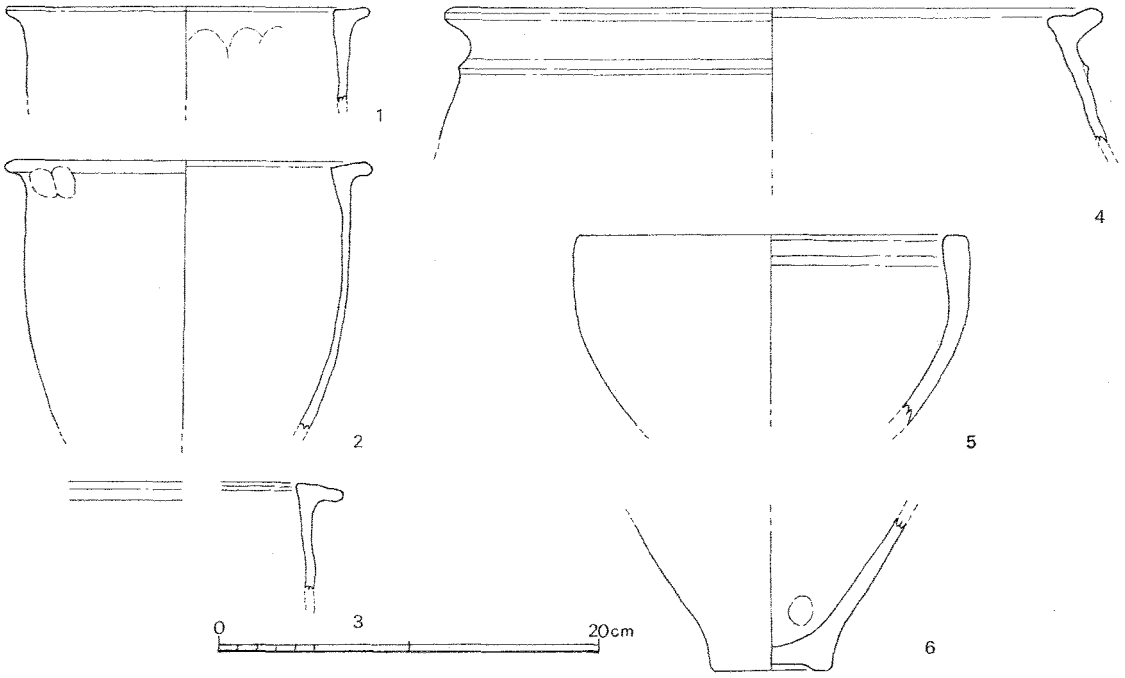
第37図　16号土壙　出土遺物(1，2は1/4・3は1/3)



第38図　18号土壙　出土遺物（1/4）

21号土壙　出土遺物（第39図）

1は短く平坦な口縁部の甕形土器としている。逆L字口縁部を形成し，外面は風化して器面調整が不明で内面はナデ整形を行っている。色調は，外面が赤褐色で内面は暗茶褐色を呈している。2は短く平坦な口縁部の甕形土器である。逆L字口縁部を形成し，口縁はやや上向きに伸び，端部は丸くお

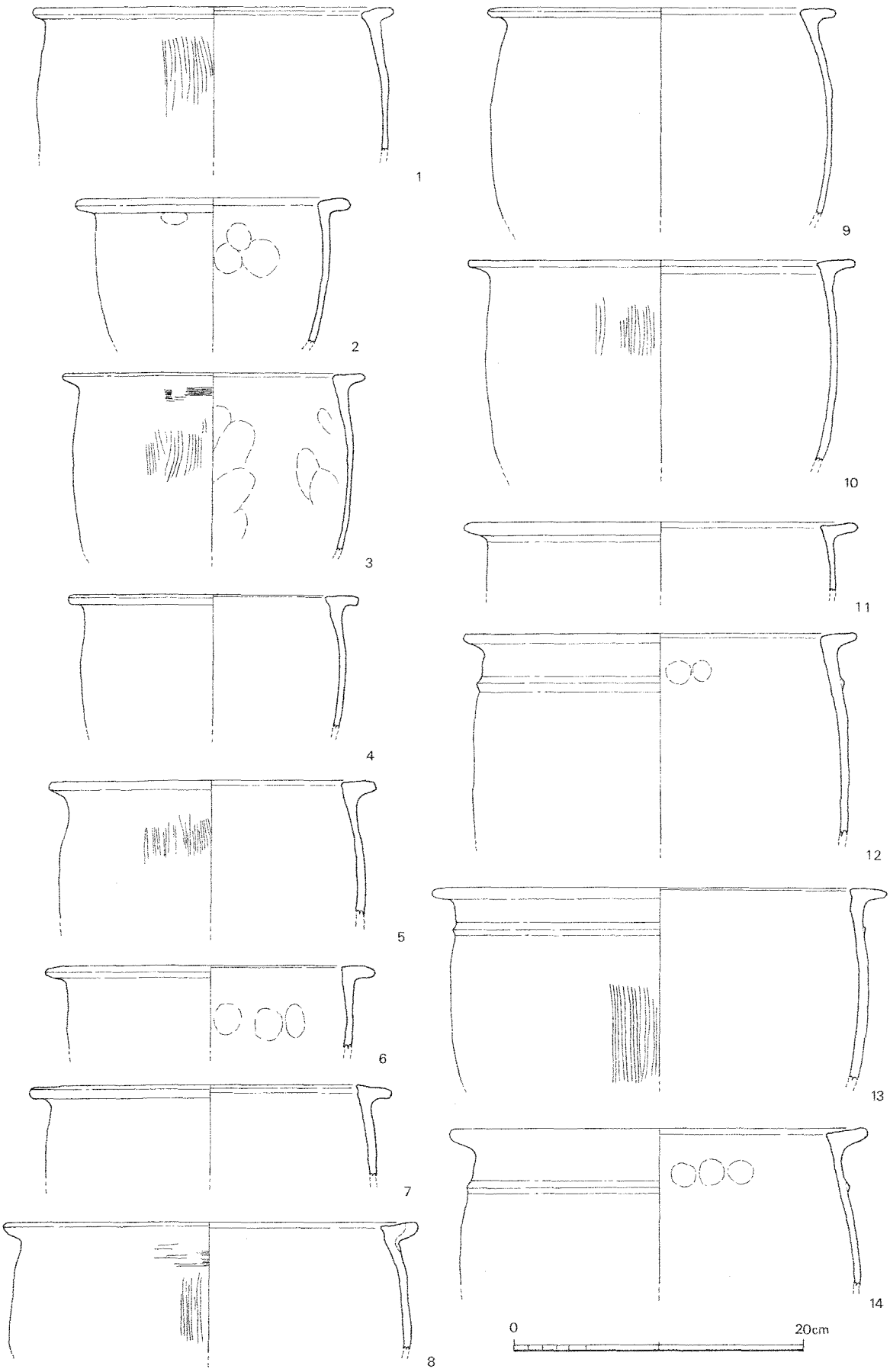


第39図　21号土壙　出土遺物（1/4）

さめ外面は風化のため器面調整が不明で内面はナデ成形としている。色調は外面が淡黄褐色で内面は暗黄黒色を呈する。1と似かよるが口縁部に厚みがあり，やや長い。3は平坦な口縁部の甕形土器で逆L字口縁部をなし，下方に伸び口縁外側の端部は丸く納める。外面は風化し，器面調整不明で内面はナデ整形とし，色調は暗黄褐色を呈する。4は平坦な口縁部の甕形土器である。口縁部途中が凹み外側の端部に厚みを持ち，胴上部に断面三角形の突帯を付けている。器面は内外面ともに風化し，整形痕不明で色調は内外面とも淡黄褐色を呈する。5は鉢形の土器である。器形は口唇部を平坦にナデ整形し胴部は内湾して口縁部へやや直立ぎみに内傾し，口縁端部に厚みを増す。色調は外面が赤黄色で内底面は黄褐色としその周囲は黒色を呈する。6は甕形土器の底部で厚底部ぎみの上底としている。内外面は風化し，整形痕が明瞭でない。色調は外面が赤黄色，内底面は黄褐色，周囲は黒色を呈する。

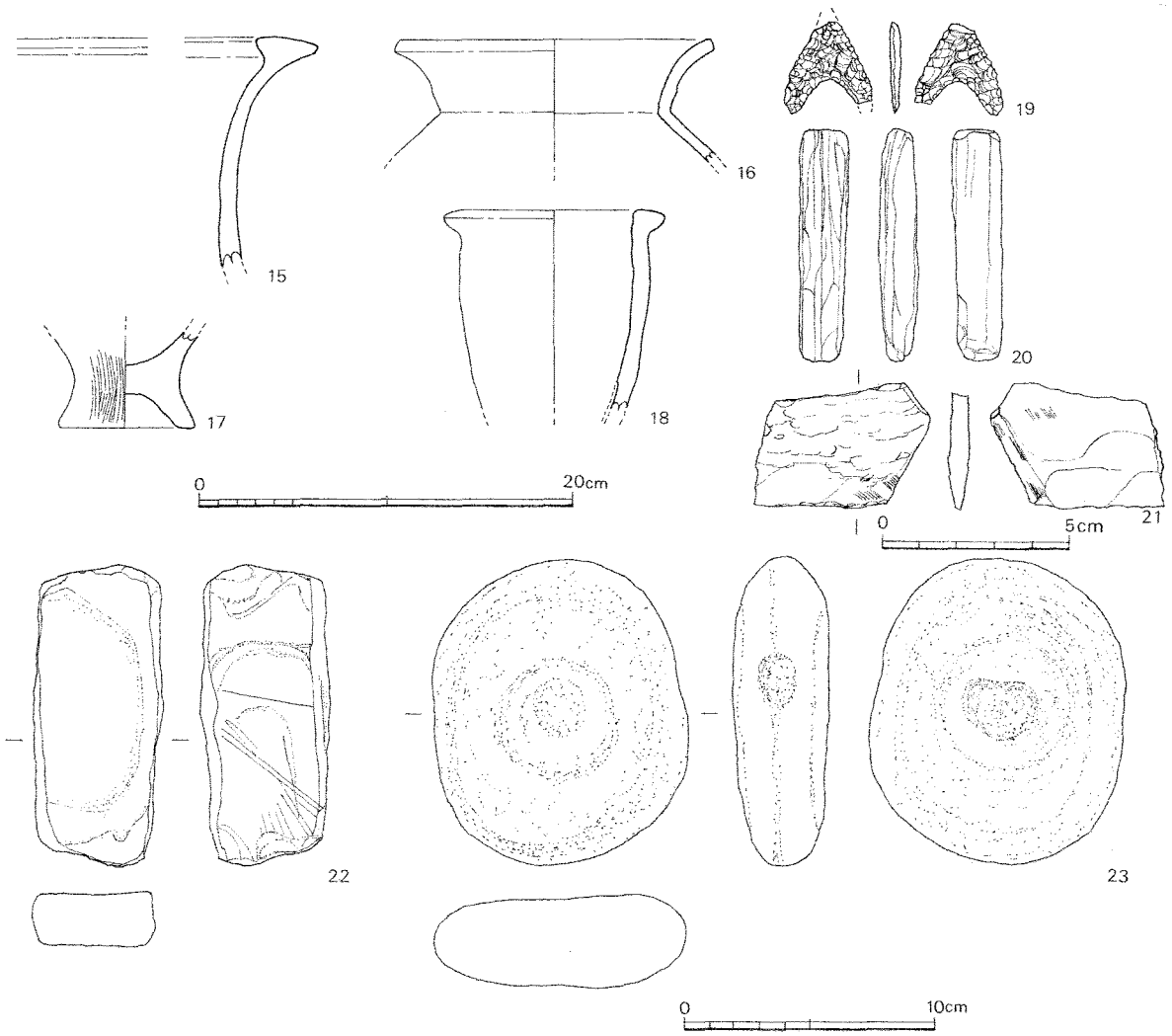
22号土壙　出土遺物（第40図，第41図）

1は厚みのある平坦な口縁の甕形土器である。口縁部が上方へ移行し，外側の端部を丸く納める。縦位の刷毛目を付けるが，器面の風化のため明瞭ではない。内面はナデ整形とし色調は外面が暗黄色で内面は黄灰色を呈する。2は，平坦な口縁部の甕形土器で口縁は短く厚みがあり上方へ移行し，外側の端部は丸く納める。器面の整形痕は外面は風化し，明瞭でなく内面は黒色を呈している。3は平坦な口縁をなす甕形土器で口縁部は，短く比較的薄でに作り外側端部を丸く納める。刷毛目整形を縦位に行い頸部は，横位のナデ整形とし内面は指押さえによる痕が付く。器面の色調は外面が茶褐色で内面は明灰黄色を呈している。4は平坦な口縁部を持つ甕形土器である。口縁部は短くやや内側に伸び，外側の端部は丸く納める。器面の外面は風化して整形痕は不明で内面はナデ整形とし，色調は器面の外面が赤褐色で内面は明黄色を呈する。5は平坦な口縁部を持つ甕形土器である。口縁は短く中央部で凹み外側の端部にやや厚みを増し，内側の口縁端部がやや伸び出す。器面の色調は，内外面ともに暗黄褐色を呈する。6は平坦な口縁部を持つ甕形土器で口縁部は内側へやや伸びだし，外側はやや下がりぎみに端部を丸く納める。器面は内外面ともに風化し，整形状況は不明で内面の指押さえがわずかに認められ器面の色調は外面が赤褐色で内面は淡赤褐色を呈する。7は平坦な口縁をなす甕形土器である。口縁部は短くやや外側が下方に移行し端部は丸く納め，内側はやや伸び出す。内外面ともに風化し，整形痕は不明で器面の色調は外面が赤褐色をなし内面は暗赤黄色を呈している。8は平坦な口縁を持つ甕形土器で口縁は，内側が伸び外側の端部は丸く納める。口縁部の直上に回転台成形におけるナデ整形痕が残り，比較的厚みのある口縁部とし，外面の整形痕は頸部を横位のナデと以下を縦位の刷毛目で整形する。器面の色調は外面が茶褐色で内面は灰茶色を呈する。9は平坦な口縁を持つ甕形土器で口縁は内側がやや伸び，外側の端部は丸く納める。器面の整形は風化のため不明瞭で色調は外面が赤褐色をなし内面は暗黄褐色を呈する。10は平坦な口縁をなす甕形土器である。口縁部は比較的長く，内側へ端部がやや伸び外側の端部は丸く納める。器面は外面は風化し部分的に刷毛目整形痕が確認でき，色調は外面が暗黄褐色で，内面は灰白色を呈している。11は平坦な口縁をなす甕形土器である。口縁内側の端部がやや伸び外側は上方に向かって厚みを増し，端部へ移行し丸く納める。器面の外面は風化し，整形痕は不明で内面はナデ整形とし，器面の色調は外面が淡橙色で内面は暗橙



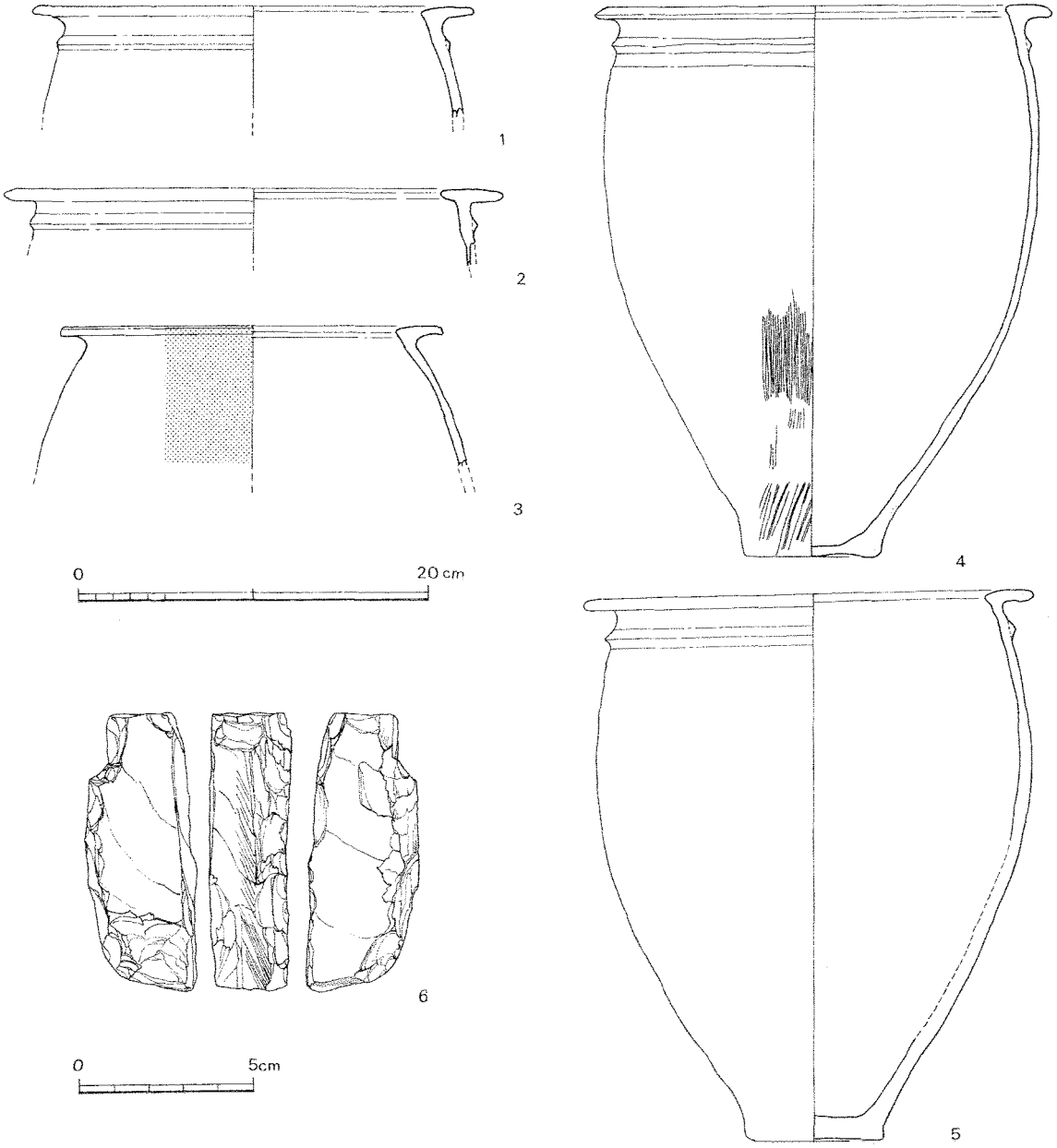
第40図　22号土壙　出土遺物（1/4）

色を呈する。12は平坦な口縁をなす甕形土器である。口縁は比較的長めで中央部が肥厚し，端部は丸く納め胴上部に断面三角形の突帯を付けている。器面の外面は風化し整形痕は不明で内面は指押さえの痕が認められ，色調は内外面ともに淡黄褐色を呈する。13は平坦な口縁をなす甕形土器で口縁部は中央が肥厚し，外側の端部は丸みを持つ。胴上部に断面三角形の突帯を付け，外面は刷毛目整形を縦位に行い内面はナデ整形とし色調は外面が明黄褐色を呈し，内面は淡い赤褐色を呈する。14は平坦な口縁をなす甕形土器である。口縁部は内側へやや伸び上方に向かい中央で凹んで厚みを増しながら外側の端部へ移行し，端部は丸く納める。胴上部に断面三角形の突帯を付け，外面に縦位の薄い刷毛目痕があり内面はナデ整形で指押さえ痕が残る。色調は内外面ともに暗茶褐色を呈する。15は壺形土器で長い頸部は直線的に立ち上がり口縁部へ移行する。口縁部は，内側へ突出し中央部が肥厚して外側の端部は丸く納める。内外面ともに器面が風化し，整形痕が不明で器面の色調は外面が赤白色で内面は白灰色を呈する。胎土は粗く長石粒３㎜程度が多量に入る。16は短頸口縁の壺形土器である。頸部から口縁部は外反して口縁端部を丸く納める。器面は風化して整形痕が不明で色調は外面が赤褐色を呈し，内面は赤黄色を呈する。17は上底の甕形土器である。外面に縦位の刷毛目が付き，器面の色調



第41図　22号土壙　出土遺物（15～18は１/４・19～21は１/２・22，23は１/３）

は外面が赤褐色で内面は黒色を呈する。18は擬無文土器である。口縁の上面は平坦とし，口縁部内側に粘土帯を貼り付けて土器整形している。器形は，胴部下位は直線的に外方に伸び中位で内傾ぎみに移行し，厚みのある口縁へいたる。器面は内外面ともにナデ整形として色調は黄褐色の外面で内面は灰白色を呈する。19は黒曜石製の石鏃である。両側縁から全周に押圧剥離を繰り返し行い，先端部は一部欠損している。20は石鑿製作工程4段階の資料で正面と右側面，裏面に研ぎだしを行うが刃部の作出部分は研ぎだしを行わず石材は粘板岩を素材とする。21は刃部を両刃に研ぎだしを行い，上部は敲打痕を残し裏面は全面に研ぎ出し痕が認められる石庖丁で使用石材は硬質砂岩を利用している。22は砂岩を用いた砥石で楕円形状に正面を使用している。裏面は11本の細く鋭利な傷が付き，鋭利な傷は金属器の使用によって付いたものと考えられる。23は正面と裏面の右側面に敲打による凹みが認め



第42図　23号土壙　出土遺物（1～5は1/4・6は1/2）

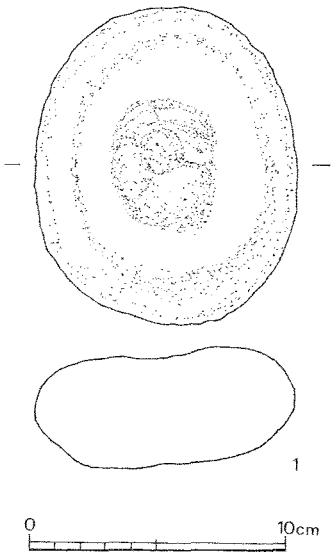
られる。左側面はスリによる摩耗が残る。

23号土壙　出土遺物（第42図）

1は薄く平坦な口縁を持つ甕形土器で，口縁は内側がやや伸び胴上部に断面三角形の突帯が付く。外面は風化し刷毛目整形がわずかに残る程度で，内面はナデ整形とし器面の色調は外面が暗灰色で内面は暗黄色を呈する。2は鋤形口縁をなす甕形土器である。口縁は内側が突きだし，外側はやや垂下し胴上部に断面三角形の突帯を付けている。器面の色調は，外面が暗赤褐色で内面は淡赤褐色を呈し内外面ともに風化し整形状況は不明である。3は丹塗の無頸壺である。平坦な口縁とし，外側の端部をナデによる面取りをしている。色調は外面は朱色で内面は朱色が剥落し，暗黄赤褐色を呈する。4は平坦な口縁部の甕形土器である。口縁は内側に突きだし，外側は若干垂れぎみとなり，胴上部に断面三角形の突帯が付き底部はやや上底の平底としている。器形は底部から外方に胴部中位まで伸び中位で張り，中位から口縁まで内湾する。刷毛目は底部から胴部中位まで付くが，外面の中位から口縁部はナデ整形とし，内面はナデ整形としている。器面の色調は，茶赤褐色を外面は呈し内面は底面から胴部の1／3までが黒色で2／3は明黄褐色を呈する。5は平坦な口縁の甕形土器である。口縁部は内側に突きだし，外側は端部にやや厚みを持つ。胴上部に断面三角形の突帯が付き底部は平底とし，器形は底部から外方に胴部2／3まで伸びて胴部上位で張り，内湾して口縁部へ移行する。器面は内外面ともにナデ整形を行う。色調は，外面が暗黄赤褐色を呈し内面は黄灰色を呈する。6は石鑿の製作行程4段階の資料である。両側面については一部研ぎだしを行うが，刃部と基部については剥離調整で留まり断面はカマボコ形を呈する。石材は粘板岩を使用する。

柱穴90　出土遺物（第43図）

1は正裏面に凹みのある凹石である。



第43図　柱穴90号出土遺物（1/3）

(4) 小　結

平成12年度は芦辺町深江鶴亀触字不條地区の調査面積300m²について実施し，遺構は溝2条と土壙24基と柱穴94基を確認している。この内，時期判断のできる遺物が出土した遺構について取り上げて報告を行った。

1号溝は弥生時代前期末として捉えられ，溝内より如意形口縁の土器と半島系の土器が共伴している。石器では，石鑿の製品及び未製品の出土があり石鑿製作に関わる時代が前期末から行われていることを確認した。石鑿の製作工程については，2層・3層出土の石鑿製作段階における資料があり，本文中の製作工程の補足説明として1段階から5段階に分けて分類した行程を付け加えておきたい。1段階は母岩からの剥離を行う前に，必要とする部分に敲打を加えて表面の調整を行い母岩から切り離す。2段階は切り離した素材を側面と正面に調整剥離を行い石鑿の輪郭を形つくる。3段階は上部

と下部に剥離調整を行い基部と刃部の輪郭をつくる。4段階は裏面・側面の研ぎを行う。5段階は刃部・基部・側面・正裏面の6面を研ぎ完成させる。以上の行程を踏まえて製作を行っている。

2号溝は弥生時代前期末から中期初頭の時期にあたり,1号溝より一時期遅くまで使用されていた状況が調査の結果判明した。遺物は如意形口縁の甕形土器・城ノ越式土器の甕形土器と石鑿・柱状抉入片刃石斧・砥石・凹石・スリ石等が出土している。

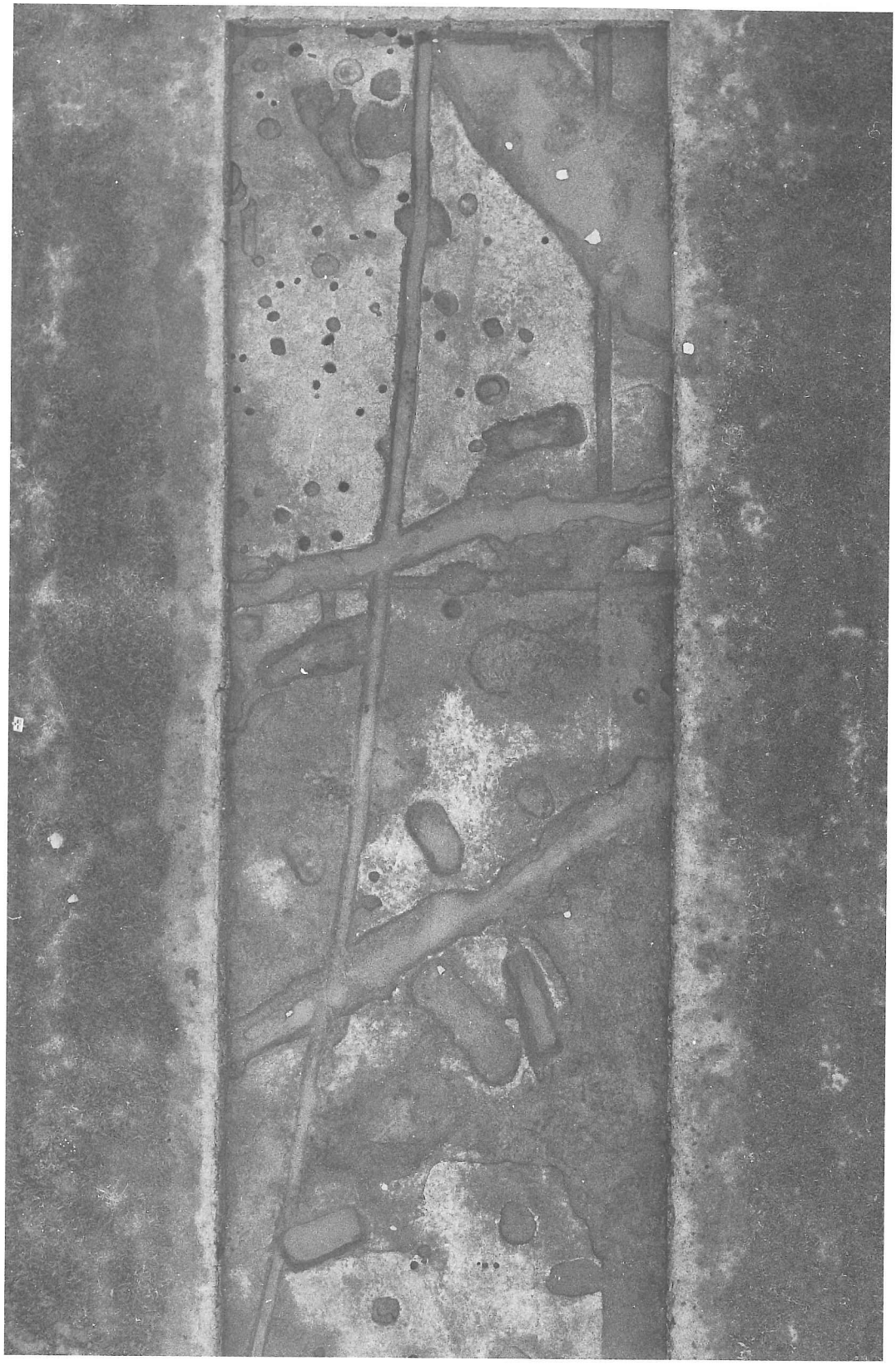
土壙は1号から24号を確認し，丹塗の土器が出土した遺構として10号・12号・13号・23号があり，半島系土器の出土した遺構に22号土壙が上げられる。土壙については，時期が特定できる遺構について補足したい。

1号土壙は，弥生時代中期前半の甕形土器・器台・壺形土器と石鑿・砥石・磨製石鏃・打製石鏃等が出土している。3号土壙は，口縁部の外側が垂下ぎみの土器資料と跳ね上げ口縁をなす土器資料が出土している。時期的には弥生時代中期の須玖Ⅰ式の新段階に比定される。4号土壙は，須玖Ⅰ式土器段階の甕形土器と石鑿が出土している。5号土壙は，石鑿の完成品が出土している。遺構は4号土壙に切られており弥生時代中期初頭が考えられる。7号土壙は，須玖Ⅱ式段階の甕形土器が出土している。8号土壙は，須玖Ⅱ式段階の甕形土器が出土しているが7号土壙に切られた状況から8号土壙が若干古くなる。9号土壙は，弥生時代前期末から中期初頭の城ノ越式土器と柱状抉入片刃石斧と局部磨製石鏃が出土している。10号土壙は，弥生時代中期後半の須玖Ⅱ式の丹塗の甕形土器と鉢形土器が出土している。11号土壙は，弥生時代中期中頃の須玖Ⅰ式の新段階の甕形土器が出土している。12号土壙は，弥生時代中期後半の須玖Ⅱ式の甕形土器と丹塗の袋状口縁の壺形土器に伴ってスリ石が出土している。13号土壙は，弥生時代中期後半の須玖Ⅱ式の甕形土器と丹塗の壺形土器及び丹塗の高坏がスリ石と伴に出土している。14号土壙は，弥生時代中期初頭の断面三角形の平坦口縁に刻目を付けた城ノ越式土器の甕形土器が出土している。15号土壙は弥生時代中期前半の須玖Ⅰ式の甕形土器が出土している。16号土壙は，弥生時代中期後半の須玖Ⅱ式の甕形土器が出土している。18号土壙では，弥生時代中期後半の甕形土器が出土している。21号土壙は，須玖Ⅰ式の甕形土器，鉢形土器が出土している。22号土壙は，須玖Ⅰ式の甕形土器・壺形土器に伴い半島系土器が出土し，石器に石鑿・石鏃・石鎌・砥石・凹石が出土している。23号土壙は須玖Ⅰ式の新段階から須玖Ⅱ式の甕形土器と壺形土器及び石鑿が出土している。柱穴ではPit90から凹石1点の出土があった。以上のような状況で最も古い遺構が9号土壙にあたり，1号溝と同時期に存在していたことが考えられる。その他の遺構は弥生時代中期前半から中期後半の範疇で営まれていたことが今回の調査で確認された。

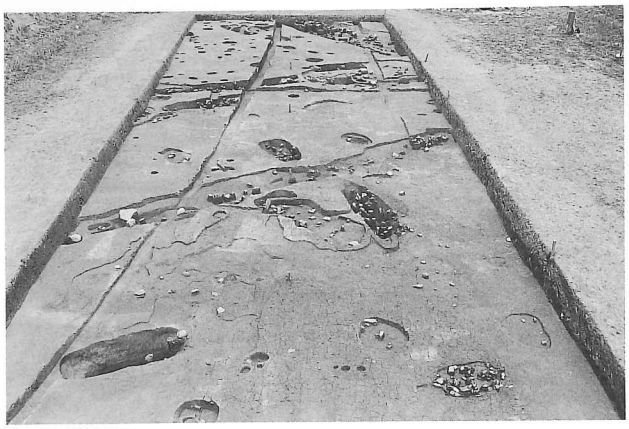
参考文献

武末純一・柳田康雄・玉永光洋・西健一郎著『弥生文化の研究第4巻弥生土器Ⅱ』「2九州地方の弥生土器」編集　金関　恕／佐原　眞　発行所　雄山閣出版株式会社1987

図　　版



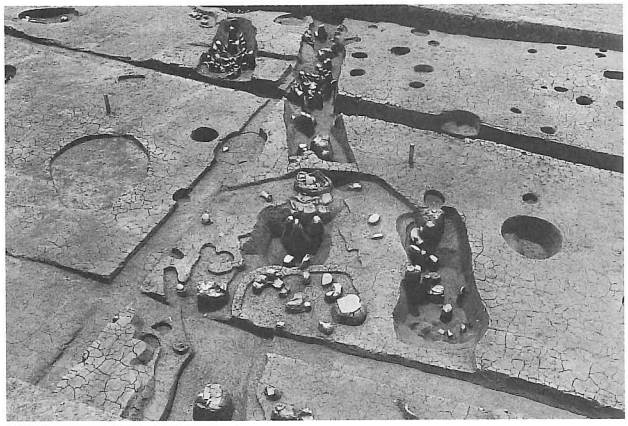
調査区全景航空写真



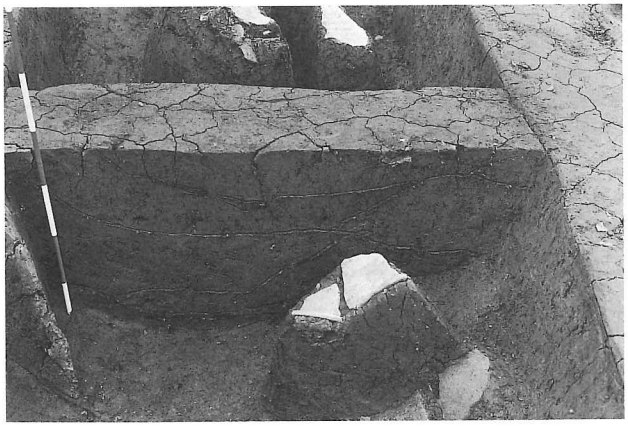
調査区全景（南から）

調査風景

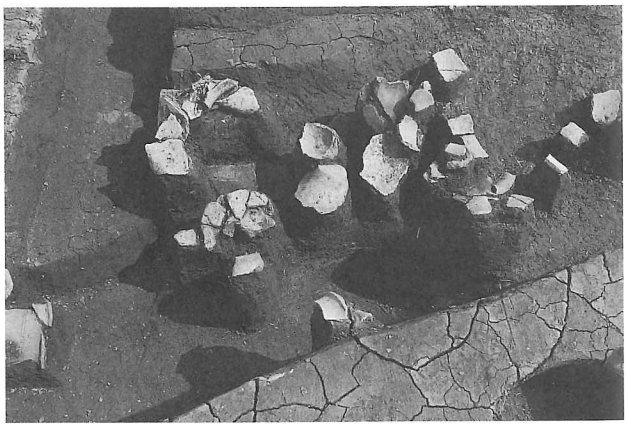
調査風景



１号溝　検出状況（東から）

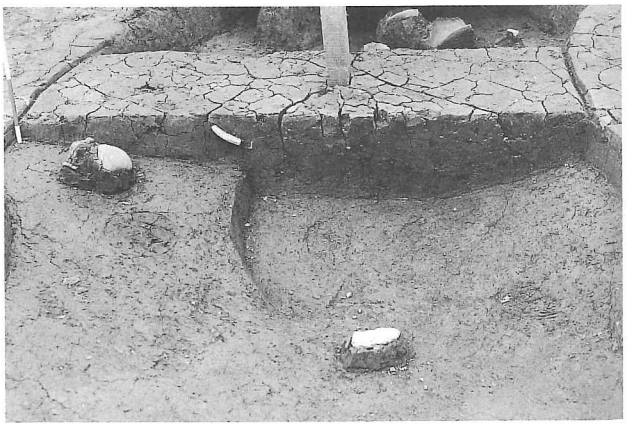


１号溝　横断土層



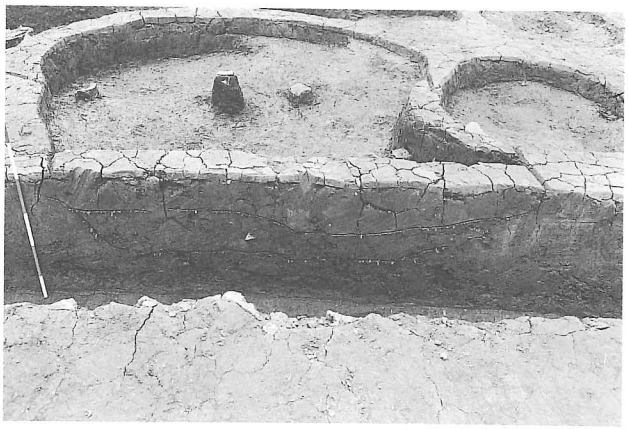
１号溝　遺物出土状況

２号溝　検出状況（東から）

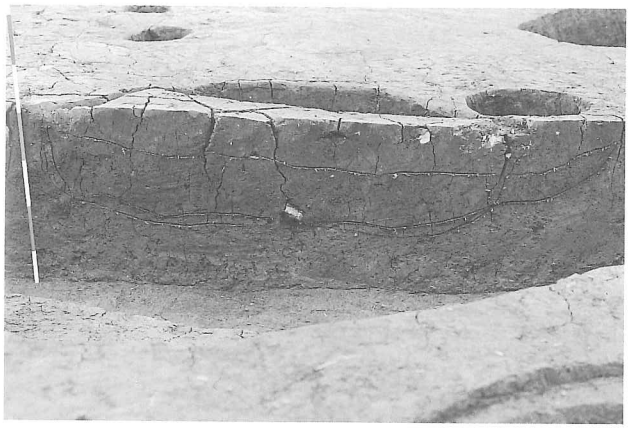


２号溝　横断土層

２号溝　遺物出土状況



４号土壙　横断土層

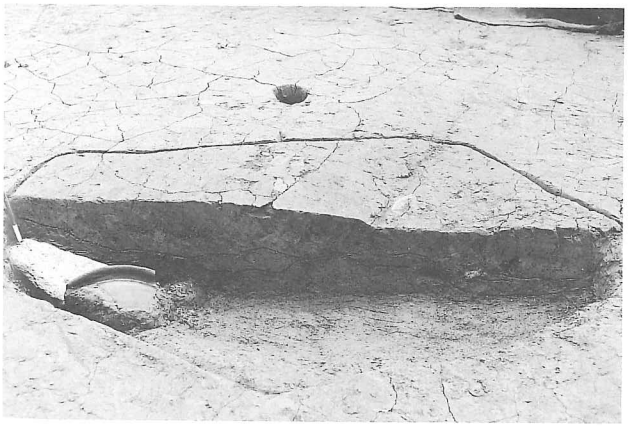


６号土壙　横断土層

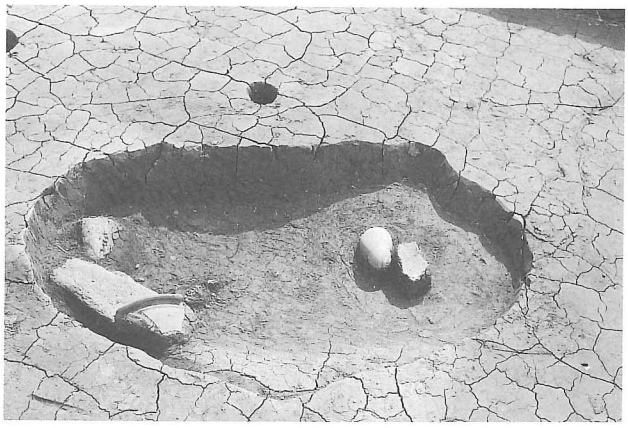
９号土壙　遺物出土状況

10号土壙　横断土層

10号土壙　遺物出土状況

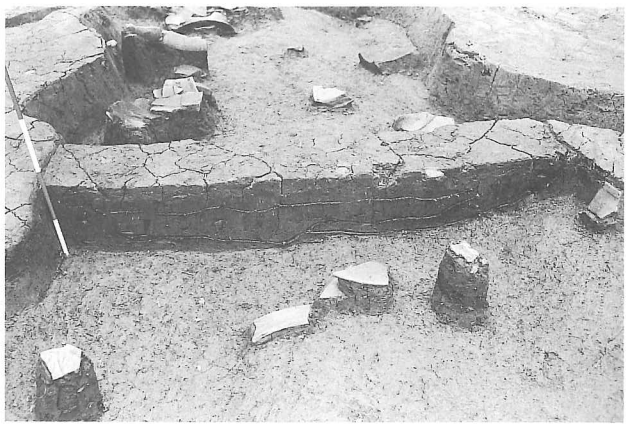


11号土壙　横断土層



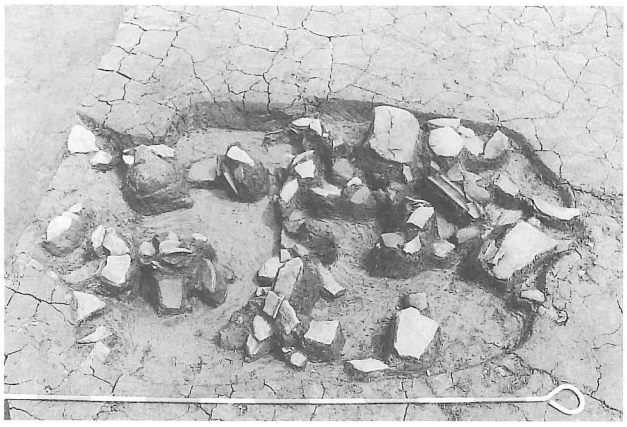
11号土壙　遺物出土状況

12号土壙　遺物出土状況

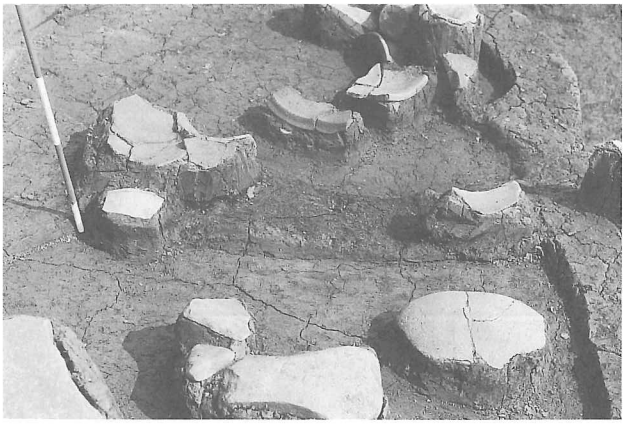


13号土壙　横断土層

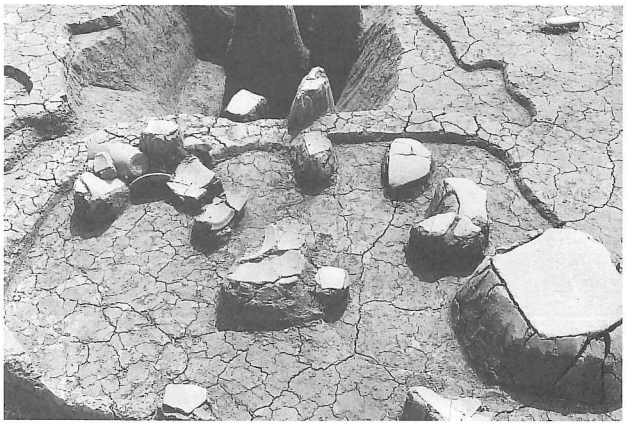
13号土壙　遺物出土状況



16号土壙　遺物出土状況



21号土壙　横断土層

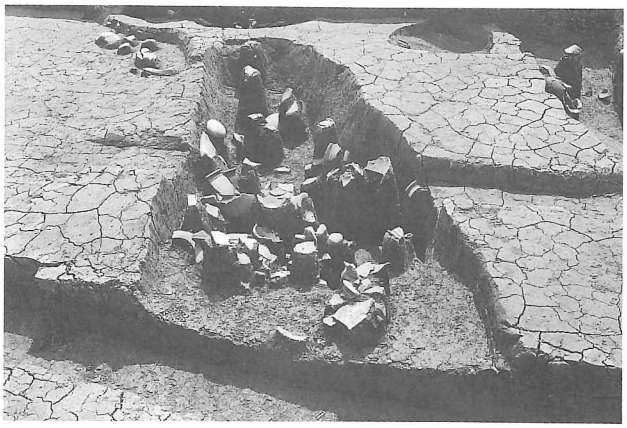


21号土壙　遺物出土状況

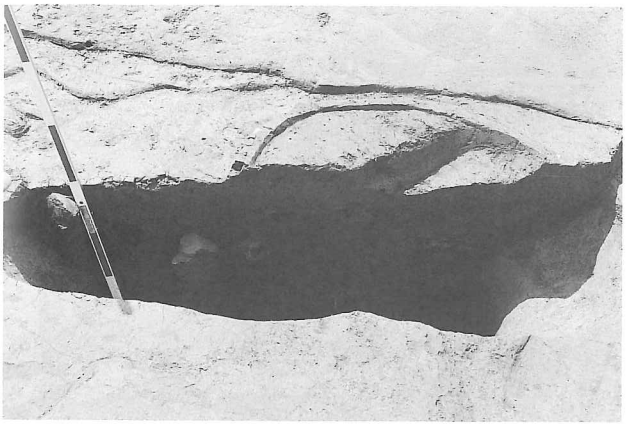
22号土壙　横断土層

22号土壙　遺物出土状況

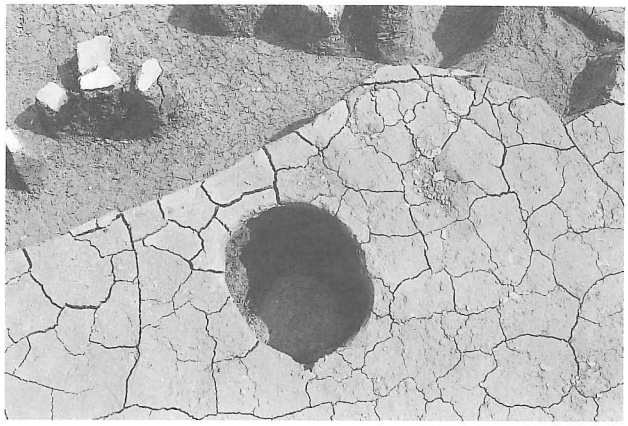
23号土壙　横断土層



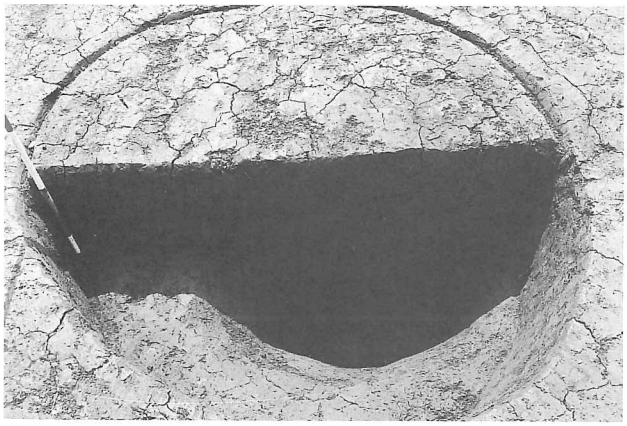
23号土壙　遺物出土状況



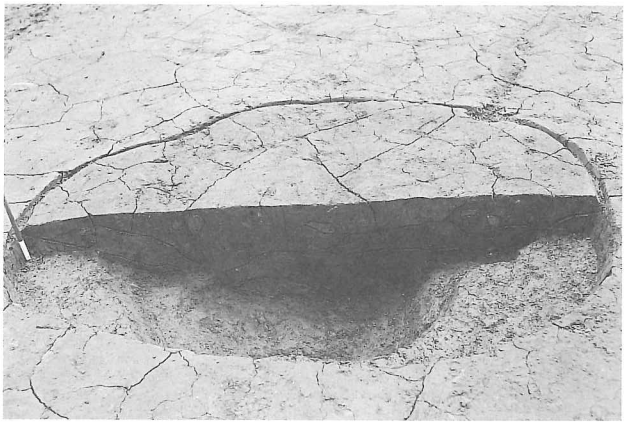
24号土壙　横断土層



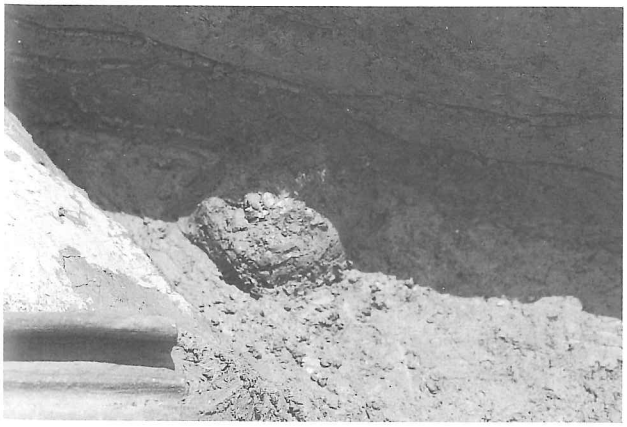
柱穴51　石製礎盤検出状況



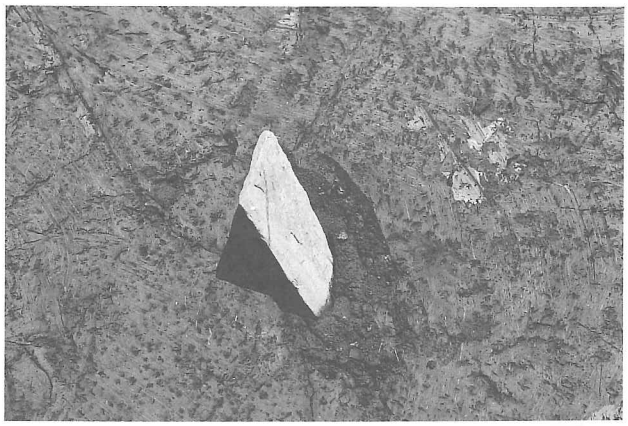
柱穴61　横断土層



柱穴71　横断土層



11号土壙　イノシシの歯出土状況



３層出土遺物

遺跡遠景（西から）

2．大川地区の調査

(1) 調査概要（第44図）

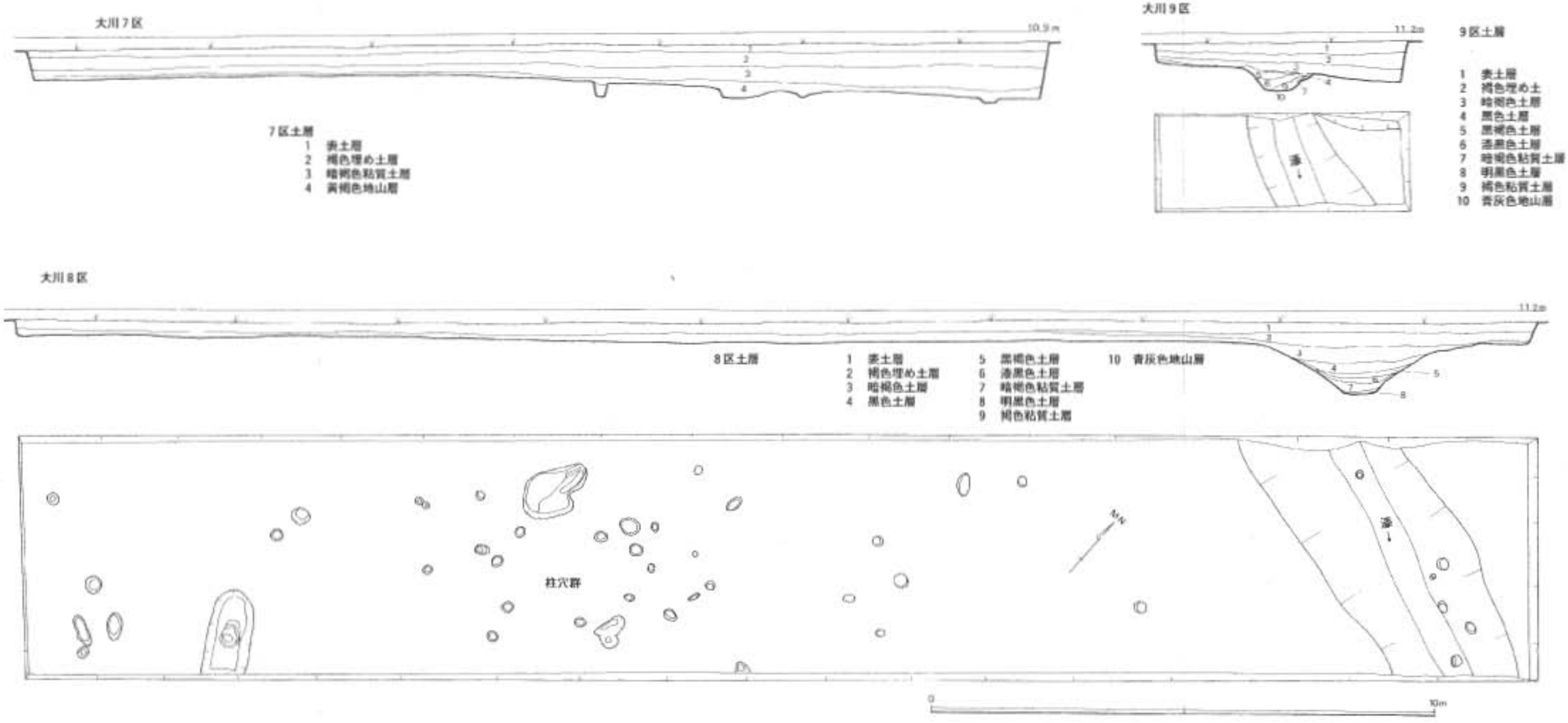
大川地区は遺跡の南東部にあたり，平成７年度及び平成10年度の調査では初期貿易陶磁やイスラム陶器，滑石製品などが出土して，古代から中世にかけて何らかの公的施設があるのではないかと考えられている地域である。この区域には１～８区の調査区を設定した。

１・２区は標高14～15mの水田南側に２m×20mの面積で設定した。表土層の下はすぐに黄褐色粘質土層で遺物包含層は見られない。１区は東西にゆるく傾斜し，水田造成の前は饅頭畑だったことがわかる。２区は東側に傾斜し，埋め土が堆積しているが，この中に若干の弥生土器が含まれている。３区は１・２区の東側に隣接する水田で，標高13mと一段低くなっている。２m×25mの面積で東西に設定した。西側から東側にかけて傾斜し，中央部から急に落ち込んでおり，２枚の畑が１枚に水田化されている。西側はかなり削平を受けており，表土層下の浅いところから２層の暗褐色土層が見られ，弥生土器の小破片がわずかに残っている。また，３層の褐色粘質土層の部分は柱穴が数個確認できる。弥生期のものと考えられるが，断定は出来ない。５～７区は平成10年度調査区の南側に，古代関連のものが拡がるかということで設定した。この水田は以前，金魚の養殖が行われており，５・６区はほとんど撹乱されていた。７区は表土層及び埋め土の下に暗褐色粘質土層が見られ，土師器，瓦質土器片や滑石片，須恵器片などが出土した。内容的には前回の調査で得られたものと一致しており，古代の範囲が拡がっていることが確認された。８区は深江池の南東約100mの標高11mの畑に５m×30mの面積で北東に設定した。ここも饅頭畑が削平されており，土層は南から北方向に傾斜している。南側は表土層の下からすぐに９層の褐色粘質土層が見られ，この層から黒曜石剥片やナイフ形石器が出土している。６区の３層暗褐色土層は若干くぼんだ状況が観察され，中世の土師器片や滑石片が流れ込んでいる。この部分を掘り進めて行くと，青灰色地山層を掘り込んだ濠が確認された。上面は削平されているが，上面幅約４m，深さ１mで，４層の黒色土層からは弥生中期の土器が出土した。方向については西側方向に延びているが，東側については確認できない。以下主要な試掘壙について概観する。

(2) 土　　層（第45図）

今回の調査区はほとんどが２次的な造成が行われており良好な基本土層になるものがない。耕作土層のすぐ下に弥生時代の包含層か旧石器を含む層がいきなり現れる状況である。古代の遺物が出土した７区は，比較的包含層がよく残っていた。耕作土層の下に褐色の埋め土があり，その下に暗褐色粘質土の包含層が見られ，４層である黄褐色地山層には風化礫や黄色い粒子の砂利状のものが含まれる。この土層の状況は前回の調査区の土層にも一致している。８区は新たな弥生の濠が確認された地点であるし，２層は耕作土層と埋め土である。３層は暗褐色土層で中世の遺物が出土するが，濠の部分では少しくぼんでいる。遺物は特にこの部分に集中する。濠以外の区では３層の下にここで９層とした

第44図　大川地区調査区域図（1/2000）



第45図　大川7・8・9区土層及び遺構実測図（1／80）

旧石器の遺物を含む褐色粘質土が見られる。濠の土層は4層の黒色土層から弥生中期の土器片が出土する。その以下には5層のややさらりとした黒褐色土層，6層はさらりとした漆黒色の土層，7層は5層に比較的似ているものの，少し黄色の度合いが強い層，8層は明黒色土層が堆積し，10層の青灰色地山層に達している。遺物は4層だけに見られる。このことは，濠は中期の早い段階で掘られ，一時期使用された可能性が強いと考えられる。

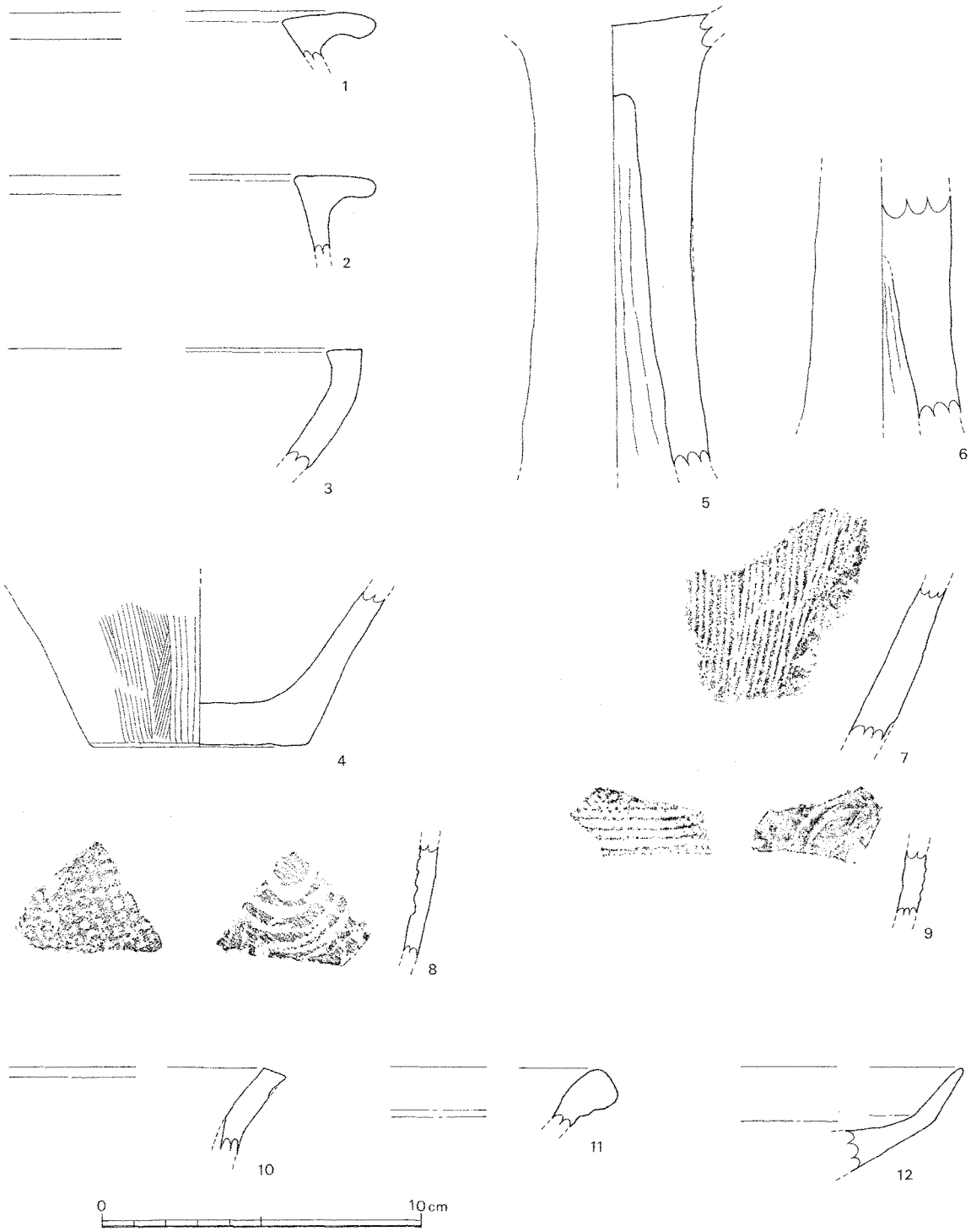
(3) 遺　構（第45図）

大川地区におけるはっきりした遺構は，8・9区で検出の濠と8区の柱穴だけである。8区は1～5の地山層に柱穴が40数個確認できるが，その中には小穴も含まれる。弥生時代の包含層が削平されているのでほとんど時期が明確なものはない。8区2の柱穴から1点だけ弥生土器の破片が含まれていただけである。濠は一番北東側の8区6で東西方向に検出された。上面は削平されているが，約3.3mの幅を有し，深さ約1m，下面は約0.55mの幅で断面はV字に近い形状を呈する。北側の東寄り斜面に柱穴が4個と下面の両端に2個見られるが，性格等については不明である。濠の方向を探るため，8区から西側に10m離れた同じ畑に5m×2mの9区を設定した。この区の下面は8区の下面と比較すると約48cm高く，上面幅が1.30mと狭くなっており，下面が上がった分，上面が削平を受けていることが分かる。東側の延長を狙って8区から約9m離れた，一段低い水田に1m×5mの10区を設定したが，埋め土だけで濠は検出できなかった。今後は東側の同レベルの水田で東方向の濠を確認する必要がある。濠の時期については先にも述べたが，弥生中期前半に掘られ後半には埋まったものと考えられる。

(4) 遺　物（第46・47図）

土器（第46図1～12）

1～6は8・9区4層出土の土器である。1は平坦な口縁を呈した須玖式土器で外側に傾斜している。内側はやや尖り気味に丸くおさめられている。胎土は石英粒を多く含み，色調黄褐色，全体に摩耗している。2は口縁平坦部が1よりも小さく器形も小ぶりである。口縁外側の端部は丸く尖り気味におさめられている。胎土には石英や白と赤の砂粒を含み色調は茶褐色を呈する。3は湾曲した口縁部で，口唇部はヘラナデしたように平坦である。しかし，一方の端部も丸くなっており鉢になるのか器形が不明である。胎土には石英，雲母，長石を含みよくしまっている。色調は黄褐色を呈し，焼成良好。4は須玖式土器の底部でわずかにあげ底である。外側に丁寧なハケ目調整が施されている。胎土には石英粒を多く含みよくしまっている。色調は褐色で焼成良好。5・6は高杯脚部である。5は身の内側と脚部にわずかな丹塗りの痕跡をとどめる。胎土には石英と赤色砂粒が目立つ。6は脚部の中央部分だけで，形状は5よりも小さい。時期的には弥生中期と考えられる。7は8区3層からで瓦質のすり鉢片である。8～11は7区3層出土の遺物である。8・9は須恵器で外側に格子目叩き，内側に同心円状の叩きが見られる。10は須恵器の壺口縁で端部はシャープである。外側にはわずかに自

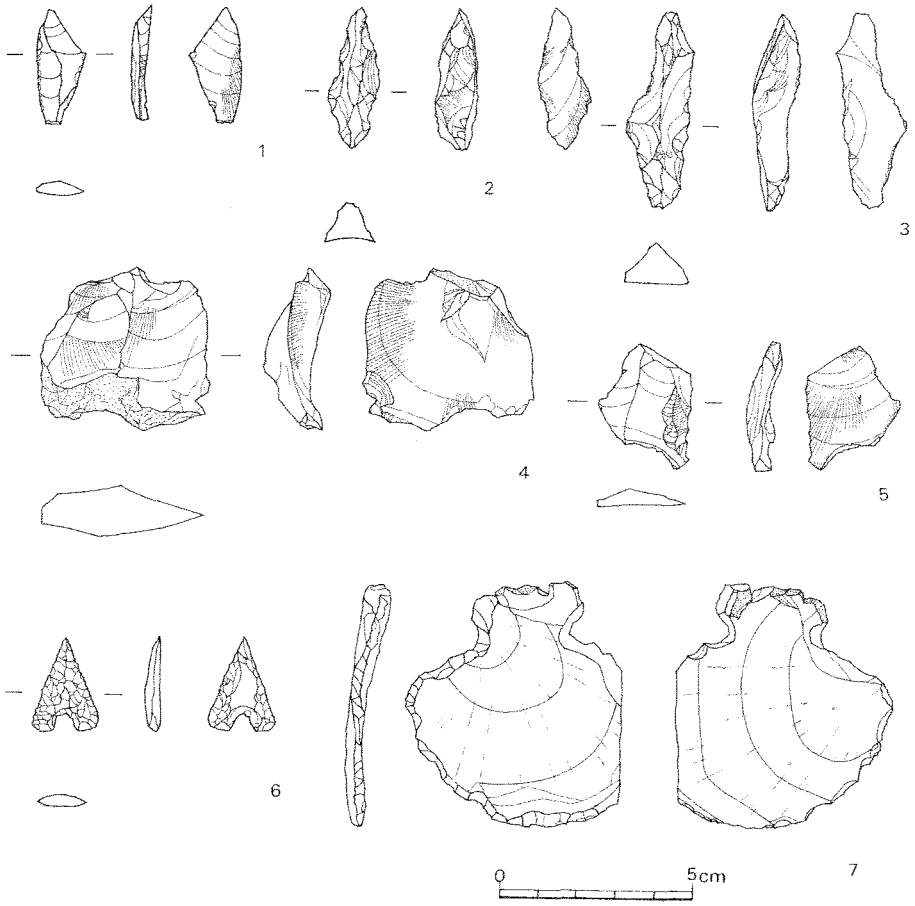


第46図　大川７・８・９出土の遺物実測図（１／２）

然釉が見られる。11は瓦質の壺口縁で端部は丸くなり外に一条の細い線が巡る。断面を見ると外は灰色，中は淡茶色を呈している。中世の所産と考えられる。12は８区３層出土の龍泉窯系の皿である。釉は厚くかかり内外に貫入が認められる。色調は灰緑色を呈する。

石器（第47図）

石器は大川地区の石器は８区からの出土である。１は良質の黒曜石製の小形ナイフ形石器である。基部両端は丁寧に刃潰しが施されている。刃部はうすく斜行して先端部をわずかに欠く。現存長３cm，厚さ４mm，重さ1.1ｇ。２・３は剥片利用の尖頭状剥片石器である。２は厚みのある剥片を利用し，全体的にやや粗い仕上げである。断面は三角形で，基部はやや丸く，先端は鋭くなっている。長さ3.８cm，厚さ１cm，重さ3.4ｇを測る。３は主要剥離面の平坦部が湾曲している。基部の両側は丁寧な剥離を行っているが，中程から先端部にかけては大きな剥離だけで未製品の感じもする。４は良質の小形角礫黒曜石を打ち欠き，上面と下面に自然面を残す。左面に１回の剥離，右面に２回の剥離を施している。５は下面に自然面を残す剥片で両側に使用痕が認められる。６は２層出土の石鏃である。全体を丁寧に剥離してシャープに仕上げている。長さ2.5cm，厚さ0.3cm，重さ0.9ｇを測る。７はⅡ層



第47図　大川地区出土遺物実測図（１／２）

出土のサヌカイト製石匙である。つまみ上端には自然面を残し，直下は両側から打ち欠き抉りを入れている。うすく湾曲した横剥ぎ剥片を利用しており，周縁全体を両方から剥離して刃部をつけている。形状は楕円形を呈すると思われるが，一部欠失している。6・7ともに縄文時代の所産と考えられる。

3．原ノ久保地区の調査

(1) 調査概要（第48図）

原ノ久保地区の調査の目的は，平成8年度に実施した墓域が周辺にどこまで拡がるか，また実際に遺構が残っているかを確認することである。先ず1・2区は290－2番地に2本の試掘壙を南北に平行して4m×25mの面積で入れた。2区の南側には昭和53年に試掘壙を1個所入れた地点がある。調査の結果，地山層は北から南へ傾斜しており，旧地形は削平され包含層は見られない。南側に黒い土が埋め土に混じり，弥生土器がわずかに含まれていただけであった。3区はさらに北側の空き地に3m×3mの面積で入れたが，ここも包含層は削平されていた。5区は平成8年度の墓域に一番近い所で10mも離れていない。しかし，ここも表土を剥ぐとすぐ地山層にあたり，遺構は無い。地山に石棺の抜き取り痕も見られないことから，この区域まで拡がっていなかったと思われる。このエリアで遺構が確認されたのは327－2番地の11区である。前回の調査ではE区とした試掘壙から須玖Ⅱ式の土器と浅い溝が確認されている地点である。今回はその北側に設定した。西側は浅くして地山がのぞき東側へと深くなっている。試掘壙の中間あたりで表土直下から合口小児甕棺墓が1基出土した。深くなった東側では暗褐色の包含層が認められ，土器片と板状の石棺材の破片が散在している。土器の形態から時期的には弥生中期後葉から後期後葉までが考えられる。平成8年調査の墓域の南東部は，現在住宅地になっているが，それ以前の畑の時には後漢鏡を採集したり，弥生終末期の甕棺墓が露出していた地区であるが，その南側の元住宅地に4区を5m×10mの面積で設定した。しかしこの区は，瓦粘土を取るために大きく削られ客土されていたが，その土中よりガラス玉が8個採取された。他から持ってきた土かどうかは不明である。6区はさらに東側に設定した。ここは瓦焼窯が隣接しており，地山まで撹乱を受けていた。

7区から14区は，現在の住宅地から離れた西側の現水田に設定した。町道江里線が大きくカーブした地点に北から南へ向かって谷状地形が走り，古い地図では狭い水田が階段状に形成されている。この入り組んだ地形に7区を1m×40mの面積で設定した。現在の水田は新しく造成され，埋め土が1m以上堆積し，その下に漆黒色の土層がある。客土する前の水田は，田植えするのに苦労する程の深田で，泥炭に近い層である。地山層まで掘り進めると溝状の遺構と思われるものが検出され，弥生土器の小片も漆黒色の土層からわずかに出土した。溝の方向を確認すべく，東西に13区と8区を設定したが，7区の溝に続くと考えられる遺構は検出できなかった。谷状地形の東側の標高13mの315－4・7番地に9・10・12区を設定した。ここからは石棺墓1基と小児甕棺墓1基が検出された。他にも土器の集中が見られ，遺物整理の過程で小児棺と考えられる壺も復元された。この水田の谷を挟んだ西

第48図　原ノ久保地区調査区域図（1/2000）

側では昭和54年の範囲確認調査で，濠と若干の弥生土器が出土している。さらに平成７年の町道拡幅に伴う調査では，箱式石棺墓と考えられる抜き取り跡が４個検出されているが，時代の決め手となるものはない。この区域からは，かつて石棺，甕棺墓が出土したと言われており，濠の存在も含めて，今回調査した墓域とも関連があると思われる。

(2) 土　　層（第49図）

原ノ久保地区の基本土層は11・12区の土層図に示したとおりである。１層は表土層，２層は整地した時の埋め土で耕作土にもなっており，褐色を呈している。３層は暗褐色粘質土で有機質を含んだ，固くしまった層になっている。弥生土器を包含しているのもこの層である。４層は褐色土層で，ややふんわりとした層で旧石器を含んでいる。５層は地山層で部分的に掘っているが，黄褐色粘質土層で４層より黄色味が強く粘質も強い。８区は浅い谷状の水田に設定した。この地形の水田は深田で田植えにも困ったという。最近はそれを解消するため改良を行い，１m以上の客土がある。従って１・２層は２次的な堆積である。３層は灰褐色土，４層は暗灰褐色土であるが，上下関係はなくブロック状に認められる。５層は真黒な土で粘質が強く泥炭質に近い。一部自然木なども含まれる。６層は斑灰黒色粘質土層で黒色をベースに灰色粘質土が斑状に入る。この層からわずかに弥生の土器片が出土している。地山層は９層で青灰色の粘質が強い層である。この区では２箇所に溝状のものが見られるが，人工的な感じはしない。この落ち込みには８層とした漆黒色の上層が堆積している。７層とした斑黒色土層はブロック状に入っている。７区から西側に４m離れた13区では黒色の粘質土層は見られず，浅い地点で褐色のやわらかい岩の地山層が見られ，谷のへりの部分にあたる。

(3) 遺　　構（第50・51図）

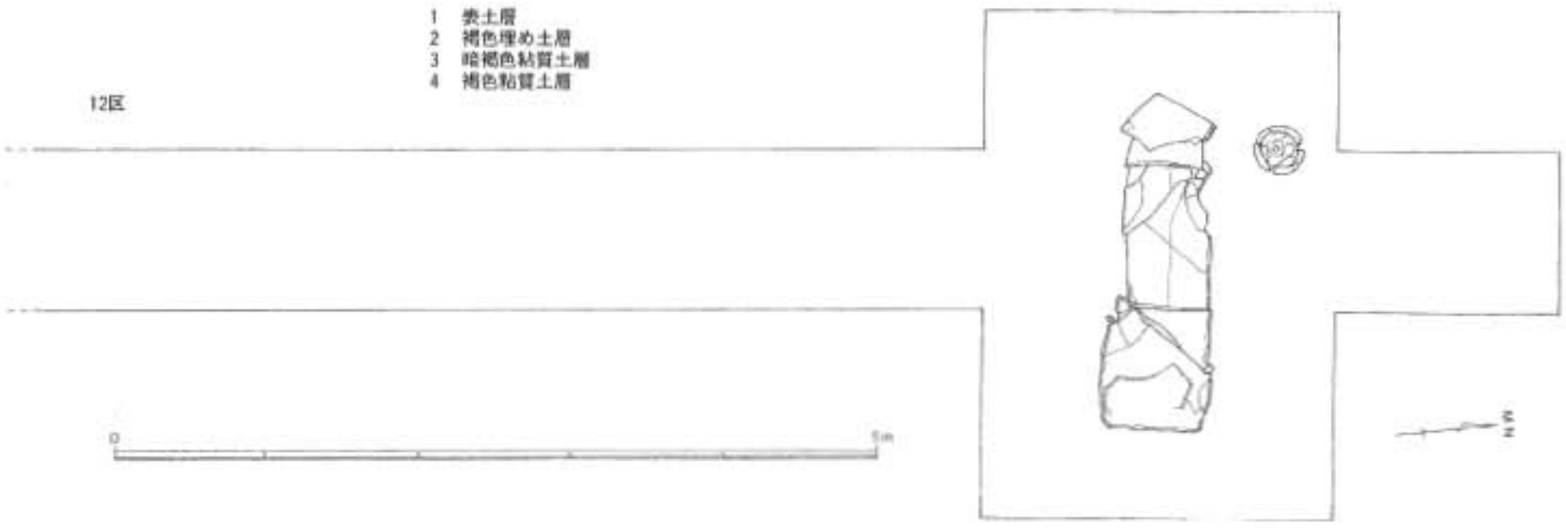
原ノ久保10区出土小児甕棺墓（第50・52図１・２）

10区の暗褐色粘質土層から褐色粘質土層を掘り込んで出土。須玖Ⅰ式の二つの甕を合わせて使用している。長軸は南西方向に向けられ，両方ともほぼ完形である。第52図２は下甕でほぼ水平に置かれている。口縁部は逆Ｌ字形で外側端部は丸くおさめられ，内側にわずかに凹みをもち尖がり気味におさめられている。胴上部に最大径をもち，底部はあげ底になっている。外側はハケ目調整されているが，かなり摩耗している。胎土には石英を多く含み，白い砂粒も見られる。高さ35cm，口縁外径28.6cm，最大胴径27.8cmを測る。色調はにぶい橙色を呈する。なお水抜きの穿孔は認められない。１は上甕で下甕よりひと回り小さい。口縁部は平坦部がやや凹み内傾している。下甕と比較すると口縁の幅と厚味が大きい。外側口縁の一部に６個の刻目が幅1.5cmの幅で施され，直下はナデ調整され，断面三角形の貼り付け突帯が一条巡る。胴部から底部にかけては丁寧なハケ目調整が施されている。器表面にはススの付着があり，内側の底部近くには黒い付着物が見られる。底部は上げ底である。色調はにぶい褐色で胎土には長石，石英，角閃石が含まれる。焼成は良好で，器高32.5cm，口縁外形27.8cm，最大胴径22.3cmを測る。

1　表土層
2　褐色埋め土層
3　暗褐色粘質土層
4　褐色粘質土層

1　表土層
2　褐色埋め土層
3　暗褐色粘質土層
4　褐色粘質土層

12区



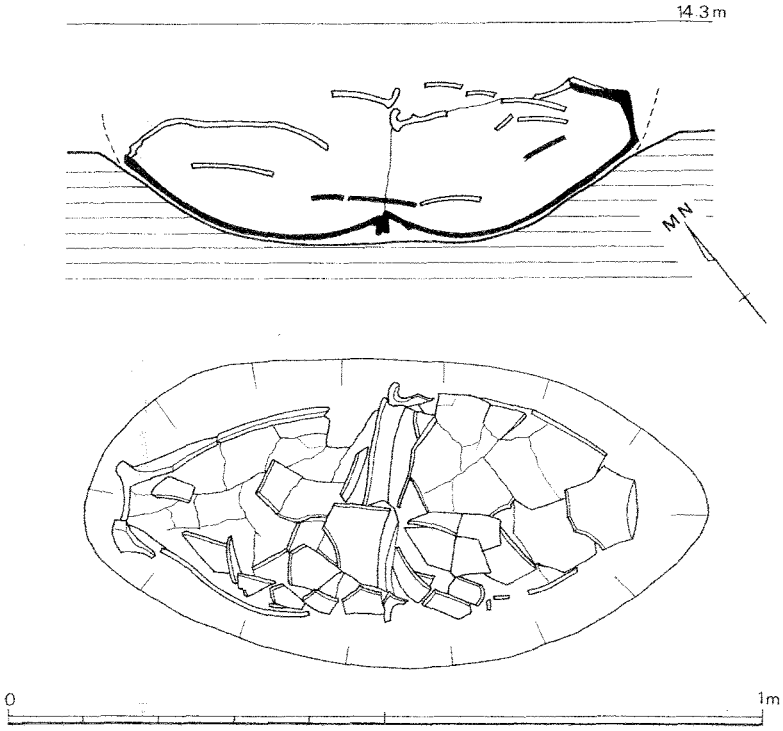
第49図　原ノ久保11・12区出土遺構及び土層（1／40）

原ノ久保11区出土小児甕棺墓（第51・52図３・４）

10区出土の合口小児甕棺は，長軸を南西に向けて，10区出土の甕棺とほぼ同じである。出土状況は上土が削平されており，耕作土直下からの出土であるため破損が著しいが，半分程は残存している。下甕の口縁部は内側から外に向って傾斜し，端部は丸くおさめられ，内側は尖っている。口縁直下はナデ調整され，一条の断面三角形の貼り付け突帯が巡る。最大径は胴中央部に位置し，底部は若干しまり平底である。ハケ目は全体に施されたと思われるが，底の方だけに残り大部分が摩耗している。胎土には石英と白い砂粒を含み，焼成は良好で色調黄褐色を呈する。器高は41cm，口縁外径34cm，最大胴径32.2cmを測る。上甕は下甕よりもひと回り小さい。口縁部は外側に傾き全体が丸味をおびナデ調整されている。直下には断面三角形の貼り付け突帯が一条巡る。外側はハケ目調整されていたと思われるが摩耗が著しい。底部はわずかに上げ底。器高は31.3cm，口縁外径30cm，最大胴径26cmを測る。胎土には白い砂粒や石英を含む。焼成良好で色調は明褐色を呈する。この甕棺は両者とも須玖Ⅱ式であり，10区出土の甕棺墓より新しい。

原ノ久保12区出土石棺墓（第53図）

暗褐色粘質土から褐色粘質土にかけて検出された石棺墓である。蓋石は長さ2.18m，最大幅0.62mで，５枚の板状安山岩が乗っている。蓋石は周縁が丁寧に打ち欠いて形が整えられ，ヨロイ蓋状に積まれている。蓋石を取り除くと，細長い長方形の土壙が掘られ，長軸の両側に側板が対になった状態で立てられている。そして床面には頭部と思われる所に１枚の板石が置かれているだけである。中は一部空洞になっており，蓋石は南側に傾斜が見られた。状況から石蓋土壙墓とも考えられるが，２枚



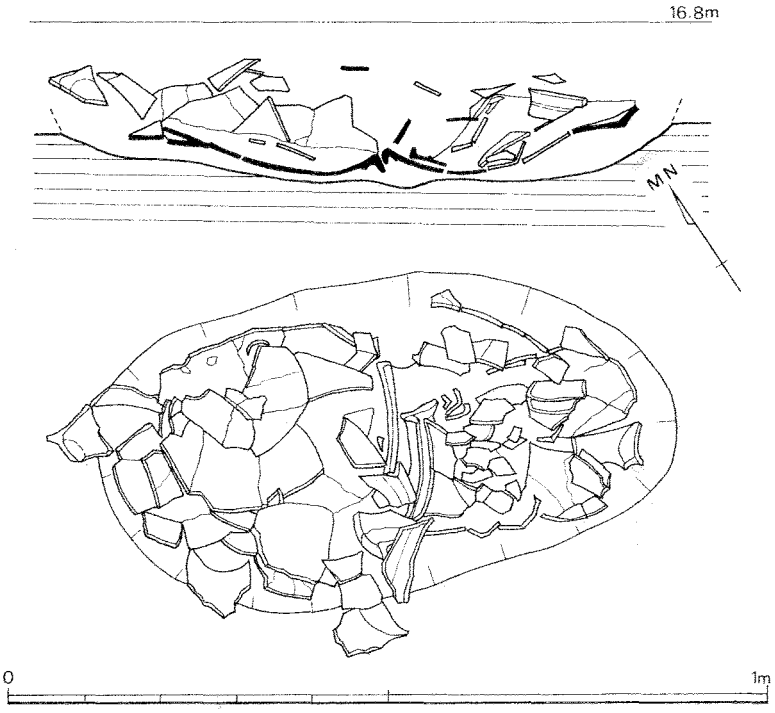
第50図　原ノ久保10区出土小児甕棺実測図（１/10）

の側板があることから，箱式石棺墓の変形とも受けとれる。副葬品は何も認められなかった。従って時期的なものは不明な点があるが，ただ，石棺墓の西北30cmの所から第53図１のように，丹塗高杯が出土した。逆になっており脚部は失われている。内外ともに丹が塗られて口唇部には暗文が施されている。口縁は外側に傾斜して内側は尖がり鋤先状を呈している。口縁直下外側には断面三角形の一条の貼り付け突帯を巡らしている。胎土には石英や雲母を含み緻密な仕上がりである。口縁外径は30.5cm，杯部の深さ8.5cmを測る。２も１のすぐ北側から出土したものである。口縁部は大きく朝顔状に開き，外側端部は方形状になり，わずかに凹ませ気味におさめている。頸部はほぼ直立して外湾するが，胴部にはM字の貼り付け突帯を一番出張った部分に一条巡らしている。底部はよくしまり平底である。外側には全体を丹で塗り，頸部には暗文を施している。内側は頸部から胴部上面にかけて丹を塗っている。非常に均整のとれた土器であるが，縦半分しか残存していない。胎土には長石，石英を含み，焼成良好。器高27.6cm，復原口縁径31.2cm，最大胴部26.9cmを測る。１・２の土器はいずれも弥生中期中葉頃であり，石棺墓に供献した土器と考えるならば，やはり同時期が考えられよう。

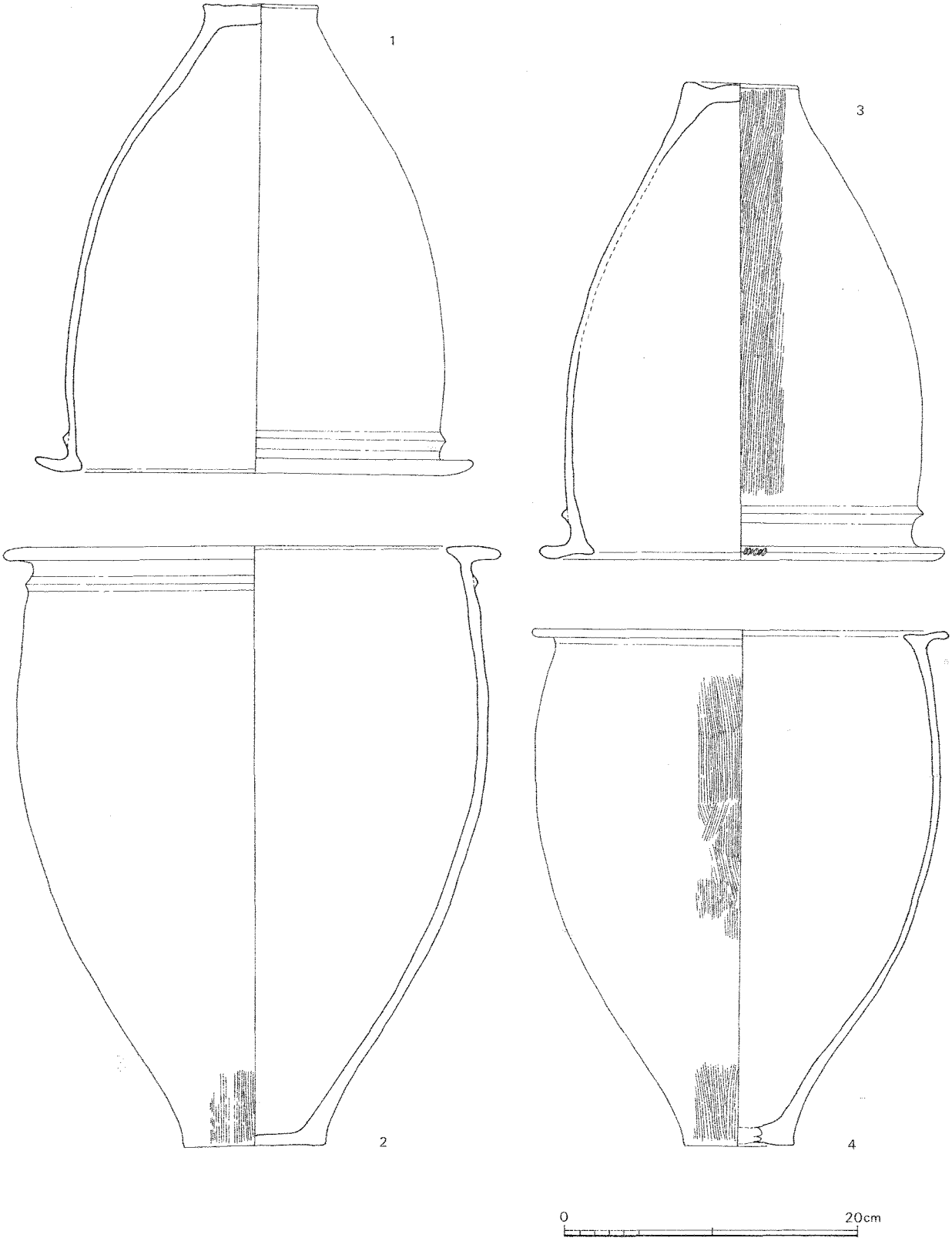
(4) 遺　物

土器（第54図１～15・第55図１～11）

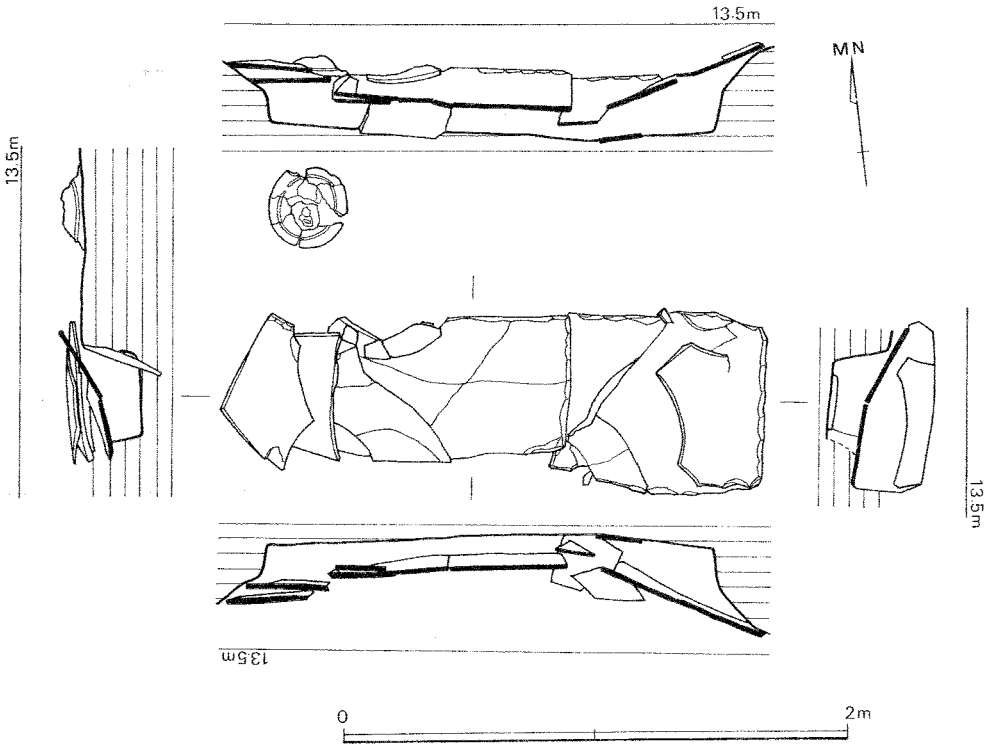
ここに図示した遺物はほとんどが10～12区出土の土器である。１は器形が鉢か甕かはっきりしないが，口縁は平坦で外側に丸くおさめられている。胎土には石英を多く含み，雲母も若干見られる。２～４は逆Ｌ字形の口縁平坦部が外側に傾斜し，端部が丸くおさめられた須玖Ⅱ式の甕である。３



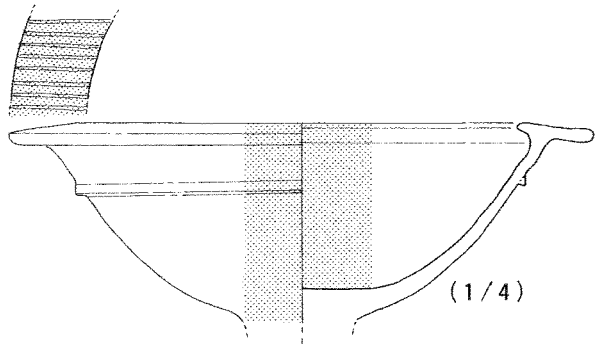
第51図　原ノ久保11区出土小児甕棺実測図（１/10）

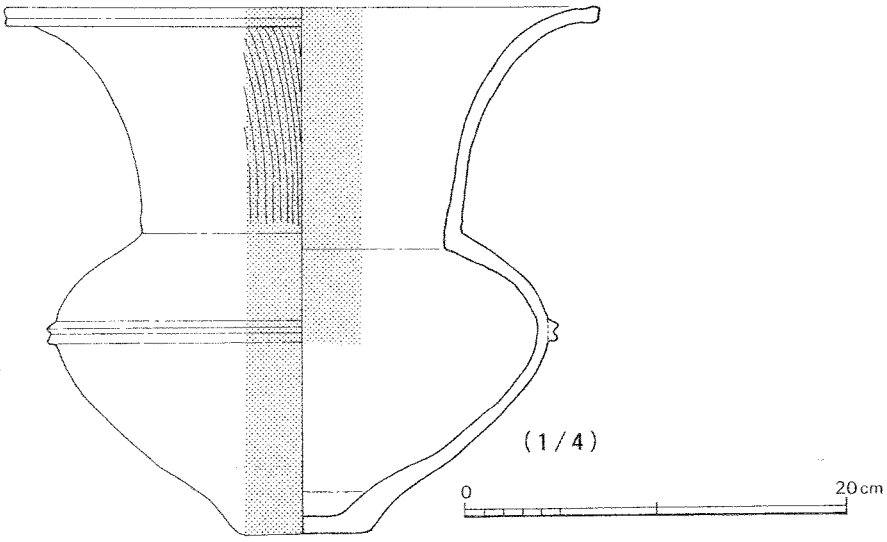


第52図　原ノ久保10・11区出土小児甕棺実測図（1／4）



石棺墓実測図（1/40）





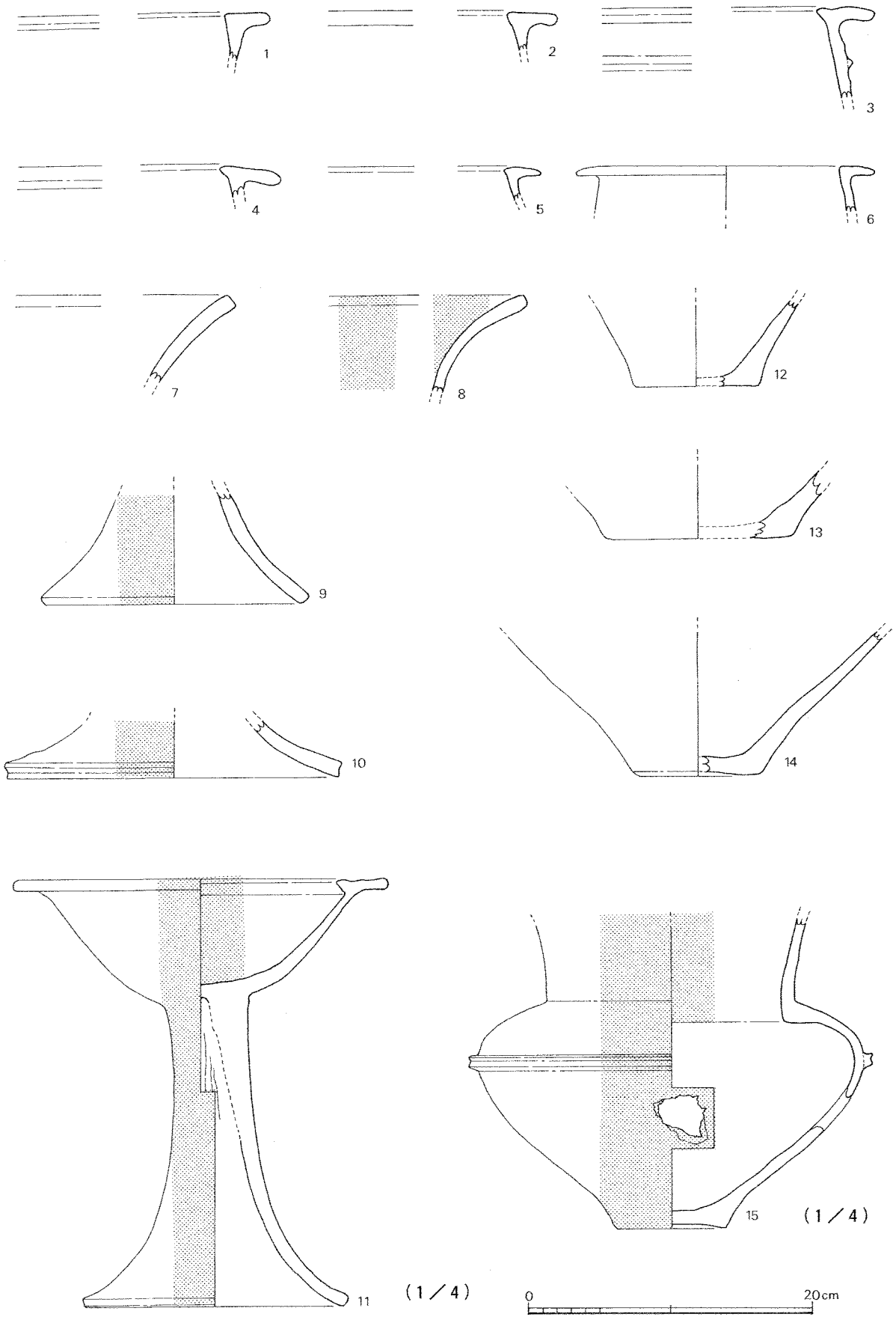
第53図　原ノ久保12区出土石棺墓及び土器実測図

は口縁直下に断面三角形の貼り付け突帯が巡る。４は口縁直下が直角に近いしまりをしている。胎土には石英，雲母を含んで焼成も良好である。５・６は小形広口壺である。器表が摩耗しているが，丹が塗られていたと考えられる。胎土には石英，白い砂粒，赤色粒を含み，焼成はやや甘い。７・８は広口壺の口縁である。８は外側に丹塗りが一部残る。口縁端部はわずかに凹んでいる。胎土には石英，雲母，白い砂粒を含み焼成は甘い。９・10は丹塗り高杯脚部である。胎土は精選された土で緻密である。11は丹塗りの高杯である。器高30cm，口縁外形26.6cm，杯部の深さ7.3cmを測る。口縁は内側にやや尖がるようにおさめられ，わずかに凹みをもちながらほぼ水平に外側に伸び，端部は方形におさめられている。胎土には石英，白い砂粒，長石を含み焼成は良好である。12～14は底部である。12・13は甕，14は壺底部で，外側にわずかに丹塗り痕が認められる。15は広口壺転用の小児甕棺である。口縁部分は意識的に欠かれたと思われるが，約縦半分が現存している。器表面全体と口縁から頸部にかけての内側に丹が塗られている。胴部は大きく張り出し最大径の中心は上部に位置し，断面M字突帯を貼り付けている。突帯直下には径約3.5cmの水抜き孔があけられている。底部はあげ底で径８cmを測る。胎土には石英，長石，白い砂粒が含まれる。出土状況については，10区３の暗褐色粘土層からであるが，２次的に動いている。しかし第50図の小児甕棺墓も近くから出土していることから小児墓が複数存在していることが推測される。

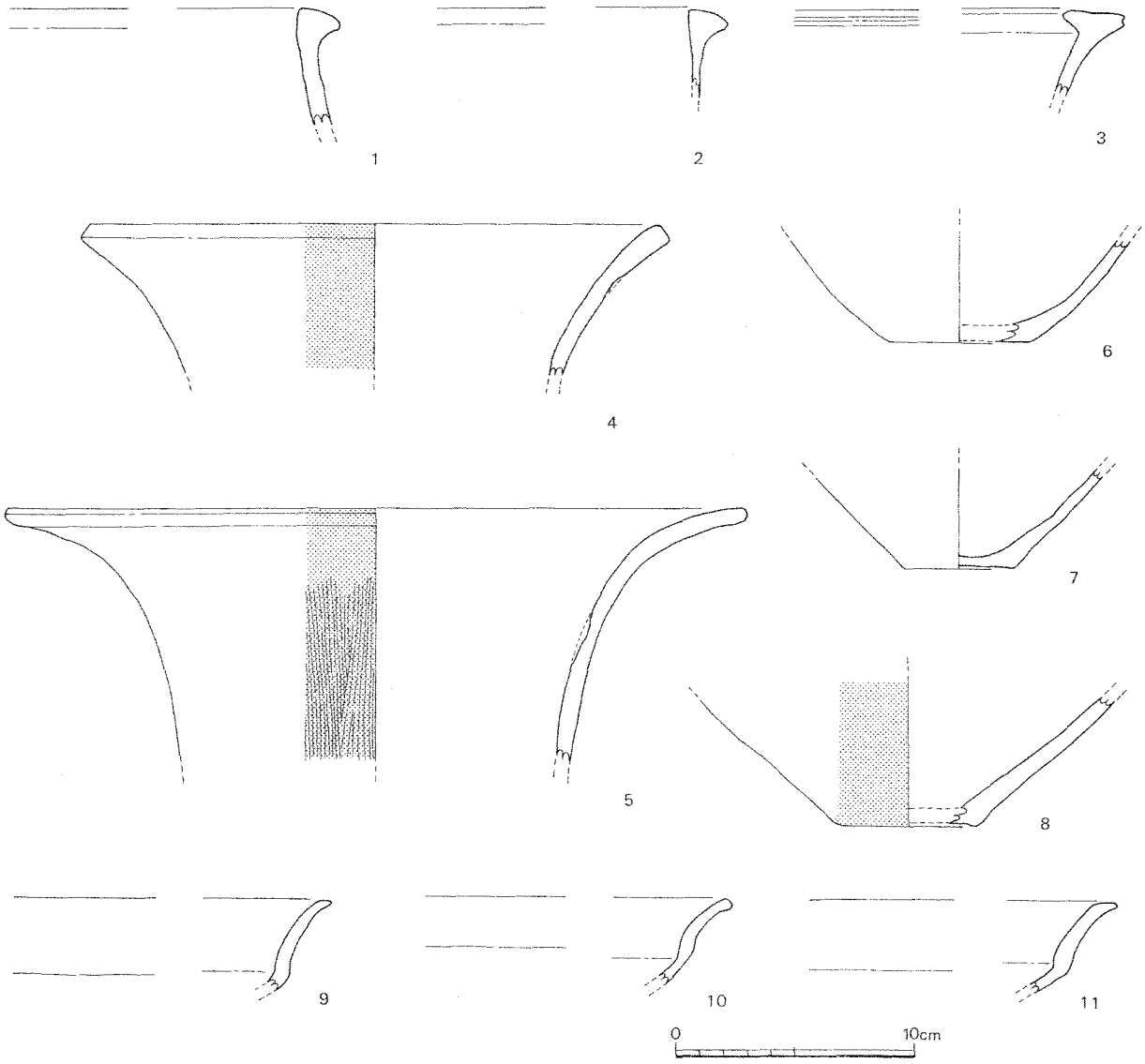
第55図１～11の土器は11区から出土した土器である。１は口縁部が外側に短く張り出し，断面三角形を呈する甕である。胎土は粗く石英，長石，白い砂粒，雲母を含み焼成は良好。２は小破片で器形が判断できないが壺の可能性も考えられる。胎土には石英，雲母を含み焼成は良好。３は広口壺口縁で内側に鋤先状に尖がり，口唇部は平坦で端部に一条の沈線を入れている。胎土には石英，長石を多く含み焼成は良好。４・５は広口壺口縁で内外に丹が塗ってあるが，５は縦にミガキが施されている。口唇部は４が角ばっているのに対し，５は丸くおさめられ，ともに朝顔状に大きく外反するタイプである。５の復原口径は31.2cmを測る。胎土は精選され緻密で石英，雲母を含み焼成は良好。６～８は底部。６は平底で立ち上がりから丸くふくらみをもつ。外側はミガキが認められる。器壁はうすく鉢状になると思われる。７・８は丹塗りの壺底部で，底はわずかに上げ底である。胎土は緻密で石英，雲母，赤色粒を含む。９～11は高杯の杯部である。口縁端部を丸くおさめ，頸部が内湾し，胴部がＬ字形を呈する。胎土には石英，長石，雲母，赤色粒を含み色調は橙色で焼成はやや甘い。原ノ久保地区出土の土器は11区が弥生中期後葉から後期にかけての時期に対して，10・12区出土の土器は弥生中期中葉から後葉にかけてが主体と考えられる。

ガラス玉（第56図）

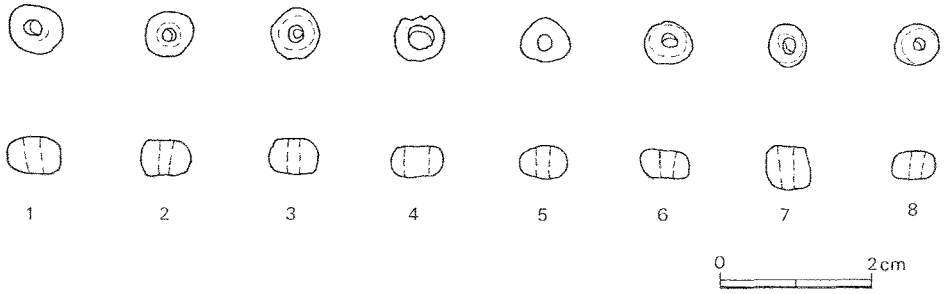
４区は原ノ久保Ａ地区として調査された墓域の南側にあたる住宅地の中に設定した。発掘してみると，粘土を取るために全体が掘られ，その後に埋め戻されていたが，その埋め土中からガラス玉が８点採取された。いずれも径が５～７㎜，厚さ４～６㎜を測り，淡いブルーを呈している。おそらく，あまり離れていない地点から客土されたもので，弥生時代のものと考えられる。



第54図　原ノ久保10・12区出土遺物実測図（1／3）



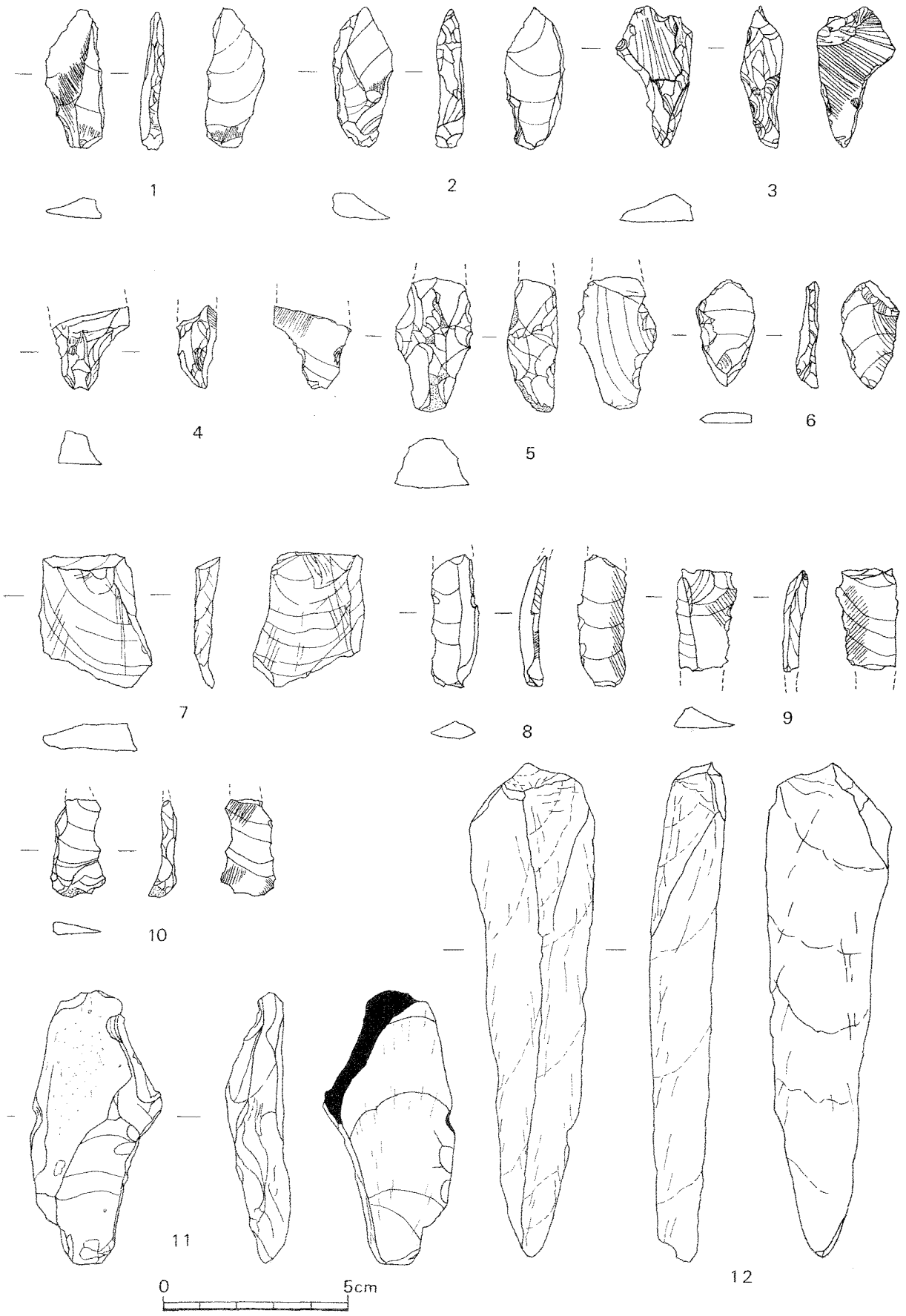
第55図　原ノ久保11区出土遺物実測図（１／３）



第56図　原ノ久保４区出土ガラス玉実測図（１／１）

石　器（第57図）

原ノ久保地区でも広い範囲に渡って旧石器が出土している。１・２はナイフ形石器である。１は９区褐色粘質土出土で良質の黒曜石剥庁を使用している。基部端部は丁寧な剥離を行い，両側も刃潰しを行っている。刃部は斜行し，うすくシャープに仕上がっている。２は10区表土層出土。黒曜石を素材としているが，表面は灰黒色を呈している。長さ3.7㎝，最大厚0.5㎝，重さ2.12ｇを測る。刃潰しの部分は厚みがあり刃の部分は１と比べると短くなっている。長さ3.7㎝，最大厚0.7㎝，重さ4.1ｇを測る。３・４は台形様石器，３は４区表土層出土で黒曜石を利用。基部を両側から剥離調整している。右側は直線に，左側は湾曲している。刃部の一部を欠失しているが，斜行するものと思われる。４は４区表土層出土。基部だけが残り刃部を欠失している。５は４区表土層出土。良質の黒曜石の厚みのある縦長剥片を利用した，尖頭状石器であるが，先端部を欠失している。基部には一部自然面を残し，未製品の感じもある。６～10は黒曜石製剥片類である。11はサヌカイト剥片で片面に自然面を残している。１区褐色粘質土層出土。12は玄式岩質の縦長剥片を利用。長さ13.3㎝，最大厚1.7㎝を測る。



第57図　原ノ久保地区出土石器実測図（２／３）

Ⅳ　まとめ

平成12年度国庫補助事業に伴う範囲確認調査は，芦辺町域で実施した不條地区の調査で弥生前期末から中期初頭にかけての溝２条や，中期前半の土壙，柱穴状小穴群，中期後半の土壙などを検出している。これらの遺構は平成10年度船着き場付近水路等状況調査で確認したもので，丘陵北西部低地の遺構の拡がりがさらに鮮明になった訳である。しかも旧河道に囲まれた微高地上の住居域と考えられる部分や，前期末から中期初頭にかけての溝は生活や農業用排水路と考えられることも分かってきた。

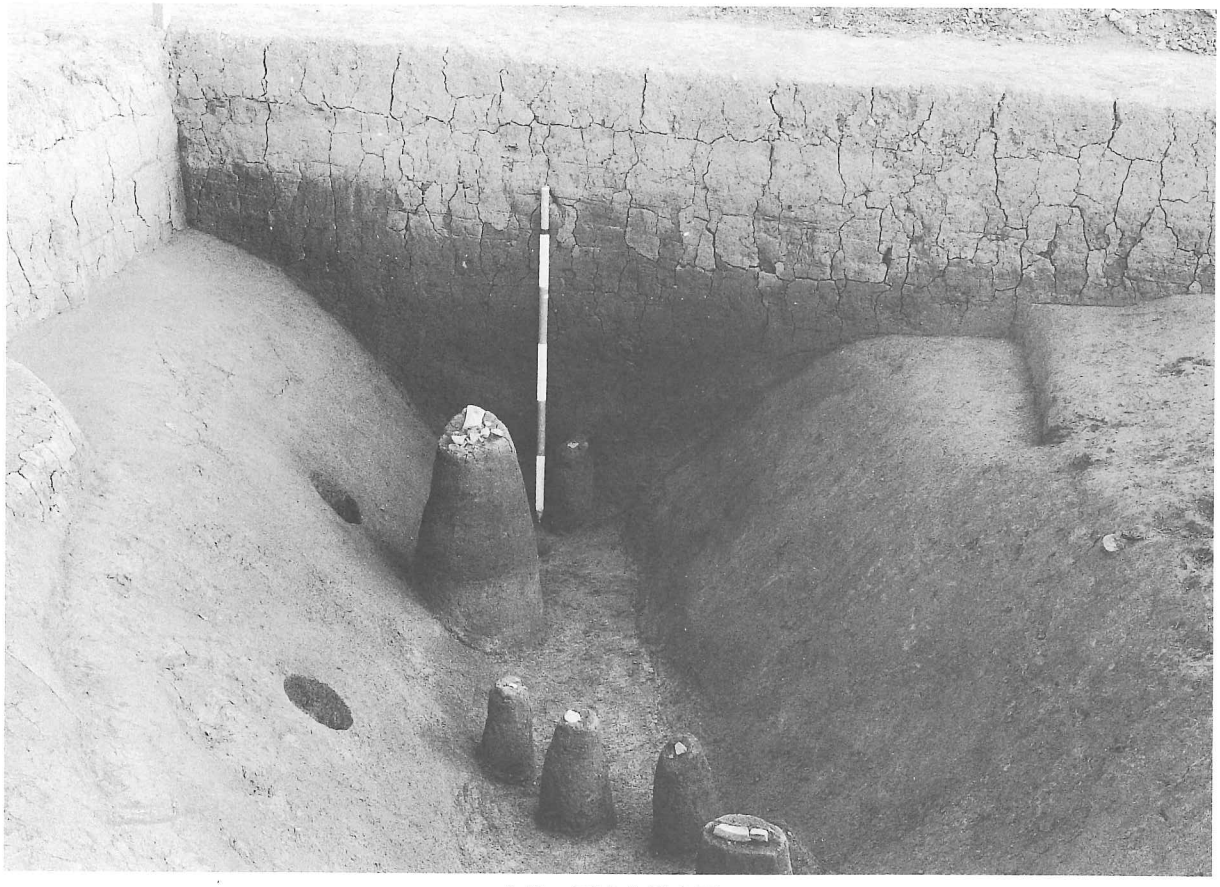
そして遺物も前期末の土器をはじめ，石庖丁，石鎌，石剣などの石器の出土は，住居域が確実に捉えられる資料となった。この地区ではこの他にも調査が進められており，新たな知見が加わってきている。

石田町域の調査ではこれまでと違った新たな発見があった。大川地区の濠の検出である。方向性からして新たな濠といえる。時期的には土器から見る限り，弥生中期を通じて利用されていたものと考えられ，後期には完全に埋っていたものであろう。ただ濠の性格については防御目的か区画性をもたせるものか不明であり，明らかにすることが今後の課題である。

原ノ久保地区では平成８年度調査の墓域が拡大することが期待されたが，住宅地の開発や畑地の造成などにより，消滅している部分も多くあることが分かった。11区では，南側の前回の調査区から弥生中期の遺物が出土していたが，今回は合口小児甕棺が検出され，墓域の範囲が拡がる可能性もでてきた。10区，12区では石棺墓と合口小児甕棺墓が検出された。石棺墓に副葬品は無く時期の決定は出来なかったが，周囲の土器の出土状況からして，中期中葉から後葉の時期と考えられる。また同時期の出土土器を見てみると，丹塗り土器が多く見られ，墓域と密接な関係にあると考えられる。

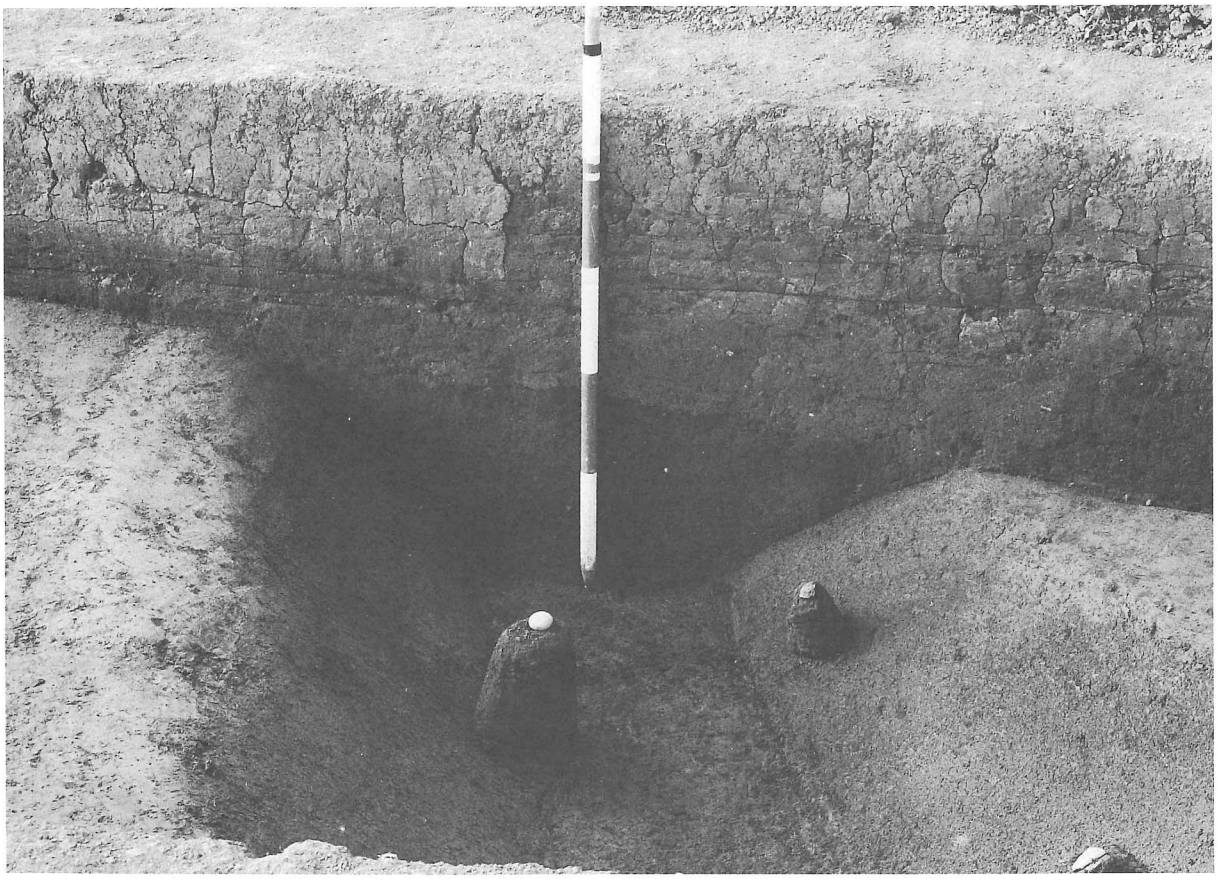
一方，浅い谷状地形を隔てた西側水田では，昭和52年から54年に実施した確認調査で濠が弧を描きながら東西方向に伸びていることが判明し，さらに聞き取り調査で，濠の内側にはかつて耕作のおり，石棺・甕棺等が出土したことが知られていた。その後平成７年の町道江里線拡幅工事に先立って行われた調査では，濠の内側から石棺の抜きとり痕で４基あったことが確認されており，この区域との関連性も追及する必要がある。さらに濠の方向性については，平成８年度の調査で検出された池田大原１区の濠と繋がるのかどうかの検証もする必要がある。

大川８区濠検出状況



大川８区濠北側土層

大川 9 区濠検出状況



大川 9 区濠東側土層

原ノ久保10区西側土層

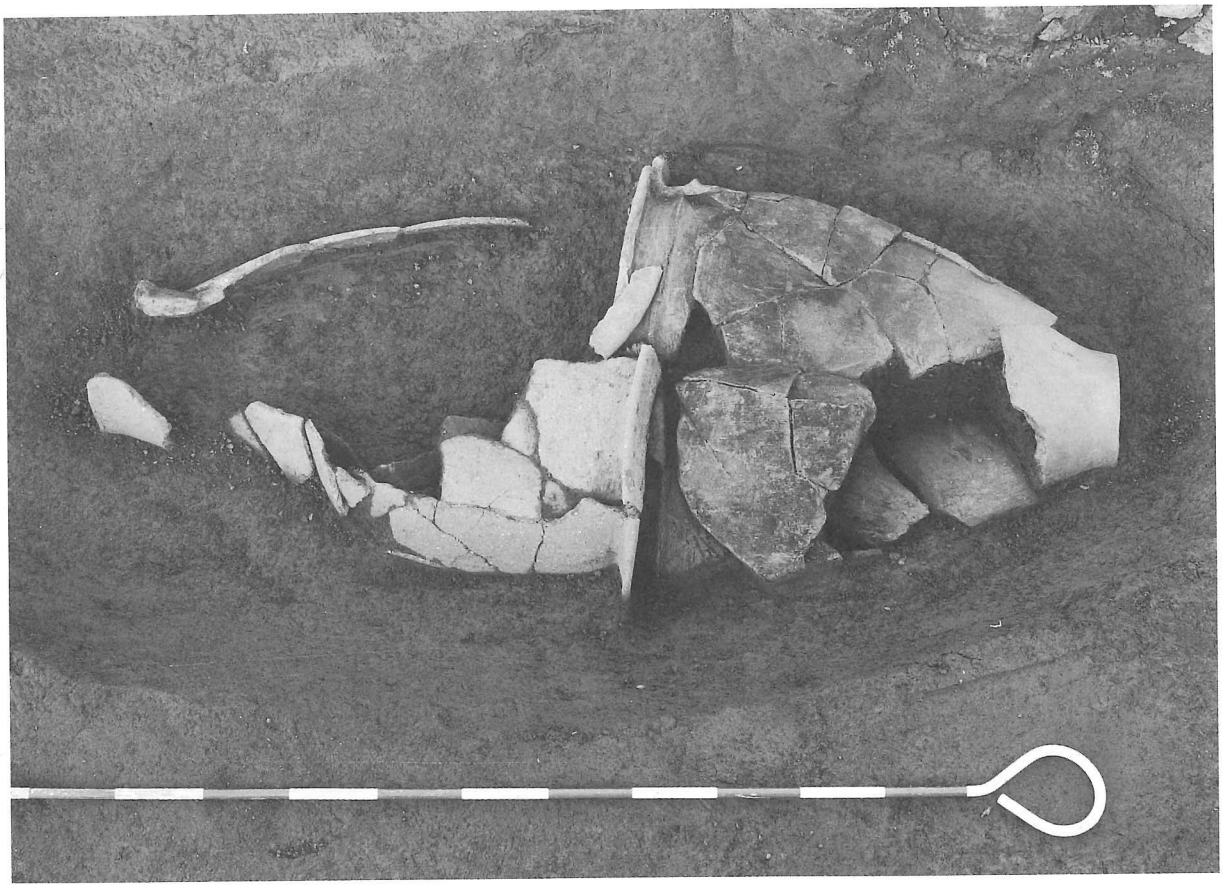
原ノ久保11区東側土層

原ノ久保11区遺物出土状況

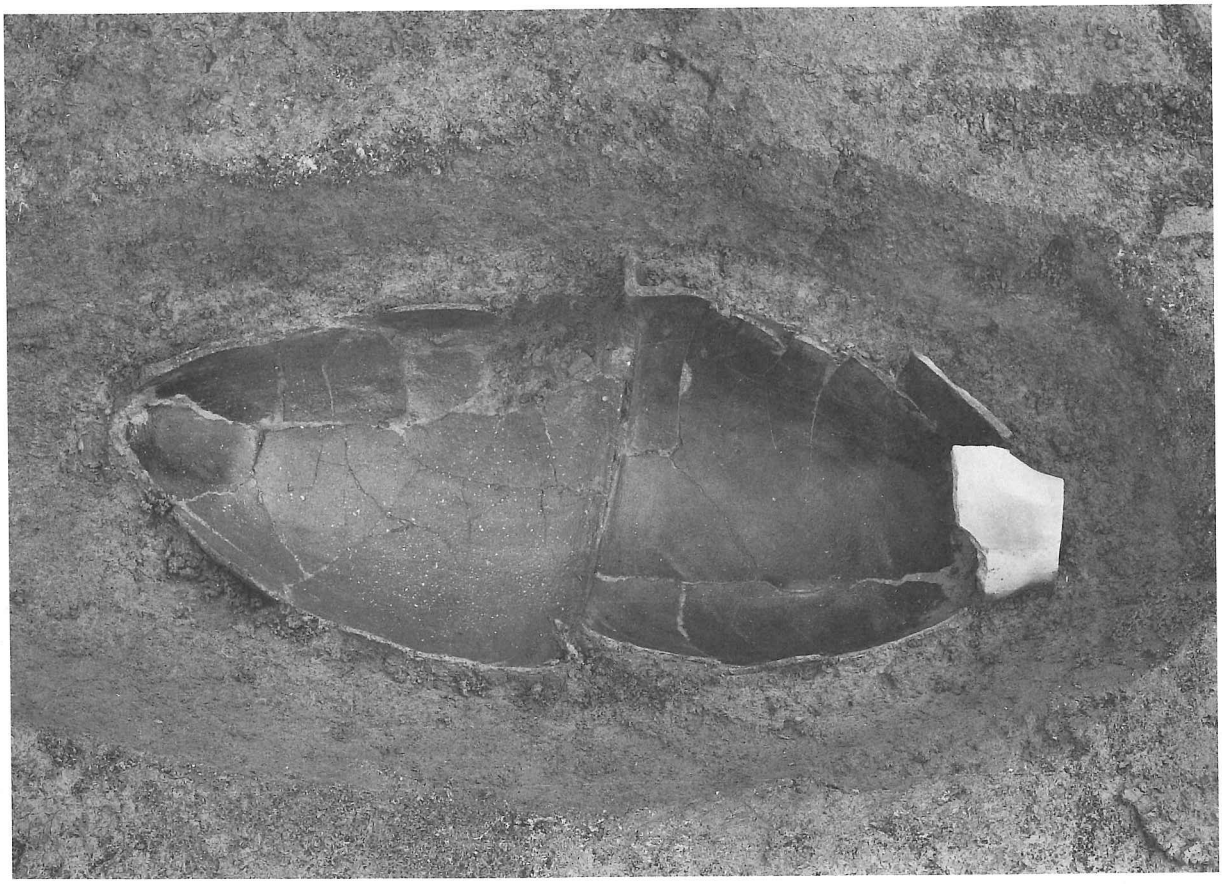
原ノ久保12区遺物出土状況

原ノ久保11区土器出土状況

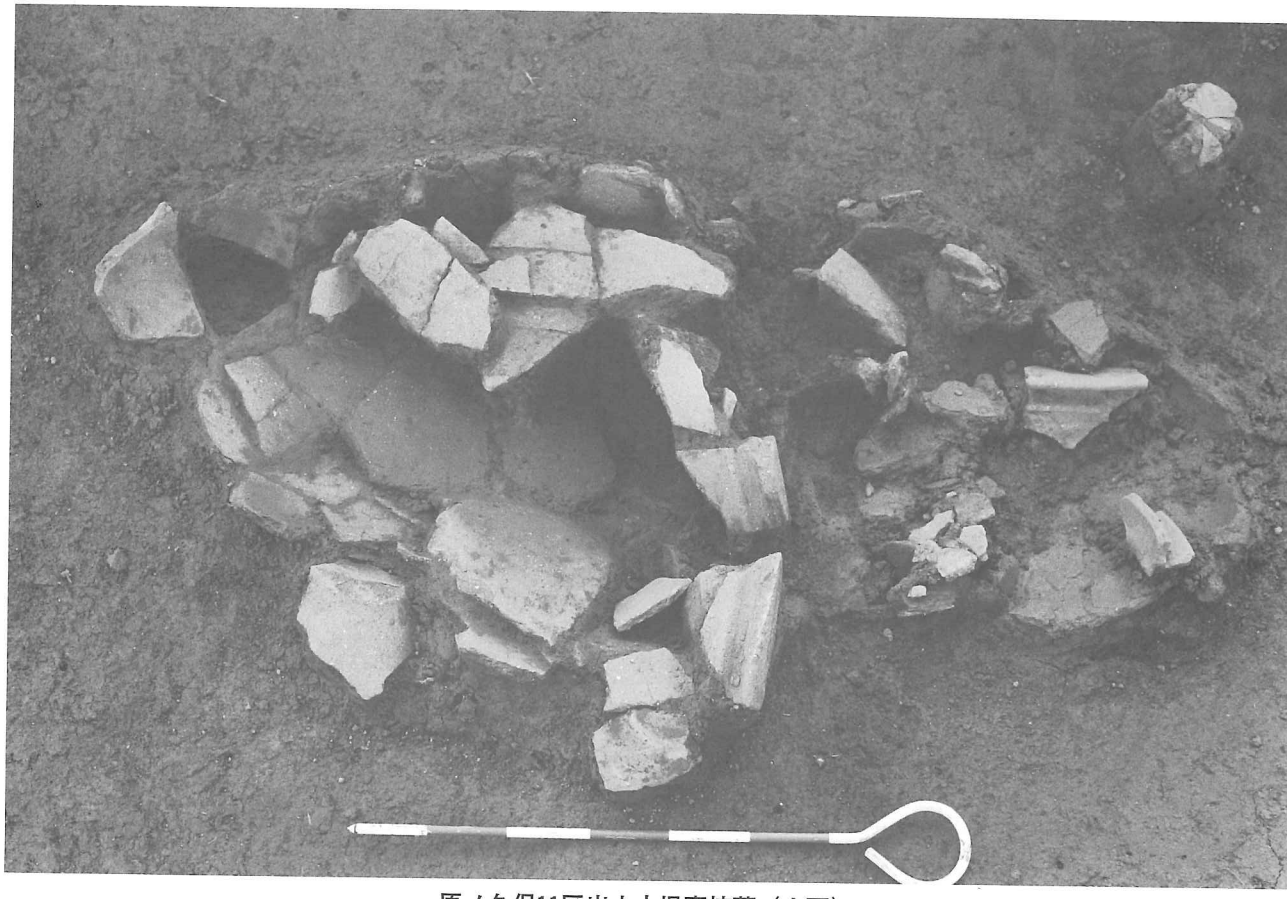
原ノ久保７区溝検出状況



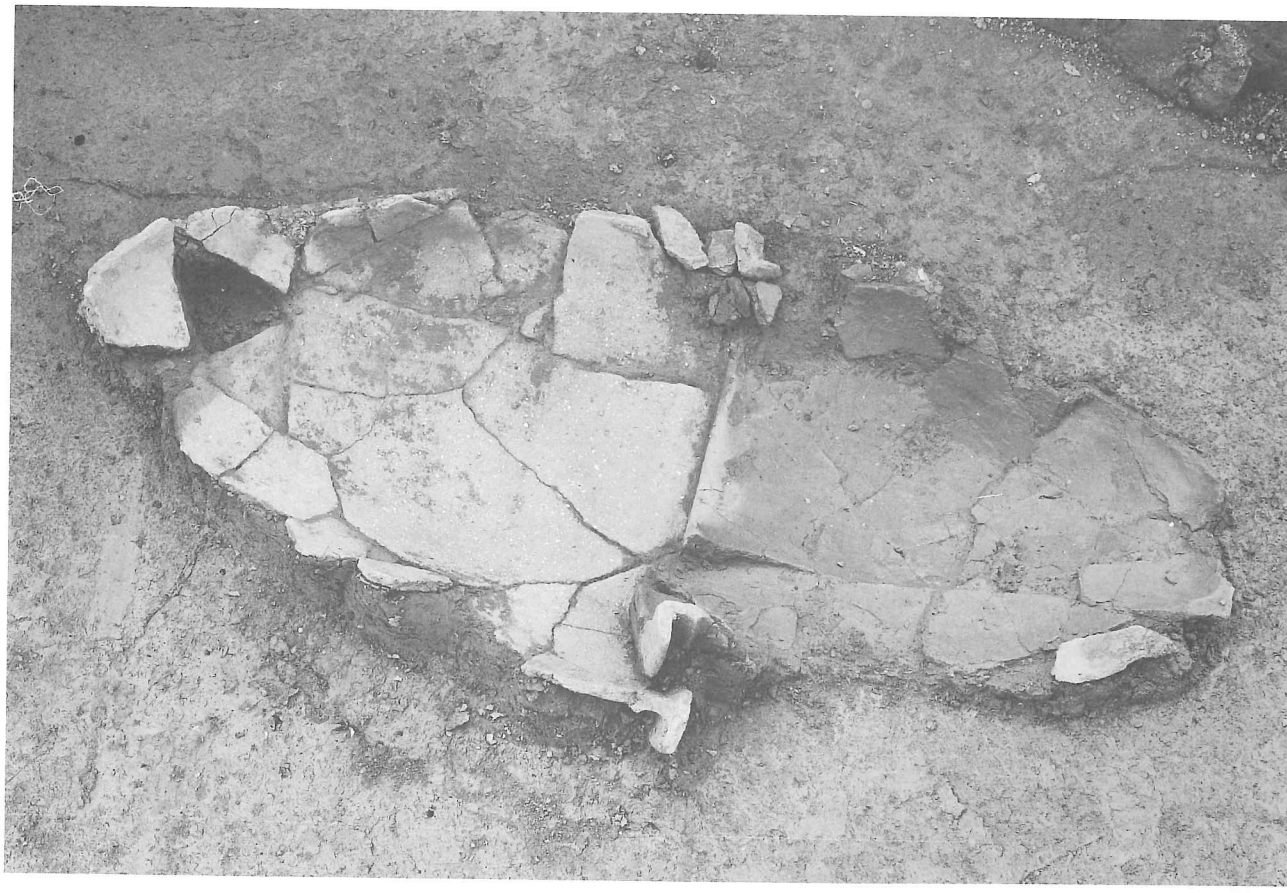
原ノ久保10区小児甕棺墓出土状況（上面）



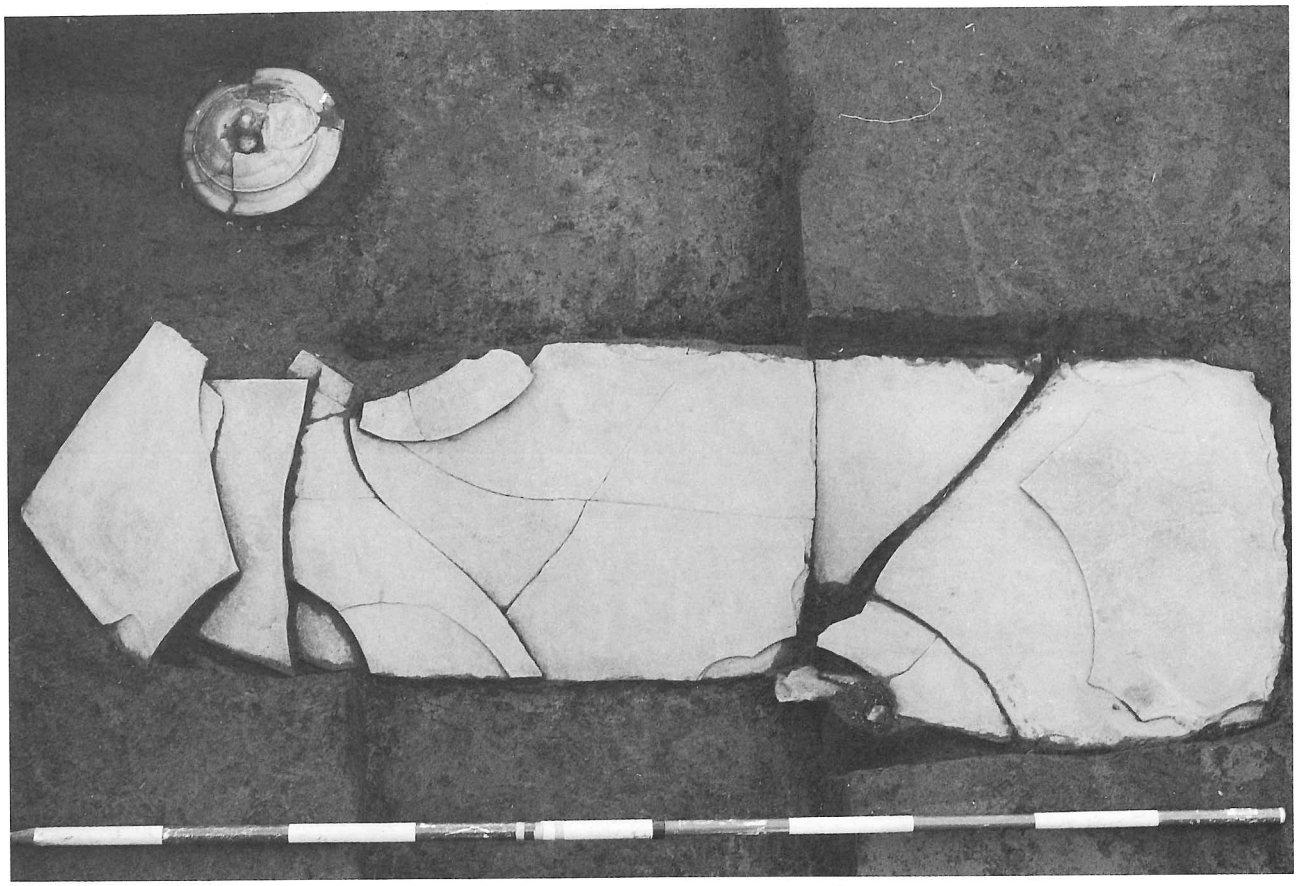
原ノ久保10区小児甕棺墓出土状況（下面）



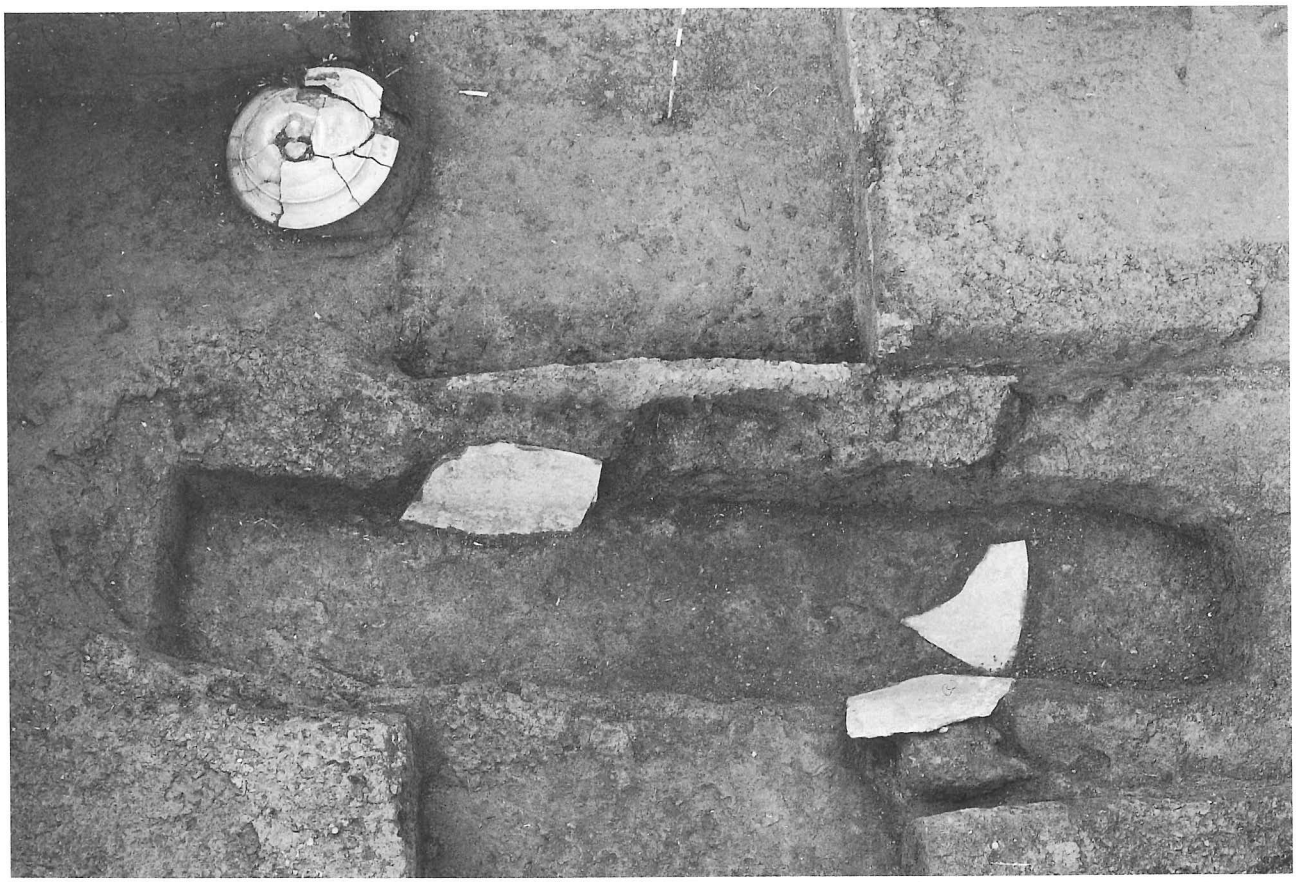
原ノ久保11区出土小児甕棺墓（上面）



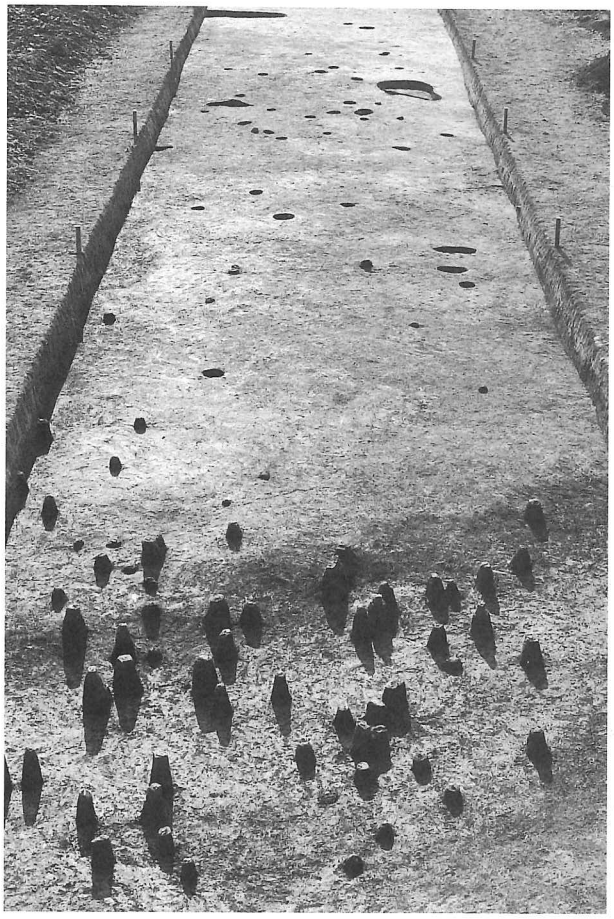
原ノ久保11区出土小児甕棺墓（下面）



原ノ久保12区石棺墓出土状況（上面）



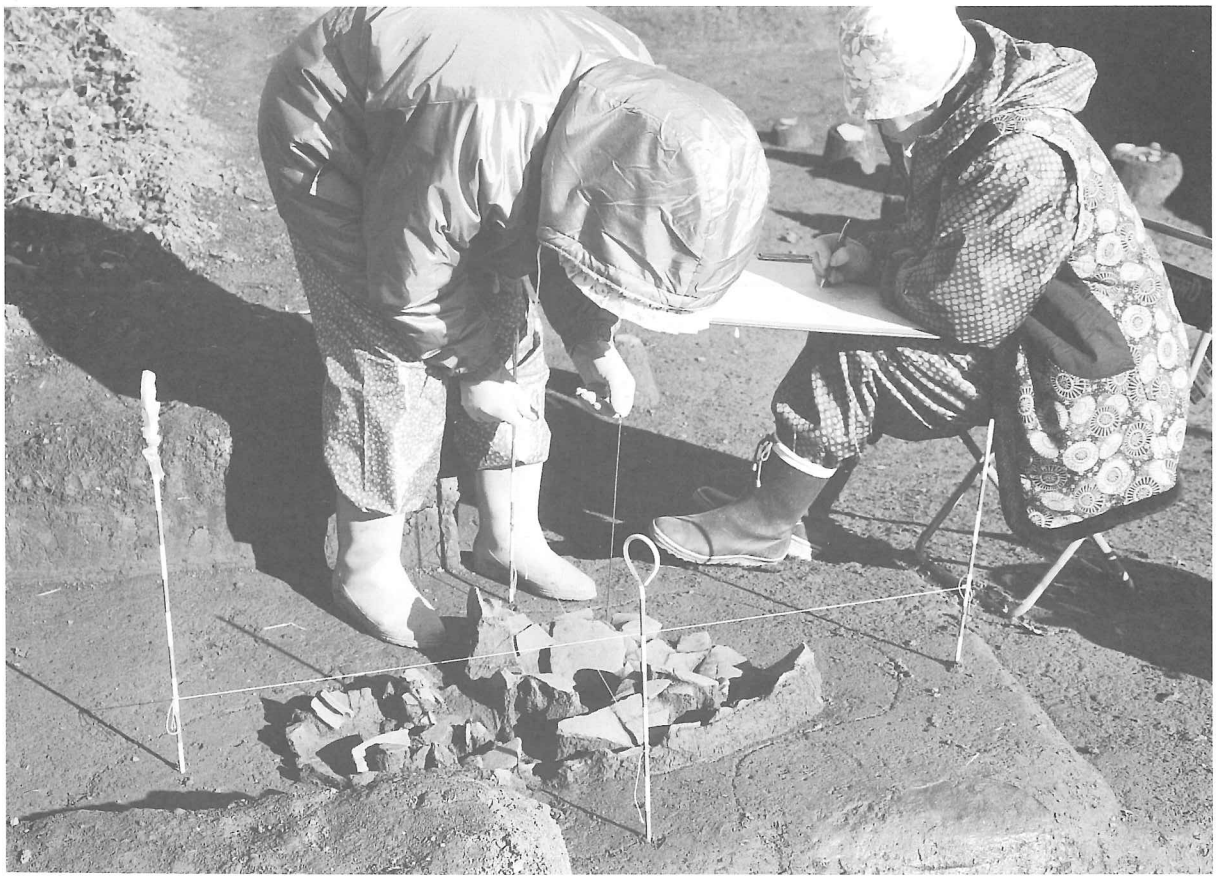
原ノ久保12区石棺墓出土状況（下面）



大川８区遺物出土状況
（手前は濠上面）

原ノ久保８区土層

大川８区濠調査風景



原ノ久保11区濠調査風景

報告書抄録

ふりがな	はるのつじいせき
書名	原の辻遺跡
副書名	原の辻遺跡発掘調査事業に係る範囲確認調査報告書
巻次	Ⅲ
シリーズ名	原の辻遺跡調査事務所調査報告書
シリーズ番号	第22集
編著者名	安楽　勉・町田　利幸・藤村　誠
編集機関	長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所
所在地	㊡811-5322 長崎県壱岐郡芦辺町深江鶴亀触1092番地1　TEL09204(5)4080
発行年月日	西暦2001年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
原の辻遺跡 (はるつじ)	長崎県壱岐郡 (ながさきけんいきぐん) 芦辺町・石田町 (あしべちょう いしだちょう)	42423 42424	73-10 72-92	33°45′24″	129°45′14″	20000508 ～ 20010117	1,347m²	原の辻遺跡発掘調査事業（国庫補助事業）

収録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
原の辻遺跡	集落 墓地	弥生時代 古墳時代	濠・溝 土壙 甕棺墓 石棺墓	弥生土器 朝鮮半島系土器 打製・磨製石器 ガラス小玉	

原の辻遺跡調査事務所調査報告書第22集

原の辻遺跡

2001．3．31

発行　長崎県教育委員会
長崎市江戸町2番13号

印刷　株式会社　昭和堂印刷